
アルカナの行方

干葡萄蔓草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカナの行方

【Nコード】

N8989R

【作者名】

干葡萄蔓草

【あらすじ】

2月14日、バレンタイン兼誕生日に異世界に転がり込んだ高校生ハル。牢屋に始まりなりゆきで城専属の騎士団に入団！？幼いころから重宝された美形のおかげで城内のメイドからはモテモテに！ところが彼、いや彼女はお年頃のJKだった。単なる女の子が、異世界に呼び出された理由って？冒険したい、でも勿論恋だってしたい！十七歳の女子高生が繰り広げる笑いありシリアスありのドタバタラブコメディ！

00 王子様の日常

あるかな

あるかな

こっちにおいで、あるかな

「付き合って下さいっ！」

目の前で顔を真っ赤にしてそう叫んだ女子生徒は、恥ずかしそうにもじもじと手を動かした。そしてうつむいたまま視線だけをこちらに向ける。

人気の無い教室、時刻は四時を少し過ぎたあたり。もうそろそろ下校時刻のチャイムが鳴る頃だ。

「……ごめんね、ちよつとそういうのは……」

勇気ある告白だったが、自分にはどんなに可愛い女の子が相手でも付き合えない理由がある。申し訳なさそうに呟くと女子生徒は顔を上げた。

その瞳一杯に涙が溜まっていて、罪悪感を掻き立てられる。

「じゃあせめて、これだけでも受け取ってください」

涙をこぼさないように堪えながら、彼女はクリーム色のセーターのポケットからラッピングされた何かを取り出した。名残惜しそう

にそれを見つめ「どうぞ」とこちらに向かって突き出す。

「今日はバレンタインですから……」

「ありがとう」

お菓子を渡した彼女は、背中を丸め教室から去って行った。

——「ごめんね……」

でもどうしても付き合えないんだ。

だって。

だって。

だって、私も女子なんだもん！

教室に帰ると下校時刻の三分前。生徒達がはしゃぐ間を通り抜け、私は自分の席に戻った。

「また後輩？」

途端に前の席の幼馴染、洋子ことヨーコが振り向いて尋ねてくる。ニヤリと笑ったその表情はすべてお見通しだとも言いたげだ。

「そう、しかも女の子」

「しかもっていうかあんた今まで女子以外から告白されたことないでしょ？」

「そつだよ無いよ。初めて告白されたのが中学で、以来総合十二回の告白を受けながら相手は全員女子だよ」

「いいんじゃない？ 王子なんだし」
その言葉に私は思いつき深い溜息をついた。

ちょうど十七年前の二月十四日、私はこの世に生を受けた。実家が剣術道場ということもあり幼い頃から父に剣道を叩きこまれ、中学に上がった時には既にいくつかの賞も受賞していた。

しかし悲劇はそこから始まる。

生まれつきの男顔。しかも剣道部ということもありみるみる女子生徒が集まった。しかもそのほとんどが私を『本物の男』だと思つて。

運動部のため普段から学校指定のださいジャージに身を包み、幸か不幸か男顔は乙女達の理想の顔へと序々に成長を遂げる。その結果ついたあだ名は『ださいジャージの王子様』——卒業式で最後の制服姿を見せた時に、今まで周りにいた女子生徒達は明らかに肩を落としていた。

そして高校二年生の今でもその状況は変わらない。

剣道もやめて、毎日ちゃんとスカートで登校しているのに『王子』を一目見ようと教室にやってくる女子高生達の視線は明らかに男に向けられる類のものだ。

「まあいつか……今日はたくさんお菓子もらえたし」

「さすが色男」

「女です！」

ちなみに本日は二月十四日バレンタインデー。あたしの十七歳の誕生日でもある。

そのため人様にもらった誕生日プレゼント兼バレンタインのお菓

子が、朝持ってきた紙袋の中に大量に詰まっていた。

その重量にますます溜息は深くなる。

いつも着ている黒のコートを羽織り、私は一人教室から出た。ヨ

ーコはこの後委員会があるらしい。

膨れ上がった紙袋を蹴らないようにしながら、寂しく帰路についてた。

あるかな

「……」

あるかな

こっちだよ、あるかな

「……」

住宅街の道を進むあたしの耳に、幻聴が聞こえてきた。

なんだ、あるかなって。

長年の男扱いについて溜まっていたストレスが爆発したか。あるかも。

幼い少年のもののような甲高い声に私の気も少々滅入り気味。

まあいい。謎の声はともかくとしてあの角を曲がったらすぐに家だ。家に帰ったら女の子たちからもらったお菓子をたらふく食べることができる！

吹き付ける風にコートの襟をたてながら足早に角を曲がったその時。

目の前に広がる闇に、一瞬呼吸が止まった。

「……え」

おかしいことに、本来そこにあるはずのアスファルト製の道も、左右に建つ家も澄み渡った青い空も全部。

闇色に塗りつぶされていた。

気味の悪さに後ずさった背後にも、振り返れば眼前に黒がつきつけられるだけ。

な、なんだこれ。

見れば手とか荷物とか、とにかく私自信と私に触れているものだけはか弱く白い光に包まれている。そのほかはどの方向を向いても何も見えない。心なしか体の平衡感覚もおかしい。

そこへ、突如明るい光が見えた。

眩しい光は最初は小さかったが、やがてどんどん大きくなる。というか、こっちに向かって近づいてきている気がしないでもない。

この闇から出れるのならば、今はなんでもいい。

このときはただそれだけだった。

00 王子様の日常（後書き）

初投稿小説です……

拙い文章ですが、暇つぶしにでも読んでいただけたら幸いです（＾
－＾）／

01 昼間のある城

重々しい溜息が室内に響いた。

大きすぎるベッドに仰向けになって転がる彼は頭を抱えたい気分だった。目を瞑れば浮かんでくるたくさんの書類をいかにして捌くか。最近の悩みの種はこればかりで考え事していると夜も眠れなくなってしまう。おかげで彼の目の下にはうつすら影が浮かんでいた。

今日は数少ない公休日でとにかく体力を温存しようと横になったわけだが一向に睡魔は襲ってこない。それもそのはず、今はまだ日も高く昼を過ぎたばかりで寝るにはまだ早すぎた。

悶々と一人ベッドの上で考え事をしていた最中。

ドン、と寝室の隣の執務室から大きな物音が聞こえた。

音に反応して瞼を上げた彼は素早く身を起こすなり壁に立てかけてあった剣を取った。刀身を内に備える鞘が窓から差し込む日の光に鋭く光る。

寝室と執務室を繋ぐドアを音をたてないように開き、そつと中を窺えば机の上に黒い何かがうずくまって呻いていた。書類が崩れ落ちたその上でインク瓶が割れている。

「つつ……いたたた……」

黒い何かが動いたかと思うと声を発し、頭と思しきものがきよろきよろと辺りを見回す。ここがどこだか全くわからない、というよ
うな仕草に彼は苛立ちさえ覚えた。

どこの間者だ。

突然執務室に現れたその人影は彼に背を向ける状態で机の上に座り込んでいる。彼は少し距離を取ってその人影に低い声で問いかけた。

「何者だ」

その声に人影が振り向いた。黒髪に黒い瞳、肌の白い少年だ。この国で黒髪に黒目というのは珍しく、どこか別の国の人間である可能性が高そうだと彼は瞬時に理解した。

「……？」

ところが少年は彼を見ても動作一つ起こさない。きょとんとした顔でずっと彼を見つめている。その頬には黒いインクがべつとりと付着していて、間者にしてはお間抜けな光景だった。

その様子に彼はもう一度口を開いた。

「何者だ。ここで何をしている」

その言葉を聞いて少年は複雑そうに眉をひそめた。そして首を傾げたかと思うと「ああ！」と声を上げる。

「もしかして夢？ にしてもすごい夢だなー、どれどれ、今この人

喋ったように聞こえたんだけど……」

少年は机から下りると軽い足取りで彼に向かって歩いてきた。何の淀みも無い黒い瞳は彼の目を注視している。

「来るな」

その様子には彼は違和感を覚えた。敵にしてはどこか変だ。長年便利だと感じていた彼の殺気を感じする能力も目の前の少年を前に何の反応も示さない。殺気も敵意も一切感じなかった。

全身黒ずくめの小柄な少年は言われた通りピタリと足を止める。だが彼を見る目は変わらずまるで珍しい物でも見ているかのように呆けた顔をしていた。

「すごい、夢にガイジンが出てきたのって初めてかも……っていうか私、ガッコウから帰ってどうなったんだっけ？ あれ、家まで着いたっけ？」

ぶつぶつ独り言を呟き始めた少年に、彼は思わずフ、と笑みを零す。

——頭のおかしい侵入者か。

どちらにしろ敵には違いない。

彼は剣を置き少年に歩み寄るなり衣服の襟を掴む。

「わ、なんかすごい現実っぽい夢。バーチャルみたい。あれ、夢？ 夢だよなこれ——」

そして襟を掴んだまま後ろに倒れこみ、少年の腹を足で突いて背

後に投げ飛ばした。

昼間のシュヴァイツ城に、凄まじい音が響いた。

02 王子様の非日常

ゴーン

地面からビリビリと伝わる震動に私は目を開けた。

何故か冷たく硬い地面に雑魚寝状態。その現状に嫌でも脳みそが冴えわたってくる。待て、ここどこだ。今何時だ。私の荷物はどこいった。

地面に貼りついていていた頬を引っぺがして頭を上げる。ずっと冷たい床に寝そべっていたのか顔の右半分はちゃんと自分の血が通っているか不思議になるくらい冷えていた。

さて、まずは自分がどういった経緯でこんなことになっているのか。それを理解しなければいけない。

最初にわかるのは、ここが石造りの部屋——というより牢屋みたいなところだということ。しかも床面積だけは狭いくせに異様に縦長く、暗い色の石が高く内側に反るようにして積み上がっている。金属で出来たいかにも頑丈そうな扉が一枚、床との間から僅かにオレンジ色の光が漏れていた。牢屋というよりむしろ独房といった表現の方があっているかもしれない。

今のところの光源といえばドアの上についた金属の棒みたいなものの先っちょに申し訳程度についた小さなランテラ。あとは天井と床のぴったり真ん中ぐらいの高さにある、壁を切り取り格子の嵌めたようなところがぼんやりと光っているだけ。あそこがはダイレクトに外に通じているらしく、時々誰かの声がする。

まさか。まさかとは思うけど。

「誘拐とかっ……!？」

いやそれは無いな、と自分で呟いておきながら首を振る。幼稚園生、小学生ならまだしもこんなに大きい女子高生を誘拐とか、笑えてくる。

まずは記憶を辿ろう。学校でヨーコと話して、一人で下校。そこまではちゃんと覚えてる。で、帰ってる途中で変な声が聞こえてきて……

ようやく全部思い出した。しかし謎の少年の声で周りが暗くなつてその後いきなりこんなところにいるとは……うむむ、謎は深まるばかりだ。

それより今最も重要なことは私がとても腹ペコ状態であること。女の子たちからのプレゼントを食べるために昼飯を我慢し、腹の音を抑え、ようやくありつけると思ったら手荷物は消えていた。

「ああ、もう最悪だ……」

もしかしたらこれはとんでもない悪夢なのではないだろうか。寒くて薄暗い場所で腹ペコの私。夢でも嫌なのに、これ本当に現実だったら。まさか現実だとは思えないけど現実だったなら。

頭を抱えようとして後頭部に右手を添えた途端。

「いたっ」

鋭い痛みが走った。離してしまった手のひらでもう一度そつと触ると、わずかに皮膚が膨れ上がっている。

—— たんこぶ？ 一体いつ……

その痛みは紛れもない本物の『痛み』だ。夢なんかじゃない。これ、現実だ。

独房みたいなところにいるのも現実。じゃあ夢だと思ってたけど。

白い光から出たその先は、見知らぬ部屋の机の上。その時はまだ学校指定のバッグもお菓子の入った紙袋も手の中にあった。

しかし見知らぬ男が部屋に来て、それで色々言っているうちに襟掴まれて荷物持ったまま視界が回転——

投げられた！

どつりで体中が痛いはずだ。しかも人間の体のなかで結構大事な腰までキリキリする。

あの男、どつからどう見ても外国人なのに日本語流暢だったなあ。髪こそ黒かったけど目の色が綺麗だった。

と、例の男を思い出したところでどつと冷や汗が流れる。

投げられる前に向けられた敵意に満ちた眼差し。片手には剣のような物まで持って、そして私は気絶させられこんなところにいる。

—— 死亡フラグ…… 立ってる？

いやまさか、男に投げ飛ばされたくらいでなんだ。別に私は悪いことしたわけじゃないんだし！

冷たい地面に座り込んでそんなことを考えていると「おい」と上から声がかかった。

顔を上げると、例の格子の嵌った小窓のようなところから誰かがこちらを見下ろしている。どうやら金髪の青年のようで、背後の光で髪が光った。

「ぶっ」

しかし青年は私を見るなりまるで面白いものでも見たかのように吹き出した。

「なんだあの間抜け面」

「あ？」

思わずとびきりの低音ボイスでそう聞き返してしまう。こんな状態ではあるけれど、初対面の人間に対してあまりに失礼過ぎやしないか。

「おー、恐い恐い。後半刻で調査が入る。それよりお前、団長の部屋に忍び込んだんだって？」

「団長オ？」

団長って何の？ 応援団？

ともかくその団長が例の男であることはすぐわかった。なんといつか、体中から発する殺気が尋常じゃなかったからだ。

『団長』と呼ばれるくらいだから結構な地位の持ち主なんだろう。なんとたつて長がつく！長だよ長！ 頭なんだよ！

「なんだよ、お前そんなことも知らずに忍び込んだのかよ、間抜けな間者だな」

「患者？」

聞き返したその言葉を青年はあっさりスルー、格子窓から姿を消した。

再び静寂に包まれた独房で、私の背中を流れる冷や汗の量が倍になる。

——死亡フラグ……立っちゃったよ……

お偉いさんの部屋に忍び込んだだけでいきなりこんなところに放り込まれてしまうくらいだから今後の行く末なんて決まってる！

絶対暗殺されちゃう！

「どどどど、どうしよう……私が死んだら、女の子達のお菓子は誰が食べてあげるんだ……！」

独房の気温と脳内で繰り広げられる恐ろしい想像に歯がうまく噛み合わなくなる。

——……待てよ？

さっきの苛つく青年が言っていた「半刻で調査」という言葉にピンと来た。

調査にしても何にしてもあと半刻であの扉が開く。だったらその隙を見て外に逃げ出せばいい。

そうだ、生きなければ逃げればいいんだ！

みなぎる思いに私は立ち上がった。

ちなみに。

世の中そこまで甘くはなかった。

03 独房脱出大作戦！

と、いうわけで。

私は今現在ドアの前で、必死にカンテラに手を伸ばしている状態だ。

作戦？ 視界を悪くするためにカンテラの火を消す！

金属の棒の先に引つかかるカンテラを取るのには背伸びをしてもジャンプをしても高さが足りない。そこでコートを脱いで折り畳んだ。

分厚いコートを畳むと、それは結構な固さになる。それを手に持つとコートの先は余裕でカンテラの底に届いた。

あとはこれを押し上げて落ちる前に見事キャッチ、中の火を消せばOK！

ところが。

「あ」

カンテラが落ちそうになったのでコートを手放しキャッチ。

しかし火の着いた金属製カンテラは人間の皮膚では耐えられない熱を持っていた。

指先にカンテラが触れた瞬間

「ぎゃあああ——っっ！」

私は思わず空中にそれを投げていた。

すぐに重力によって地面に引き戻されたそれが派手な音を立てて

壊れる。

しかし同時に火も消えたらしい。独房の中は闇に包まれた。勿論この闇も計画通り。

作戦？ カンテラの掛かっていた棒に上る！

一番重要なところはここだ。この棒に上り、ドアが開いて誰かが入ってきた瞬間飛び降りてドアから脱走。誰もこんなところに隠れているなんて思わないだろう。

未だに熱い指先をセーラー服に擦りつける。そうしなければ、指先のかゆさを抑えきれなさそうだった。霜焼けなのか火傷なのかわからないが両手の先がピリピリする。

目指す棒は鉄棒程の太さで長さは五十センチほど。奥まで照らせるように長くしたんだろうけどかえってアダとなったな！ フハハ！ これならなんとか許容範囲だ！

無論この身長で届くとは思っていない。

私はコートを手で引っかけ両端を無理やり左手に巻きつけた。

——うう、ワキ裂けそう！

足を上げて凹凸が目立つ金属の扉にかける。今はスカートだけどパンツなんてどうせ誰にも見られないんだしいつか！ よやく右手で棒を掴み、そのまま勢いをつけて足も掛けてしまう。

こんな木にぶら下がったナメケモノ状態の私、誰かに見られたらお嫁にいけないわ。いや、今まで婿に来てとしか言われたことないけど。主に女子に。

手足を入れ替えれば準備完了！ 後は体を起こすだけだ。コート

がちよつと邪魔だけれど、と手足にぐつと力を入れて棒を中心に体を起こす。

しかし。

本当に残念なことが起きた。

「おい、灯りが消えてるぞ！」

外にいた誰かが独房の異変に気がついてしまったのだ。

——うそ、やばい！

とつさに回収しようと太ももで踏んでいたコートに手を伸ばしたその時、がちゃん！ と慌ただしい音と共に誰かが飛び込んでくる。ドアの真上から突き出ている棒に座っている私。そしてそこから垂れ下がる黒いコート。

入ってきた人影は、頭にコートが絡まったらしく走ったままの勢いで転倒した。

いや、笑いごとじゃない。入ってきた人物は転んだ方を除いてもう一人いたのだ。大柄で、今にも筋肉が弾けそうなムチムチの男が。

しかし幸か不幸か、黒いコートを取られバランスを崩した私は悲鳴を上げながら棒を中心にグルンと一回転してしまったのである。その際に、真下にいた大柄男の顔に革靴を履いた私の踵が見事

大 激 突 ！

ごっ、とまるで鈍器で殴ったような音がして彼の首が変な方向に

よれた。かと思うと呆気なく地面に倒れる。

一方私はバランスこそ崩したものの、足だけでなんとか棒に掴まっている状態で難を逃れた。

「い、今のうちに……！」

棒から下りると同時に黒いコートでぐるぐる巻きになった——
なんと人を散々馬鹿にしたあの金髪の青年が私を見て目を見開く。

「お前！」

「わああああ！ ごめんなさいごめんなさい！」

だけど私は逃げたいんだ。

横たわっている大柄の男を見ると、腰に差してある剣が目についた。武器があればこの先役に立つに違いない。

「やめろ！」

制止の声を無視しその剣を掴んでベルトから抜く。予想以上の重さだったそれを抱きしめるようにして青年に背を向け独房から出た。

右も左もわからない、石の積み上げられた冷えた廊下を一人走っていく。一体どこで人に見つかるか、そんな恐怖と一本の剣を抱えながら適当な角を曲がったその時。

歩いてきた二つの人影に止めたくなくても足が止まった。

——ひっ………！

漆黒の外套を胸元のブローチで留めた二人の人間は、こつちを見て同時に言葉を無くした。さっきまで独房で寝っ転がってた不審者が剣などという物騒なものを持って廊下を走っているのだから当たり前前の反応なのかもしれない。

しかも片方はあの「団長」で、その隣には金髪碧眼の青年が立っている。だが今は外見的特徴を並べられる余裕などない。

硬直した私の目の前に、銀色の何かが突き付けられた。

近すぎて何かわからない。

けれど「団長」の手の中から伸びるそれと、彼の放つ殺気からしてこれって。

剣じゃない？

私は本能に従うままに後ずさった。思った通り銀の光を閃かせたそれは紛れもない剣だった。生身の刃物を向けられたのは生まれて初めてでさっきよりもよほどじっとりした汗が背中を流れる。

「どうした？ 貴様わざわざ独房から逃げ出してきたんだろう？ 抵抗しないのか、その腕に持っているやつで」

——「団長」めっちゃこええ！

しかし彼の言った通り、私は独房から逃げ出してきた身だ。なんとしてでもこの殺気メーカーから逃れなければ、私に未来はないっ！ この人に背中を向けたらぶすつとやられちゃいそうだし！

震える手で剣を抜こうとすると鞘が勝手に落ちた。予想以上の重

量に矛先は定まらないし二の腕が痛い。

まさか本当に斬られたりしないよね？ 平和なご時世のこの日本で、こんな危なっかしい剣でぶすっなんてそんな笑えちゃうようなこと。

いや、笑えないわ。

「団長」の行動に彼の背後に立っていた青い瞳の青年も肩を竦める。いや、呆れた顔してないでこれ止めて下さい。今の状況からして止められるのどう見てもあなただけなんですけど。

そんな心の叫びも空しく、誰もこの展開を止めてくれる人はいない。

—— ええい、こうなったらかつてやっていった剣道の記憶を呼び起こして「団長」を打破して脱走するしかない！

と。

意気込んだ私は、腰を据えた。

04 独房脱出大作戦、失敗

独房脱出大作戦決行。
結果。

私は何故かイスに座っていた。

話は遡る。

なんとか目の前の「団長」を倒して外に逃げるんだ！ と意気込み重い剣を振りかぶったまではよかったのだが、筋肉が脂肪に変わリつつあった二の腕には大変な負担だったらしく攻撃は竹刀を振る時より二倍は遅かった。

そしてかくゆう「団長」はその一撃をあっさり弾き返した。

しかもすごい勢いで。

ボールをバッドで打つ野球選手の如く。

そして私の握っていた剣は打たれたボールのように手から離れ頭のすれすれを通り過ぎて、石製の硬いはずの壁にどすっ！ と突き刺さった。

この瞬間に私は再び硬直。

そして後々追いついてきた例の失礼な金髪頭と何かを話した団長と碧眼さんの二人組はそのまま脱力する私を引き連れ、やけに広い部屋に行き適当なイスに座らせる。

そして冒頭に戻るというわけだ。

「名前は」

「……」

「どうしてここにいた？」

その言葉に首をもたげ辺りを見回すと、ここが最初「団長」に投げ飛ばされた場所だとわかった。絨毯ちよつと厚いし、机も綺麗だしいかにもお偉いさんの部屋だ。

「どうしてって……」

無言を決め込んでいた私だがその言葉にようやく反応できた。しかし口から零れる言葉は脱力しきって弱々しい。

「そんなこと知るわけじゃないですか。あんだ達こそ誰？ もうお腹空いたし、眠いし。誘拐したって無駄ですよ。ウチには身代金なんて払えませんが、誘拐するならもっと大きい家の子でお願いします」

その言葉に団長は眉を寄せるばかり。隣に立っている碧眼さんも困ったように腕を組む。

「だいたい人に名前を聞くときは自分から名乗るものでしょう？
私は何やったかはよくわからないですけど……」

盛大に溜息を吐いた私に、碧眼さんが初めて口を開いた。

「それは失礼したね。僕はディア。ディア・ファイアライエス・コ
ーラル」

なんというか、日本語は見事に流暢なんだけれど外見通り外国人
だったらしい。名前を聞いても「ディア」と「ファイアー」しかわ
からない。

碧眼さんことディアは甘々ボイスだった。団長の低くて威圧感の
ある声音とは正反対で、リラックスできる。

ディアが名乗ったので団長も名乗らないわけにはいかないらしい。

「エルガー」

聞こえるか聞こえないかぐらいの小ささでそう呟いた。

「……七瀬ハルです。十七歳」

せっかくディアも全部言ってくれたんだから、名前くらい全部言
えばいいのに。ほとんど覚えてないけど。

「じゃあ、まずは状況整理しようか」

なんとかディアが円滑に話しを進めてくれそうだ。団長、ではな

くエルガーは警戒を解かず私に視線を向けてくるが。

「君はこの部屋に侵入、エルガーに気絶させられて独房送り。そこから逃走の後確保されたと……それであつてゐる？」

「あの、悪いんですけど侵入なんてしてません。気付いたらここにいただけです」

「気付いたら？」

二人は同時に反応した。ディアはきょとんとしているが、エルガーはますます眉根のしわを濃くしている。ひよつとしたら一生外れないんじゃないのかな、あのしわ。

「つてことは、ここに来る前は別の場所にいたの？」

「学校が終わつて家に帰る道を歩いてたら目の前が真っ暗になつて……あれつてなんだつたんだろう、立ちくらみ？ そしたら前から光が近づいてきて、気付いたらここに」

そういえば、ここがどこなのかまだ説明も受けていない。学校帰りだったはずなのに知らぬ間にこんなところにいたわけで、それつて結構焦らなきゃいけない事態の気がする。私つて案外冷静気質かもしれない。

「家はどこにある？」

「波野の片桐ですけど。三丁目のマンションわかります？ あそこの四階」

当然のように答えた私に二人は目配せしあつた。なんですかそのリアクション。私、どこか変ですか？

「ナミノ……それは国名か？」

深刻そうなエルガー、ディアも複雑そうな表情だ。

「はあ？ 何言ってるんですか、市ですよ市」

「シ？」

「あ、外人さんにはわかりにくいかな。なんていうか……町みたいな感じ？」

「カタギリは？」

「町を細かくした時のそれぞれの愛称っていうか……住所の一部？」
「サンチョーメとマンション」

「三丁目も住所の一部でマンションは建物……マンションくらいなら外人でも知ってるんじゃないの？ カタカナだし」

どうして外人に日本の住所の詳細を教えているんだろう。今もつともすべきことは家に帰ることなのに。

「すまないがお前の言っていることが一切わからん」

その声には私は顔を上げた。重苦しい沈黙が部屋を満たしている。

「……はい？」

「脈略を得ない話だ。お前の口から出る単語全部聞いたことの無い地名ばかりで、嘘を言っているようにしか聞こえない」

「なんで!？」

「うーん確かに、僕にも変な話だとは思えないな」

ディアにも言われてしまった。

そこで私はまさか、と口元を引きつらせる。

「あの……ここってどこですか？」

「どこって、シュヴァイツ城だけど？」
「しゅばいつ、城……？」

ゴン

遠くで鐘の鳴る音がした。

ああ愛しの故郷日本。

私は今熱いお茶が飲みたいです。

つまり私は日本語を喋る外国人の住みかにテレポーターションしたらしい。

その住みかの名前をシュヴァイツ城。

城とは言っても勿論日本の姫路城とか江戸城とかそういう感じじゃない。どちらかというと中世ヨーロッパ風の煌びやかな城。

その一角の部屋。

「嫌ああああ——っ！」

私は一人絶叫した。

その光景をエルガーとディアは茫然と見ている。

「私を日本に帰してくださいっ！」

「は？ ニホンってなんのことだ？」

「私の故郷の国名です！ 世界地図ありません？ テレポーターシヨンだかなんだか知らないけど今すぐ私を帰して下さい！ お金は払います！ 円でもドルでも！」

最初から変だなとは思ってた。

いきなり投げられた拳句独房に放り込まれるわ、剣振り回されるわ、日本にしてはおかしすぎたんだ。

そう思うと急に恐ろしくなった。

ここは日本じゃない。安全な場所じゃない。

下手をしたらあっさり殺されちゃうかもしれないんだ。

私の要求にしかめっ面を浮かべたエルガーに代わってディアがくるくる巻かれた紙を部屋の机の上に広げる。イスに座っていた私も立ち上がってそれを見た。

大きな大陸が数えて四つ。その周りに小さい島がちらほら。

その他は全部海だった。

「……あの、これ明らかに世界地図じゃないんですけど……」
「お前何を言ってるんだ」

耐えきれなくなったようにエルガーが口を開いた。

「それはれっきとしたウォーターフォードの地図だ」

「ウォーターフォード？」

「この世界の名前だろう？」

はて。

私のいた世界に名前なんてあっただろうか。

幼馴染のヨーコの言葉がよみがえる。

『異世界トリップって憧れるよね』と、乙女ちつくな彼女はよく呟いていた。

異世界トリップとは人間が一度は憧れる『突然異世界に召喚される』こと。たいてい異世界にはカッコいい王子様か騎士様がいて、トリップした先で恋に落ちる。お城では毎日侍女たちに囲まれてドレスを着たり舞踏会に出たり。

きっと。きっとっていうか多分。多分っていうより絶対。

ここは異世界だ。

「その前に、まさか武器なんて隠してないだろうな」

啞然としている私にエルガーが視線を向けてきた。セーラー服のどこに武器を隠せていうんだまったく。

「とりあえずそのおかしなドレスを脱げ。女装趣味か？」

「え、脱げてそんな」

「確かに男がドレスっていうのは変だね。はい、身体検査はいりません」

有無を言わず背後にいたディアが、私の腕の付け根をがっちり抑えつける。ちよつとマイペース、といより強引すぎないか！

「ちよ、ちよ、ちよつと！」

さつきから私が男だつてことで話が進んでるみたいなんですけど！ エルガーがセーラー服を見て首を傾げた。

そしてこちらに向かって手を伸ばす。

「ぎゃあつ！ やだ、触らないでください！」

目に付く赤いリボンにエルガーの指が触れた瞬間、私の怒りは爆発した。

「触らないでつて……言つてんじゃん——っ！」

腕を捻つてディアの顔面に拳を叩きこんだ一瞬だけ拘束が緩んだ。同時に渾身の力を込め左足をエルガーにむかつて振り上げる。しかしその一撃は向き合っていた彼の右手にあつさり受け止められた。

「暴れるなつて——」

「どりゃああつ！」

甘いな！ 女の必殺技といえば、やつぱり平手でしょ！

一撃 必殺・平手打ち！

そんな大層なものでもないが、私の一撃は見事エルガーの頬にクリーンヒットした。

バチンッ！ という凄まじい音とともに。

「なにをっ」

「私は女です！」

その言葉に叩かれたエルガーも殴られたディアも明らかに「え？」という顔をする。そして二人して私の顔をまじまじと見るなり

「冗談？」

と呟いた。

確かに私は男顔ですけども！ そんなことはわかっていられるけども！

あまりに失礼すぎやしないか！

「じよ、冗談なわけないでしょ！ 身長だって普通の女の子じゃん！ 見てわかってよ！」

そう言うときディアは「確かに女の子っぽいところはあるかもね」と賛同してくれた。もう一人はいかにも胡散臭いと言わんばかりの表情。さっきからこの人協調性ない。

「とにかく私は武器なんて持ってません、っていうかむしろ――」

武器向けられたほうじゃないですか、と言いかけたその時。

目の前が真っ暗になる。

――まさか、またトリップとかそういう洒落じゃないよね！？

足元がぐらつき、地面が歪んだ錯覚に陥る。
もしかしたら戻れるのかな？

そう思った脳みそを、最後に誰かの声が揺さぶった。

04 独房脱出大作戦、失敗（後書き）

話数が！

05 そして夜は更け、

シュヴァイツ城騎士団長執務室。

「どうやら軽い貧血のようですね」

恰幅のいい医師がずり落ちた片眼鏡をかけ直しながら言う。彼の前にはソファがあり顔色の悪い少年――否、少女が眠っている。

ハル、とそう名乗った少女は突然この執務室に現れ彼女を『暗殺者』と勘違いしたエルガーによって気絶させられ牢屋送りになった。本人自身がきつとこの状況についてこれなかったのだらう。混乱しきった『様子』で喋るうちにぶっ倒れた。

ちなみにこの時本人はまたトリップをするものだと思い込んでいたが、実際には目まぐるしく変化する現実を目を回していただけたのである。

医師が部屋から去り、残されたエルガーとディアは神妙な面持ちで少女を見下ろした。

「ディア、どう思う?」

「どうって……少なくとも暗殺者には見えないよね」

ハルは登場の仕方、口調、表情のどれを取っても暗殺者には見えなかった。実際に武器の類も持っていないようで暗殺者には不格好。服装もむしろどこかの民族衣装のような服だ。

「天井にも穴は空いてないし、鍵をこじ開けた跡もない。つまりこっそり忍び入った可能性は低い。しかもちよつと……」

言いかけたディアの言葉に、「ぐう」とハルの腹の音が重なった。

「……ちよつとつていうか、かなりお間抜けだし」

暗殺者にしては不自然すぎる。

それがこの少女に対する見解だった。

しかし油断させて寝首をかこうというのが魂胆かもしれない。エルガーはイスに腰掛け溜息を吐いた。

「厄介な案件がまた一つ増えた……」

「大変だね、騎士団長殿は」

笑いながら言うディアを暗い目で睨みつけたエルガー——「『シユヴァイツ城専属騎士団団長』である彼はゆっくり瞳を閉じる。

「……とにかく、この娘が一体何者なのか、どこから来たのかわかるまでは安心はできないな」

時刻は0時に近く、窓の奥に潜む闇は色濃い。

「もし、ハルが暗殺者じゃないってわかったらだけどき。誘って見たら？」

「何に」

ディアは得意げな笑みを見せると小さく呟いた。

「あの件」

「……」

「エルガーだつてわかつてるんだろ？ 彼女、剣を構えた時にはそれなりの構えだった。背筋も伸びてたし、足取りだつてまあまあ。女にしては上出来だったはずだね。どこで習ったかわからないけどさ。しかも僕らを殴ったし、結構いい筋してるんじゃない？」

「……」

「聞いてる？」

無言のまま微動だにしないエルガーの顔をディアが覗き込む。しかし彼は目を細めて少女の視線をやっていた。

「どちらにしろ調べなければどうしようもない」

「うわ、警戒心強っ」

ゴーン、と鐘が鳴る。

蝋燭の火がわずかに揺れた。

06 朝日は昇る

誰かに体を揺すられている。
ような気がする。

今日は家でゆっくりごろ寝しようと思ったのに、こんな朝早くから起こされたんじゃないよ。

「おい、起きろ」

ん？

あれ、お母さん、随分声が低くなったね。

「起きろ」

「んー、お母さん、今日は学校休み……」

「お母さんじゃない！ いいから起きろっ！」

突然の大声と、くるまっていた毛布をいつきに引っ張られたのと私の目が覚めた。しかしその頃にはベッドの上を転がっていたはずの体が空中に飛び出していた。

ドンッ！ と地響きと共に「ぎゃ——っ！」と悲鳴が漏れる。

「な、な、なんてことを……っっていうかなんでまだここに！」

ベッドから落ちた私の目の前で冷たく見下ろしてくるのはあのエルガー。

そしてその隣では困ったような笑顔を浮かべたディアが立っている。

「せっかく家に……日本に帰れたと思ったのに……！」

「ぐだぐだ言わずにさっさと立て。取り調べだ」

吐き捨てるようにそれだけ言ったエルガーは背を向けて部屋から出ていく。それよりどこどこ？ 明らかに寝室なんですが。もしかして私の

「純潔の危機！？」

ぶつ、と残されたディアが小さく吹き出した。背を向けているが肩が震えているのは明らかだ。

「心配しなくても大丈夫だよ……ふつ、ハルが昨日話しの途中で気絶したからとりあえず寝かせておいたんだ」

それはわかったけど「ふつ」って何！ 「ふつ」って！ 笑っているバレバレだから！

ディアに手を貸してもらい立ち上がった私はセーラー服を見て茫然としてしまった。着替えない、今すぐに。いくら王子でも二日間同じ服は嫌だ。風呂も入ってないし。

寝室を出ると、昨日取り調べを受けた部屋があった。奥にあったドアがこの部屋と寝室を繋いでいるらしい。エルガーは不機嫌そうに机の上を片付けている。紙が一杯だ。

「で、取り調べっていうのは？」

「お前の出身地と正体だ」

いや、そうくるとは思っておりましてけど。

一体どうやって証明すればいいんだろう、異世界から来たなんてディアに促されるままイスに座る。エルガーも机に肘を突いて私を見据えた。

「まず、お前はなんの目的があつてここに来た？」

「だから目的なんて無いって……むしろ好きでこんなところに来たんじゃない。たまたまここに出ちゃっただけだと思う」

「『出た』とは？」

「笑わずに聞いてくれます？」

真剣に尋ねた私に、エルガーは「聞こう」と間髪なく答える。

「私、日本から……異世界からここに召喚されちゃったみたいなんですよ」

「異世界？」

「私のいた世界では、まあ本や漫画の題材としてたまに書かれることがあるんです。私みたいな女子高生とか、OLとかが何かの拍子に異世界に飛んじやうっていう……」

言っているうちに声が尻すばみになった。どうしてこんなところで『異世界に召喚された』なんてことを話しているんだろう。そんなの普通の人が聞いたって信じてくれるわけ無いじゃないか。

「で？」

「でって……信じられませんか、こんな話。自分で言つてて頭が変になっちゃったのかと思いますよ」

——これからの道は前途多難だなあ。

なんとかここから出れたとして、仕事も無い家も無い。知り合いもいないのだからどうやったって乞食の道をまっしぐらだ。ああ、私この歳でホームレスか。

「まったく信じられないわけではないが」

と、エルガーの方から聞こえた言葉に私は耳を疑った。今あの人
が言った？ 警戒心の塊みたいなあの人が言いましたか今？

「すみません、もう一度お願いします」

「同じことを二度言うつもりはない。だが、魔術師のなかには『召喚』ができる者もいると聞く」

「魔術師？」

「国家公務員だけどね、彼らは」

背後からのディアの言葉に「へえ」と情けなく声を漏らす。魔術師なんているんだ。

「ハルが仮に天井から侵入しようとしても、ここは無理やり壊さないと室内に入れないしね。鍵をこじ開けた形跡も不審者の目撃情報も無い」

「無論、まだ信じたわけではない。そういう可能性があるというだけだ。お前が異世界からウォーターフォードに来たという証拠も無いからな」

厳しい言葉に思わず肩身が狭くなる。

ところが、思い出した。私にだって日本から来た証拠があったんだ！

「私の荷物は！？ あれの中に日本から来た証拠があるはず！」
「このことか」

エルガーがバッグと紙袋を机の上に置いた。どこに隠してたんだそれ！

「そのバッグに白い箱みたいのがあると思うんですけど、それ取ってもらえませんか？」

言われた通りエルガーはバッグの中から白い箱——携帯電話を取り出した。二つ折りだったそれを開き待ち受けを見る。

「ちょ、ちょっと待って！ 勝手に開かないでよ！ それ個人情報がたくさん詰まってるんだから！」

思わずイスから立ち上がり、エルガーの手から携帯をむしり取る。待ち受けはヨーコとのプリクラで、なんだか胸がぎゅってなった。

ヨーコ、今頃どうしてるかな。

「その箱はなんだ？」

「これは携帯電話っていう、これを持つてるとどんなに遠くにいても話せる道具で……そうだ！ これで電話して誰かに助けてもらえば……！」

ナイスアイデア！ そう思って画面をみると

『圏外』

当たり前だけど異世界と日本の間に電波は流れていなかった。

仕方なく、代わりに写真が保存されているフォルダを開きエルガ
ーに向かって差し出す。

しかめっ面の彼はそれを見て「なんだこれは」と低い声で呟いた。
私が渡したのはヨーコと一緒に出かけた時に取った写真で、自分の
中では一番よく撮れているものだ。

「それは友達のヨーコとの写真。日本で撮ったやつ！」

「なるほど、これが証拠か」

「まあハルをここまで追い詰めなくても良かったんだけどね」

鼻を鳴らしていた私の耳に飛び込んできたディアの爽やかボイス。
その言葉に「え」と喉から絞り出したような声が漏れた。

「黒髪の人間ならまだしも、黒い瞳の人間はこの世に存在しないは
ずなんだ」

「そ、そうなんですか？」

「そうそう。昔はいたらしいんだけど、最近じゃもう滅びていない
って」

「一人も？」

「多分、一人も」

次の瞬間、私の頭は二度目の噴火をした。

エルガーに向かつて「散々からかつて、最悪！ 馬鹿エルガー！ 鬼畜！」とか「最初から私が異世界からきたってわかってたんじやん！」とか言っているうちに力尽きた。ディアが後ろから押さえつけたから飛びかかりはしなかったものの、叫ぶだけでも結構体力を使ってしまったらしい。

「はぁ……」

「じゃあハル、君が本当に異世界から来たんだとして、仕事は？ 働き口あるの？」

「あるわけないじゃないですか」
「だよな」

ディアは怪しげに笑うとエルガーを見た。

視線を向けられた彼は昨日から見た中で最高に不機嫌そう。

「いいんじゃないですか、団長殿。ハルを雇おう」

「え？ 雇うって」

「し・ご・と！ 仕事がないんじやお金も稼げないよね。それに君がこの仕事に就いてくれれば団長殿が困ってる案件がいつきに二つも片付く」

一緒にエルガーに視線を向ける。そういえば叩いたりしちゃったけどこの人結構偉いんだっけ。

「……仕方ない」

「やったー！ 良かったねハル、仕事見つかった！」

勝手に話しは進んでいるようですが、私が気になるのはやっぱり。

「仕事って？」

ディアは、ん？ と首を傾げて当然のように言った。

「シュヴァイツ城の専属騎士団団員」

波乱な日常が始まる予感がした。

07 騎士団団員

日本にいるお父さん、お母さん、ヨーク、お元気ですか。

私は元気にやっております。

牢屋に入れられたりして一時はどうなることかと思いましたが、無事です。

そしてなんと。

私は本日付で、騎士団の団員になりました。

久しぶりにお風呂に入れた私は騎士団の制服に身を包んでエルガーの部屋にいた。制服とは言ってもワイシャツに、黒いズボンとブーツ。胸元には赤いリボンが結ばれていて、左の二の腕のあたりに赤い十字架が刺繍されている。結構おしゃれな感じだ。

ちなみにセーラー服はメイドさんたちによって持ち去られた。洗濯場に運ばれるらしい。

そして私の目の前には久々のご飯。

丁度正午を過ぎたあたりの時間帯、机の上に置かれるそれらは涎が出そうになるほど美味しそう。

ずっと食べようと思っていた、女の子たちから貰ったお菓子だった。

「そんな茶色のもの食べて大丈夫なの……？」

「ディア、これはおやつみたいなので、すごく甘くて美味しいものなんですよ？」

たくさんある中から一つを取り包装紙を剥がす。中身はブラウニーで、口に入るとほろ苦いチョコレートの味が広がった。メッセージカードには「ハル、これからもよろしく！」って絵文字付きで書いてある。

なんだか懐かしい、昨日までは日本にいたのに。

「確かに甘い匂いだね」

「ディアも食べます？」

また一つ包みを取り出して剥く。ノーマルマフィンで、一日たってもなお弾力を失っていないそれを私は真ん中で二つに割った。

「どうぞ」

そう言って差し出したマフィンをディアは取らなかった。代わりに何故か私の手首を取る。

「その堅苦しい敬語、やめていいよ」

やけに冷えた声音に、私は首を傾げつつ

「そう？ ディアがそう言うのならやめるよ。それに私、敬語ってあんまり得意じゃないから」

答えると、ディアの頬がふつと緩んだ。私もどこか安堵する。

それよりこの手は何だろう？

そう思っているとディアはそのまま私の手からマフィンを頬張った。

うわ、色男。女子の手からお菓子を食べる男がいるか！ 王子だよ！ この人こそ天然タラシ系の王子様！

「うん、美味しい」

「そ、それはよかった。私の優しい友人達に感謝してね！ あの子たちが丹精込めて作ったんだから！」

焦りつつ私も残りマフィンを口に放り込み、味わいながらエルガの方を見る。

ちなみにエルガーはなんだか難しそうな書類に目を通していた。お菓子には目もくれず作業に没頭している。

「ディア、エルガーって『団長』なんでしょ？ 一体何の？」

尋ねるとディアは当然のようにあっさり答えた。

「騎士団団長だよ」

「へえ、騎士団……って、ええ！？」

その答えに思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

騎士団団長というのはつまり上司に値するんだろう。そんな相手に私はなんてことを……頬をぶった昨日が悔やまれる。

「そっいえば、昨日『黒い瞳の人間なんていない』って言ってたけどさ……どうしてそんなことがわかるの？」

話を変えてディアを見ると、彼は蒼い目を瞬かせて「ああ」と思
い出したように言った。

「古くからの文献でねそういうふう記したものがあつたんだよ。

昔は黒い目の人もいたんですよって、そう書いてあつたんだ」

「でも、今はいないの？」

「この世界からは消えてしまったとも書いてあるからね」

「ふーん」

歴史とか昔の人が残したものをちゃんと大事に扱っている場
所なんだ。そう思うと、急に安心した。

落ちた場所がここで案外よかったのかも。

「その二人」

考え事をしている最中のいきなりのエルガーの声に私はびくつと
肩を跳ね上がらせた。

「もうそろそろ訓練が始まるぞ。食うならさっさと食え」

書類見てもこつちの話は聞いてたんだ。

私はまたお菓子を頬張った。

「今日から騎士団第一隊に配属された七瀬ハルです、よろしくお願

います！」

場所はシュヴァイツ城中庭。

芝生が生え太陽の光が差し込む暖かいその場所で、いつも訓練を行っているらしい。

私の言葉に目の前にいた何十人もの若者達が盛大な拍手と歓声を送ってくれた。みんな年上ばかり、しかも筋肉ムキムキの人が多い。女の子！ 華奢でかわいい女の子いませんか！

「女子団員だ。くれぐれも扱いには注意しろ」

隣に立っていたエルガーがそう言うのと団員達は一瞬で静かになった。どうやらこの人の恐さってみんなに染みわたっているらしい。まあ初対面の人間を投げ飛ばすくらいだから、恐れられて当然っちゃあ当然だろう。

「訓練を始める。全員配置につけ」

訓練って一体どんなことするんだろう。

そう思っているうちにポンと木刀みたいな棒を手渡された。けど木刀より全然重い。これって女子には無理がないか？

そう思って周囲を見渡すと、女の子は一人も見当たらなかった。

「エルガー、まさかとは思うけど私って……」

「騎士団の初女騎士だ。よかったな」

よくねー！

心の中で絶叫を上げる。女の子いないじゃん！　こんな中で一人寂しく木刀を振れって言うのかこの鬼畜団長！

その思いが届いてしまったのかエルガーは渋々口を開く。

「国王が女の団員の導入を考えていてな。しかしこんな野蛮な職種をわざわざ選ぶ女もないからこの件は持て余していた——お前が来る前まで」

「なるほど、そこにたまたま現れたのが私だったと……」

「そっいうわけだ」

来た場所は良かったけど来たタイミングがいけなかったのか。

団員達が整列するのに合わせて私も適当な隙間に滑り込む。すると周りのお兄さんやらおじさんやらがまじまじとこちらを見てきた。

「目が黒いぞ、なんでだ？」

「こりゃあまた今回も二枚目が入ってきたな」

「女とは思えねえ……」

うわ失礼！

「こらこら、女の子に向かってそっいうことは言っちゃ駄目だよ」

その団員達をやんわりと注意したのがディアだった。さっきから王子オーラ全開ですねこの人。

そのうち素振りが始まった。隣には終始ディアが立っていてずっとニコニコしている。この人何者なんだろう。平団員じゃないのか

な。

剣道をやっていたおかげか素振りはなんとかクリア。木刀もそれほど重いわけじゃないし、なんといってもこの制服が案外動きやすいのが好都合だった。誰が作ってるんだろう、これ。

「なかなかいい素振りだね」

「あ、ありがとう」

ディアに言われ、思わず笑みが零れる。

まさか剣道がこんなところで役に立つなんて。

その次は打ちあい。剣同士で打ち合う練習のことだ。これなら幾らかやったことがある。

久々の練習だったけど相手はディアですごくやりやすかった。なんだかんだ言ってやっぱり剣の扱いが上手だ。

そして最後は試合。

のはずが。

「え、私出ちゃダメなの!？」

なんと出場停止。

「女の子のハルが出ちゃうと、色々問題があるからね……」

「なんで？ 私だって試合したいよ……」

「そもそも剣術の練習に出るのだからおかしいんだ。これくらい我慢しろ」

「うー……」

悩ましげに声を絞り出した私。

そして俯いているうちにポンとアイデアが浮かんだ。

「じゃあエルガー、今日の試合で私が三人抜きしたらこれから毎日加わらせて！」

「馬鹿か」

一蹴された。

どうやら私は普通のか弱い女の子だと思われているらしい。
ところがどっこい。長年近所で恐れられてきた剣術道場の一人娘
とは私のことよ！

試合はどうやら志願制。

何試合か見送るうちにすごく筋肉質な男性が出てきた。なんだか
相手に誰も出たがらないんですが……気持ちにはわからなくもない。

「誰もいないのか」

そのエルガーの言葉に私は木刀を持って立ち上がった。

「私が行く！」

「ハル、駄目だよ。君は女の子なんだから」

「女の子でもタダの女の子じゃないってば！ 大丈夫大丈夫！ 私
も騎士団団員なんでしょ？ だったら女子だからって甘やかしちゃ
ダメだよ」

ディアは必死で止めようとしてくるが私だって試合に出たい。こ
こで一度蹴りを着けておけばそれなりに団員の一員だと認めてもら

えるはずだ。団長のエルガーは何も言ってこないし問題ナイ！

「私がお相手します！」

私が出た瞬間、周囲からどよめきが上がった。

ふっふっふ、何年『王子』をやってきたと思ってるんだ！ 大男の一人や二人、恐ろしい父に比べればなんてことないわ！

「お願いします！」

大柄な男を前に木刀を構える。なんだか熊っぽいな、この人。縦幅も横幅も明らかに浮き立って大きい。本来結構な大きさであるはずの木刀も小さく見えてしまうくらいだ。

試合とは言っても正式なものではなく、どちらかと言えばチャンバラみたいなもので他の団員が囲んで見ている中で戦う。なんとなく緊張するが、こんなの地区大会とかの審査員に見られるより百倍はましだ。私は芝生を踏み勢いよく前に飛び出した。

鈍い音がして木刀がぶつかり合う。やっぱり体格が違うし鏢迫り合いは無理だ。そう判断した私は身を引きながら相手の手首に木刀を叩きつけた。「小手っ！」と思わず声が出る。

防具もつけていない腕には効いたのか、一瞬木刀を持つ手が緩んだ。その隙に剣先を絡めて相手の正面ががら空きになった時に上段に構える。

「面っ！」

そして木刀を振り下ろした。

何人かが息を呑む音が聞こえた。
けれど私だつて防具もない顔面に木刀を叩きこむつもりはない。
勿論途中で止めた。ちよつと勢いをつけすぎたせいでギリギリ頭の
十センチくらいではあるけれど。

——これで私だつていつちよまへの団員だつて認めてもらえる
はずだ！

思わず満面の笑みでエルガーとディアを振り返った私の目に映つ
たのは、妙に焦った様子の二人。

「ハル、後ろっ！」

え、後ろ？

相手の方を振り返ると同時、腕に硬いものがぶつかった。

「いつ……！！」

まさか！

木刀を寸止めされた男は全然諦めなど感じていなかった。私の腕
を打ったのは彼の木刀で、私の木刀は手から離れて地面に転がる。

どうして、試合はもう終わったはずじゃ——

「やめっ！」

エルガーの鋭い声が響き、男の動きが止まる。

ディアが小走りでこちらに近づいて来たかと思うと私の手を取って責めるような瞳でこちらを見た。

「ハル、どうして最後に攻撃をやめたんだ」

「え、だって……」

あのまま振り下ろそうものならあの人は怪我をする。

剣道ではそこまでしない。

「エルガーが止めなかったら、君が怪我をするところだったんだよ」

その言葉に、私の目の前は真っ暗になった。

ここでは、こんな試合の一つでも誰も相手に容赦はしないんだ。

自分が怪我をしたくなかったら相手を叩きのめすしかないんだ。

ここは平和でいい場所だけど。

とても恐ろしい場所でもあるんだ。

そう思うと、背筋に寒気が走った。

07 騎士団団員（後書き）

やっと更新できた……！

08 この世界

腫れた腕に包帯を巻きながら、私は思わず瞼を伏せた。

その後訓練のために長時間放置してしまった腕は傍から見てもわかるほど膨れている。

窓際に座って外を見ると見知らぬ町が目映る。星が瞬く夕食時のこの時刻、オレンジ色の光が点々と灯り始めていた。

「ハル、これで冷やすといい」

ガチャリとドアが開きエルガーとディアが部屋に入ってきた。そういうばここってエルガーの部屋だからノックとか無くていいんだった。

ディアが持っていたのは氷袋。反対の手には包帯も。

「ありがとう」

「……シヨックだった？」

受け取る時にそう尋ねられ、私は思わず固まってしまった。

「……ちよつとびっくりした」

「だろうね、騎士団の訓練なんて女性には向くものじゃないから」

「でも……」

「やると言っただけはお前だ」

エルガーの厳しい声音に唇を噛む。

あの時背を向けたこと自体が間違いだった。何年も剣道をやって

いるのにそんなことすらわからないなんて、お父さんに顔向けできない。

「騎士団は戦地に赴くこともある。その時、敵と直接刃を交えることになったらお前相手に手加減して自分が死ぬ気か」

「エルガー、言いすぎ」

「いいよディア」

ここは日本じゃない。

この国が一体どういう国なのかは知らないけど、確かにエルガーの言うとおりだ。もし本当に誰かと戦うことになったら――殺し合うことになったら。

「今日の試合でもしあれが本物の剣だったら、お前は首から上がなくなっていた」

「エルガーッ！」

「黙ってる」

そんなことは知ってるよ。

剣道だって同じだ。もし竹刀が刀で、面なんて喰らおうものなら体が真つ二つになる。突きを喰らったならば喉を突きとおされてしまう。

それが実際に起こるかもしれない場所。

「わかった。次から手加減はしない」

「ハル……」

「大丈夫だよディア。私、鬼のようなお父さんの罵声を浴びて育ってきたんだから。エルガーの言う通り、試合を試合だと思っちゃいけない。私が甘かったただけだもん」

—— 大丈夫、こんなのでいちいち落ち込んでる場合じゃない。きつとこれからもっとたくさんの辛いことがある。

「ちょっとその辺を散歩してくるね」

私は二人にそう言い残し部屋から出た。

「エルガー、いくらなんでも……」

「本当のことを言っただけだ」

部屋に残された二人は机を挟んで向き合っていた。

「意地っ張り！」

「本人も大丈夫だって言っただけだろ」

「そんなのウソに決まってるっ！」

ドン、とディアが彼にしては珍しく乱暴に拳を机に叩きつける。

エルガーは鬱陶しそうに眉を寄せた。

「いいからお前は部屋に戻れ。そもそも訓練に参加するのだから禁止のはずだぞ」

「話を逸らさない！」

「帰れ」

エルガーの鋭い視線に、ディアは慣れっこだと言わんばかりに鼻

を鳴らす。そして駄々をこねる子供のように「帰らない！」と答えた。

「エルガーはもう少し人に優しくした方がいい」

「お前に言われる筋合いは無いな」

「僕はちゃんと社交辞令なるものを心得ておりますからね。それよりハルのことだよ。彼女がもし――」

「もし、本当に異世界から来たんだとしたら、か？」

腕を組んでそう続けたエルガーを前に、ディアは碧眼をまん丸にして驚いたと言わんばかりの表情。その様子に眉間の皺を深くしたエルガーは溜息をついた。

「本当にそうだったとしても、あいつには召喚された理由がない。おかしいとは思わないか。何の理由も無しにここに来たなんて」

はあ。

私は行くあてもなく一人城内をさ迷っていた。

ところどころ灯りで光っていて煌びやかな装飾がうつしだされる廊下にはまっすぐ続く厚みのある赤い絨毯。両隣には甲冑がずらつと並び、今にも動き出しそうだ。

夕飯時だと言うのに人気は無い。昼間に騎士団で鍛練をした中庭も今は誰もおらず冷たい風が吹くだけだった。

ディアに貰った氷袋を腕に当てながら散策すること五分。場所は

全く知らないバルコニー。とは言ってもここにも芝生は生え植物が自ら育っている。オシャレなことに小さい噴水付きだ。この城芝生大好きだな。

そのバルコニーに白い石製のベンチがあつたので座ると、当たり前だが冷たかった。そして手すりの間から下を覗き見ると——ヨコのマンションくらいの高さだろうか。どうりで町が一望できるわけだ。ちなみにヨコの家は十四階である。

氷袋もいい加減寒くなってきたので腕からどかし、腫れた部位に包帯を巻きつけていく。このての作業は剣道で実習済みだ。

——あ、やばい、涙腺崩壊しそう。

ベンチの背もたれに頭を預けると急に色々なことが押し寄せた。

どうしてここに来たの。どうして戦ってるの。どうしたら日本に帰れるの。

この世界では、私は一人ぼっちだ。

「もうわけわかんないよ……」

エルガーに叱られたことだって間違いじゃない。彼は正しい。それに、私が本当に異世界から来たっていうれっきとした証拠だって——今は携帯電話のプリクラ一つ。ここに呼びだされた理由も意味もわからない。

厳しいエルガーも優しいディアもきつと私を疑ってる。

まだここに来て二日目なのに、気が滅入るの早すぎ。

そんなことは言っても、ねえ？

私は男顔なだけでそれ以外はいたって普通の女子高生だもん。
平和な国で生きてきたんだから。

「ええい、こんなことで落ち込んでどうする七瀬ハルツ！ 日本人
たるもの気力で乗り切るんだ気力で！」

ぺしん！ と頬を叩くとなんだか落ち着いた。
前向きに考えなきゃ潰れる。

何も無くても、今は生きてるんだから。
この身一つあるだけで充分だ。

どっちにしろここに私の知り合いなんて誰ひとりとしていないわけだし、自分の居場所はちゃんと自分で見つけなきゃいけない。
騎士団でたくさん働いて、たくさん眠ってたくさん食べればいい。
そのうちきつと周りが私の存在に慣れてくるはずだ。ディアもエル
ガーも。

同時に調べなければいけないこともある。

「私がここに呼びだされた理由は、何か……」

エルガーは「魔術師の中には召喚ができる人物もいる」って言う
ていた。

もしかしたら誰かがうつかり召喚しちゃったのかもしれない。

本当に『うつかり』だったらタダで済ます気はないけどね！

そしてもう一つ、日本に帰る方法。

幸いここは大きい城なわけだし、どうにかすれば魔術師さんに会えるかもしれない。そうしたら聞いてみればいい。

それまではなんとかしてここで生きていこう。

空には知らない星。

下には知らない町。

なんとなく胸にせまるものがあって、私は静かに目を閉じた。

08 この世界（後書き）

よんでくださってるみなさん、ありがとうございます！
これからも頑張ります！

09 ウォーターフォード

ゴーン

大きな鐘の音に私は瞼を開けた。

「学校っ！」

今日は月曜日。窓からさんさんと降り注ぐ朝日は勘で言って午前七時。今からチャリに乗って全力で走って一時間目に間に合うかどうか。

私はとにかく自室から出て朝ごはんの置いてあるダイニングに向かおうと、勢いよくベッドから飛び下りてドアへ向かった。なんか床が柔らかく感じるけど今はそんなこと言っていられない！

しかし。

ゴッ！

突如額に強い衝撃。

「あだっ！」

と間抜けな悲鳴も上がってしまう。

痛む顔面を押さえてそのままズルズル座り込んだ私は、床を見て茫然。

——なんでこんなフワフワ絨毯なの？　うちってフローリングのはず……

その矢先、私の真横のドアが開いたかと思うと金髪碧眼の青年が焦った様子で入ってきた——誰？

「ハル、大丈夫！？」

「あ、えっと……ああそうだ、ディアだディア」

呟いた声に金髪碧眼青年ことディアは「は？」と疑問顔。

「大丈夫だよディア、ちょっと間違えただけ。家と勘違いしちゃったんだ」

「そう？　それならいいけど……」

まだ心配げな表情を浮かべる彼は、私が初めて小学校に登校した時に見送ってくれた母の顔にそっくりだ。「この子ちゃんとやっていけるのかしら」みたいな。

「そうだ、エルガーはどこ？　話さなきゃいけないことがあるんだけど」

いきなり立ち上がって問い詰めた私にびっくりしたらしいディア
「と、隣」と返す。

ディアの横を通って執務室の机でまた書き物をしているエルガーの姿を見つけた瞬間私は自分の声とは思えないほどの大声で「エル

ガー！」と叫んだ。

「……朝から騒ぐな」

「あのね、私これからのことについて色々考えたんだけど」

絶叫にも顔を上げなかったエルガーがその言葉にはペンを走らせる手を止める。

ゆっくりこちらを見ると続きを促すような視線を送ってきたので、もう一度私は口を開いた。

「私、この世界のことを全然わからない。ここには友達も家族もないし、この大きい城から出たこともないよ。けどね」

これ言つの結構勇気いるんだけどさ、

「私、ここで生きていくことにする」

その言葉に、二人の息を呑む音が重なった。

気がした。

「いきなりびつくりするかもしれないけどさ……勿論、日本に帰れるようになるまでの話。だから、それまでここでお世話になっちゃダメかな。ほら、お金もないし」

最後の方は尻すばみになってしまった。

緊張しつつエルガーの表情を見るけど相変わらずの無表情仮面っで感じ。仕方なく私は視線を足元に落とす。

「やっぱムリ？ 私一応不審者と勘違いされてたみたいだから覚悟はして」

「勝手にすればいい」

私の声に被さるようにして、エルガーの低い声が響いた。

「——は？」

「同じことは二度も言わない」

不機嫌そうな様子でイスから立ち上がった彼はそのまま部屋から出て行ったかと思うと勢いよくドアを閉める。バンッ！ という荒々しい音にも私は茫然としたまま固まって反応できなかった。

「勝手にしろって、言った……」

「騎士団団長からお許しを貰えたんだから大丈夫だよ、ハル。よかったじゃないか、これでまた一緒に働けるね！」

「でもすっごい不機嫌そうだったし……」

「何言ってるのハル」

ディアがそう言って首を傾げた。

「あれはエルガーの照れ隠しみたいなものだよ」

その言葉に私はしばし沈黙。

十秒ほど経ったその時、私の驚愕の絶叫が城内に響き渡った。

朝ごはんに行く前に、ディアにこの世界の話を書くことにした。

やっぱり最初は、この場所のことをよく知っておかなきゃいけないよね！

なんでもこの世界は総称『ウォーターフォード』と呼ばれていて四つの大陸といくつかの島国で構成されているらしい。ぴったり東西南北に位置する大陸。ディアはそれぞれの大陸の名前を順々に言ってくれたけど、全然覚えられなかった。

そして今いるシュヴァイツ城は東大陸にある。歴史も古く領土も広くて賑わいがある大国であり、長年平和を保っているこの国『トウルーズ』。それを治めるのが代々王族の『コーラル』の姓を持つ人々。どこかで聞いたことがあるような気がするけどひとまずそれは保留として、

「そもそも、ディアとエルガーって若いのにお偉いさんだよね。一体いくつなの？ でもって何者なの？」

「僕は二十二歳。で、騎士団の二番隊の隊長」

「二十二っ！？ うそ、もっと若いかと思ってた……」

本人に言ったら多分怒られちゃうだろうけど、ディアって結構童顔に見える。色白だし肌綺麗だし。いや、そこはエルガーと同じなんだけれども——ディアはどちらかというと天使みたいな感じだ。

「で、エルガーは二十一」

「二十一——っ！？」

私の絶叫はむしろ悲鳴に近かった。

「エルガーより若いの！？ 私二十五はいつてると思ってた！」

「エルガーはね、みんなに結構老けて見られるんだよ。何故かっていうと……」

ディアはすつと人差し指を眉間に押し当てた。

「ここのシワ」

「あー、あの。魔王にしか見えないあのシワね……」

「あのシワさえなければエルガーも年相応なんだよ。ただ仕事柄毎日ここに溝入っちゃうのは仕方ないんだけどさ」

「確かに二十一で出世は早いかもねー」

「そうだね」

なんで出世問題について話してるんだっけ。っていうか、ディアはその辺りの事情には詳しいらしくついにこの国の雇用問題までペラペラと喋り出している。むしろここまで喋っちゃうと恐いくらいに。

意気揚々と語るディアは天使系。万年縦皺エルガーは魔王系ってところか。

確かに二人とも顔立ちが端正だ。そりゃあもう、びっくりするくらい肌若いし。最初のうちは顔覚えが悪いせいか一回見ただけじゃ細かく分析も出来なかったし覚えられなかったけど、よくよく見れば結構イケメン揃い。

ちなみにディアは金髪だけどエルガーは黒髪。最近の日本人より真っ黒なくらいの漆黒で、目の色はなんとびっくりゴールド。初めて見た時は「うわあ、金」としか思わなかったけど、今考えるとす

「こい色だなあ。」

「ぼーっとしながらそんなことを考えていると「ハル？」とディアが顔を覗き込んできた。

「あ、ごめん、ぼーっとしてた」

「そう？　なんだか深刻そうな顔してたから」

深刻と言えば。

「私あつさり「ここで生きていく」宣言しちゃったけど、本当にあれでいいんだろうか。」

二人とも案外心広いのかな。

「ハル、君は異世界から来たんだろう？　どんなところだったの？」
「日本はね、とにかくにも平和だったよ。友達も優しいし、学校も楽しいから」

「そう言いながら、脳裏には高校生活の思い出が蘇ってきた。別に死んだわけじゃないのに、ひどく懐かしいというか寂しい気分になる。」

「勉強は面倒だったんだけどね」

「私はお世辞にも頭が良いとは言えなかった。体を動かす方が性に合っていたし、中学の頃からさぼり気味だったのもある。」

「慰めてくれなくても大丈夫だよ、ディア」

「そう言うと、ディアの蒼い瞳が大きく見開かれた。」

「私、しばらくはここにいて決めた。決めたことは貫くのが日本人だから。そう散々教えられてきたから」

ウォーターフォードのことは大体わかったんだし。

後はこのまま生きていければ。
ここで暮らしていければ。

この時はまだ、それだけで充分だった。

09 ウォーターフォード（後書き）

容姿の説明遅くなってすいませんでした。
エルガーはおじさんじゃないんです（笑）

たくさんの方々に読んでいただいているようで、毎日感謝でいっぱいです！
これからもアルカナの行方をよろしくお願いします。

10 騎士ライフインシュヴァイツ城！

重く巨大な木製のドアを押して開くと、中からは湿気のこもった空気が流れてきた。しかしその匂いにも、彼は眉間に皺一つ寄せない。

室内に入りまず目につくのは高々と壁に這った書架。そして周囲にも背の高い本棚が並べられ、より一層の威圧感を与えている。窓は板で何重にも固定され、光の類は一切入らないこの部屋は長年使われていたのが一目でわかるほどだった。

赤かった絨毯はくすみ、壁や天井には滲みが目立つ。床を歩くたび大理石で造られていない床板は悲鳴を上げ——そして何よりここにある本のほとんどが埃を被って薄灰色に身を変え、書架に収められていた。

そんな湿っぽい室内に入り、後ろ手にドアを閉めた彼は部屋の隅から漏れるオレンジ色の光の方向へ歩き出した。

「エルガー」

しわがれた声が彼を呼んだ。

彼——エルガーはその声にぴたりと足を止める。

「昼間から珍しいのう」

次いで紙が擦れページがめくられる音が響いた。エルガーは再び厚みのある絨毯の上に足を踏み出し、光が漏れている書架の間に立つて声の主に視線を向ける。

梯子の途中、暗がりの中ランプで手元を照らしながら重そうな本の文字を追っていたのは小柄な老人だった。本を持つ手は皮と骨だけになり顔は皺でくしゃくしゃになった、その中で蒼い瞳だけが宝石のように輝いている。

「頼みがあつて来ました、エルナイト卿」

「よそよそしい言い方はやめなさいと前に言つたはずじゃが」

老人、エルナイト卿はそう言つてエルガーに視線を向ける。

「まあ仕事柄仕方ないのかも知れんのじゃが」

細められた蒼い瞳の中には、僅かに温かい感情が見える。しかしエルガーはその視線を撥ね退け口を開いた。

「私の部屋にいた不審者の話ですが、彼女は自分が異世界から来たと言っています」

「ほう。それで？」

「彼女の持ち物を調べて欲しくて頼みに来ました」

エルガーが胸のポケットから取り出したのは手の上に易々と収まるほどの小さい箱——ハルの持ち物である、携帯電話だった。

「少なくともお前さん、少しはその者の言い分に信憑性があると思つておるんじゃない？」

エルナイト卿はエルガーに視線を注ぎ、彼もまた真っ向から見つめ返す。

この老人の「答えなければ受け取らない」という合図だ。

しかし金の瞳に映ったのは、困惑の色だった。

「彼女の言い分は明らかにおかしいですが、彼女自身不審者の類では無いと感じられます」

現に彼女から殺気を向けられたことはなかった。それどころか順応すぎるほどに、今の生活を受け入れ「ここで生きていく」という突拍子もない「決意」まで見せている。

「それはエルガーがその者の人格を認めたということじゃの」

「そういうことになりますね」

「しれつと答えおって……」

呟いたエルナイト卿が携帯電話を受け取り様々な角度からそれを観察した。

「お前の頼みならば仕方あるまい。調べておく」

「お願いします」

「ただし条件が一つ」

その言葉に、エルガーの眉間にぎゅっと皺が寄った。エルナイト卿もそれを見て小さく溜息を吐きつつ

「近いうち、必ずこれの持ち主を連れてくることじゃ」

携帯をかざすとストラップが軽快な音を立てる。条件を聞いたエルガーは露骨に嫌そうな顔をしたが最後に小さく「はい」と答えた。

この世界の詳細やらエルガーとディアの歳やらがわかったところで、私は騎士団の仕事に合流した。

騎士団とは言っても毎日訓練ばかりしているわけじゃない。城内や城下町の警備、盗賊の討伐とかまあ様々な仕事がある。

今日はそのうちの『城の警備』をやる予定、だったのだけど。

私は当然剣も持っており、まだまだ未熟者のため説明のみで終了。

そして待ちわびた昼ごはんの時——小さな事件が起こった。

「美味しそ——っ！」

食堂のテーブルに並べられる大量の昼ごはんを見て私は歓声を上げる。

この食堂は城内で働く人たちの多くが交代制で利用するところらしい。騎士団第一隊で食事することになっているけど、大柄な男性が多いためか量がハンパじゃなく今までに見たこと無いくらい皿に山盛り。さすがに壮快な眺めだ。

周囲の人たちがイスに座り始めたので、私もどこかに座ろうと突っ立っているディアの横にあつた席にひよいと引いて腰を下ろしたが。

なんだか周りが硬直したんですけど。
しかもみんなこっち見てるんですけど。

「え……？」

急に不安になったので恐る恐る席から立ち上がる。しかし多くの視線はこちらに向けられたままだ。

なに、まさかいきなり座っちゃまずかったとか！？

「あ、あの、ディア、ごめんなさい……」

「いや、謝るほどのことでも……っていうかそうか。ハルは知らないだった」

真っ青な顔で謝った私を前にディアがぼんと手のひらを打つ。

「あのねハル、この世界では、女性のイスは男性が引くものなんだよ」

「それって義務？」

「義務ではないけど、男女間のマナー？ 一般人はあんまりやらないけど城内では結構普及してるんだ」

—— エスコートの問題かい！

思わず突っ込みそうになるのを堪え「そうなんだー」と適当に流しておく。

男性にイス引かれる？ そんなお姫様みたいなこと出来るわけないじゃないですか！ ただでさえ剣道の中育ってきたじゃじゃ馬娘だっていうのに！

「じゃあ今日は僕が……」

「遠慮します」

大して問題はなさそうだと悟り、早々の席に着くとディアはシヨックを受けたような顔をして固まっていた。

やがて全員が席に座ると、いよいよ号令の準備だ。胸の前で手を合わせた私は再び痛々しい視線を向けられる。

「ハル、号令の時は右手を左胸」

隣からディアに囁かれ、私は慌ててみんなと同じように態勢を整えた。

「そうだハル、今度君にいいものが届くよ!」

食事中、パンを頬張っていた私の耳にディアの嬉々とした声。そちらを見ると視線がぶつかった。

「……」

パンが口に詰まってるから喋れない。それを察したのかディアが応える。

「やっと女性用の剣が届くんだ」
「んんっ!?!」

むせ返りそうになったところで胸をどんと叩いてパンを呑み下した私はもう一度ディアに向き直った。

「剣！？　なんで!？」

「ハルだつて騎士団の一員だろ？　剣は必要不可欠じゃないか」

いや、そりゃあそうですけども。
でも。

私、三日前まではエルガーの部屋に忍び込んだ罪で独房に入れられてたのに！　警戒心無さすぎでしょうそれは！

「普通のは重いから、細身のものなんだけどね。そろそろハルも本格的に仕事に関わっていくだろうし、剣は携帯してなきゃ」

剣なんて物騒なものの携帯できるわけ———と思つたが、壁一面には騎士団のみんなの銀色に輝くものがずらつと立てかけられたりしているわけで。

やっぱり持つてなきゃいけないのかぁ。

「あ、あと部屋も手配したから、今日からそこで寝るといい」
「そんなことまで……」

確かに私、今までずっとエルガーの部屋で寝起きしていたわけだしそろそろ自分の部屋があつてもいいかもしれない。
なんだか城内の生活にもそろそろ慣れそうだな。

「なあなあ」

と、考え事をしていた最中、隣の席から声かけられた。
勿論聞き覚えのない声だ。

振り返ると見たことの無い男の人が座っている。銀色の髪に、灰

褐色の瞳という……これまたすごい色合いの人だ。ディアやエルガーで結構慣れたと思ってたんだけど、まだまだ種類はあるらしい。ウォーターフォードって色彩豊かだな。

「……はい？」

「あんた、なんで目黒いの？ 俺、この間から気になってたんだけど」

「その前にどちら様ですか」

まず最初に名前を名乗らんかい！ と男を見ると案の定彼はにやりと笑った。

「強気な女は好きだよ」

——めんどっ！

「ちなみに俺はジェラルド。ジェラルド・アイン・スリング。できればエルガーとディアよりも早く名前を覚えてほしかった」

「七瀬ハルですー、漫画みたいな台詞をどうもありがとう」

そつといえばヨーコが言っていた。

異世界トリップした先がお城で騎士団とかあったら必ず女たらしキャラがいる。

こいつだ！ 確信犯だ！

「で、目のことなんだけど」

「生まれつきなんで」

「でも預言書では黒い瞳の人間はいないことになってるんだよな」

「ヨゲンシヨ？」

耳が聞きなれない言葉を拾ったので思わず聞き返してしまった。
ヨゲンシヨって……予言書？ 世界が滅びるとかマヤ文明とか、
そんな感じの？

「もしかして預言書のことあんまり知らない？」
「聞いたこともないです」

へえ、とジェラルドが可哀想なものでも見るような目でこっちを
見てくる。なんだその目は。

「預言書っていうのは「あああああ——っ！」

ジェラルドの言葉がディアの絶叫によってかき消された。何事か
と振り返るとディアは目を大きく開いてこちらを見ていた。

「な、どうしたの、ディ「ハルツ！ こんなやつと喋っちゃダメだ
よ！ 君は純粋な女の子なんだから！ 純潔が穢されるっ！」
「人前で純潔とか言わないでよ馬鹿っ！」

大声で叫び合う私達に周囲は興味津津な様子で視線を向けてくる。

「そう騒ぐなディア。俺は別にハルをとってくおうとしてたわけじ
やないって」

「今まで何人のメイドに手を出した？」
「覚えてない」

ジェラルドは女の敵だな。

そう判断した私はぎゃんぎゃん騒ぐ二人を無視してパンに手を伸

ばす。ふっくらもちもちパン。もしかしたらこれが主食になるかも。
腹を満たして、満足した私は背もたれによりかかって息を吐きだ
したのだった。

あるかな。

——もうすぐだよ、アルカナ。

11 日本の記憶

「あの女は何者だ」

暗闇に男の声が響いた。

夜空に月の浮かぶ刻、城内は静まり返っている。その一角、中庭が見下ろせる位置に二つの影があった。

視線の先には中庭を横切る少年——否、少女が一人。

先日急に現れた彼女は騎士団団長のエルガーとも第二隊隊長のデアアとも懇意で、第一隊の入隊まで果たしている。情報では最初彼女は何らかの罪で独房に閉じ込められていたのに、だ。

「今のところ——特に何の問題も」

「マークは外すな。あの女、厄介な存在になりえる」

その言葉とは裏腹に。

男の声はどこか楽しげだった。

手の中に感じる重みと、ヒヤリとした冷たい感触。

素振りをしている私の心はびっくりするほど晴れ晴れしていた。

午前中、騎士団第一隊は訓練から始まる。昨日は部屋を支給され、そして本日ついに私に剣が届いた。

その剣が、今私が振っているもの。私くらいの女性が片手でも扱えるくらいには軽量で細身だ。振ると遠心力がかかって更に重くなるけど、それは不可抗力。名前はカタテケン？ とかハンド・アンドなんちゃら？ とかそんな感じだった気がする。

ともかく私の剣が手の中にある。これは私が騎士団団員である証で、ここが私の居場所なんだって気にさせてくれていた。

「やめ」

とジェラルドの制止の声で、メンバーの素振りが終わった。その途端思わず剣先を地面につけて大きく息を吐きだしてしまう。

「お、重い……生身の剣ってこんなだったんだ……」

本物の剣は鋼で出来ているだけあって竹刀とは比べ物にならない重さだ。明日の筋肉痛は確定！

「しかも暑いし……」

日当たりのいい中庭、日差しはきつきつだし芝生は蒸れるし。足元はブーツだし長袖シャツだしこの制服通気性悪すぎる。

ということだ。

中庭の隅には小さい井戸みたいなものがあって木桶で水をすくえるようになってる。とりあえず午前中の大体の訓練は終わったわけなので、第一隊のみんなは頭から水をかぶったりしているけどさすがにそこまでは出来ない。

「おお、汗に濡れたハルも綺麗だね」

「気持ち悪い」

剣を鞘に納めて井戸に向かおうと歩いていると、すれ違いざまにジェラルドにいかかわしい言葉をかけられた。ちなみに彼は第一隊の副隊長らしい。今日はエルガーの代役ということで指揮している。

「そういえばジェラルド、エルガーは？」

「ん？ あいつなら仕事仕事。なんか色々立て込んでるんだって」
「へえ」

確かにあんなに若くしての出世じゃ苦勞也多いんだろうな、と私は一人頷く。

井戸の横に剣を立てかけ、腕まくりをして顔に水を叩きつけた。運動した後に顔を洗うのってすごく爽快で気持ちいい。

タオルが無いので仕方なく制服の肩口で顔を拭く。腕も洗い流してとりあえずプチクールビズは完了。

そこへ。

「あの」

と控えめな声がかけられた。

しかも女の子の声だ。

勢いよく振り向くと小柄な少女が三人。少女とは言っても同い年ぐらいだから十七、八ってところか。大体165センチの身長の中から見れば大抵の女の子は小柄に見えるものだけだ。

でもって女の子達が身につけているのはヒラヒラのメイド服。

——生メイドだ！

「なにかご用ですか？」

「ハル様ですよ？　よかつたらこれをお使ください」

差し出されたのはフェイスタオルだった。なんだか部活のマネー
ジャーみたいだな。

「え、でも……」

「遠慮は要りませんわ。このお城を守っているのはあなた方騎士様
ですもの。どうぞ」

そう言った彼女達の瞳はキラキラ輝いている。なんだかこのキラ
キラ、日本でも見たことあるような気がするんですけど。

「じゃあありがたく」

受け取ると三人組はぱつと笑顔になって去って行った。

——あの子たち絶対私が男だと思ってる。

「ハル、大人気だね」

腕を拭いていると今度はディアに声をかけられた。第二隊は今日
は休日だって言ってたけどディアはちよくちよく第一隊の様子を見
に来る。

「私、男顔だから」

「確かに美形だよな」

「ディアに言われてもあんまり嬉しくない……」

ディア自身がばりばりの美形だから説得力というものをあまり感

じない。なんたつて実写天使みたいなものだからね。

「そうだ、今日はエルガーに呼びだされてたんだ。ハルも一緒においで」

「エルガーが？ でも私、まだ訓練が……」

「大丈夫、ジェラルドにはもう言つてあるから」

それだけ言つたディアは私の手を取るなり歩き出した。

——うわ、こつちの人つてスキンシップ激しい！

もつぱら大和撫子精神が旺盛な私は、いきなり手を握られただけでもびっくりしてしまう。女の子となら手はいっぱい繋いだことがあるけど男の人の手つてやっぱり繋ぐ機会ないんだよね！ 彼氏とかいたことないからさ！

「……？」

「……」

目の前にあるドアを見上げて私が思ったことはただ一つ。

——こわっ！

城内の奥の方、光が差し込まない薄暗い空間にそのドアはあつた。背が高く、表面には繊細な模様が彫られている。しかしその豪華な雰囲気とは裏腹に埃が積もり、金の取手は錆びついていた。

こんなところにエルガーがいるとは思えないんですが、と正直に顔に出てしまう。ディアは「大丈夫だよ」と言っただが……何が大丈夫なのかわからない。

ノックだけでドアを開けたディアの後をそろそろとくつつくように歩く。

中に入ると籠った湿気の匂い。周囲にはたくさんの本棚がずらっと並んで、分厚い本がぎっしり収められている。

「エルナイト卿、連れてきました」

急に立ち止ったディアの背中にぶつかった私はよろけた態勢を立て直した。暗闇に目をこらして辺りを見てばかりいたので目の前の光に目を細める。

本棚と本棚の間、ランプの光が辺りを覆っている。本棚によりかかっているのがエルガー、そして正面には見知らぬ小柄なおじいさん。

「ふおっふおっふお」

喋った！

「お前さんが例の『不審者』じゃの？」

「え？ ああ、はい。みんなには不審者って言われています」

いきなり話しかけられてどもってしまったけれど、老人は優しい笑顔を見せるだけ。なにがなんだか全然わからない。

「異世界から来た、と聞いたが」

その言葉に私は目を二、三度瞬き。

エルガーの方を見るとあっちはガン無視状態で、どうにもならなかった。

「日本から来ました」

「ニホン……とな？」

「私が十七年間暮らした、大切な故郷です」

このおじいさん、一体何者なんだろう。

エルガーもディアもさっきから黙りっぱなし。それほど偉い人なのか。

「実はのう、そのことについて調べさせてもらったんじゃ」

老人がローブのポケットから白い何かを出した。——それ私の携帯じゃん！ エルガーめ、いつの間に！

「これを見る限りじゃと確かに異世界のもののように思える。じゃが、まだお前さんが異世界から来たという明確な証拠が無いんじゃない」

はあ、と私は曖昧に相槌を返した。つまりどうということなの？

「お前が本当に異世界から来たのか、証明してもらおう」

怪訝な顔をしているとエルガーが老人の言葉を代弁したようだった。おじいさんも、うむ、といった感じで頷いている。

「証明って……どうやって？」

「足元を見なさい」

足元？

視線を落とすと、難しそうな紋様が床に描かれていた。半径メートルほどのそれは漫画とかアニメでよく出てくる『魔方陣』によく似ている。私には読めない文字や波みたいな線が幾重にも重なっている。

「なにこれ？」

「見ての通り、魔方陣じゃ」

こんな踏んじゃっていいのかな。

どここうとした私の肩をディアが掴んで押さえた。

「ディア？」

「ハル、動かないで、すぐ終わるから」

「え？ なに、すぐ終わるって？」

体中に悪寒が走った。悪い予感しかしないのは気のせいですか？
いや、絶対気のせいじゃない！

「やだっ、何するの！？ ディア、離してよっ！ エルガーッ！」
「黙っておけ」

するとおじいさんが何事かを呟き始める。私の嫌な予感ゲージはみるみるうちに百パーセントに近付きつつあった。エルガーは眉間に皺を寄せてこっちを見ていて、ディアは必死で私をその場に止まらせている。

「ディア、離れろっ！」

鋭い声が響きディアが私の体から離れた瞬間、陣が眩しい光を發した。

光は炎のような灼熱を感じる赤で、同時に床から植物のツタのよ
うなものが飛び出しブーツにぐるぐると巻きつく。

「いつやあああ——っ！」

気持ち悪すぎる光景に私は涙目になりつつ絶叫した。更に陣は大きく光を發し、ズン、と地面が揺れる。爆風のような風が吹き荒れ、思わず目の前を腕で覆った。

——死ぬ死ぬ死ぬ死んじゃう！

十七歳で、しかも異世界で死ぬなんて絶対に嫌だ！

「——！」

おじいさんが何かを叫んだ。風の音があまりに酷くてあんまり聞こえなかったけれど。

ただどの瞬間、一際大きな「バンッ！」みたいな爆発音がして風が止む。

恐る恐る顔の前で構えていた腕を下ろすと、赤い光は弱まって魔方阵の線の上を脈のように駆け巡っていた。ツタがブーツから剥がれ、床に戻っていき足が解放された私は思わず尻もちをついてしま
う。

「な、な、なにを……！」

「お疲れ様、ハル。終わったよ」

ディアがポンと私の肩に手を置いた。彼は笑顔を浮かべているが私はそれどころじゃない。

「今の何！？　ちゃんと説明してよっ！」

「ごめんごめん。まずはこれを見て」

そう言ってディアが上を指差す。足元かと思ったら今度は上か。言われた通り座ったまま上を見ると――なにこれ。

いくつもの『映像』が宙に浮いていた。

動画が映る半透明の薄っぺらいディスプレイが漂っているとも言っただろうか。十個ほどのそれらが魔方陣の周囲を回るようにのるのろと流れている。

立ち上がってその一つを見ると、幼い少女が転んだ映像だった。

「……なんで小さい頃の私が転んでるの」

幼い少女はまだ小さかった時の私だ。五歳ぐらいの時の映像だろうか。映像の中の自分の顔は血だらけになっていた。そういえば転んで鼻血を出したことがあったっけ。

「君の記憶だよ」

ほら、とディアが映像を取って私に差し出す。え、なにこれ、触れるの？　残る二人を見るとやっぱり映像に触れてそれを凝視していた。

「人の記憶をタッチパネルみたいにして覗くな――っ！」

顔から火が出そうなほど恥ずかしい。すぐさまエルガーとおじいさんの腕から映像をむしり取って元に戻す。

「確かに記憶はこの世界のものじゃないのう」

「あつたりまえでしょう！　なんてことするんですか！　仮にも乙女の記憶を覗こうなんて破廉恥にも程があります！」

「乙女か？」

呟かれた言葉に私は鬼のような目でエルガーを睨んだ。

「悪いのう、他に方法は思いつかんもんで。魔法で記憶を取り出せばいいと思ったんじゃが、いささか出過ぎたようじゃ」

超マイペース！

「悪いんじゃがここに来た時の記憶だけ探して見せてくれんかのう。数分したら戻ってしまうんじゃ」

う、と私はたじろいだ。

自分の記憶を見られるのがどんなに恥ずかしくても、ここでこれを見せなければ私の身の潔白が完全に証明されたことにはならない。渋々、映像の中から日本で過ごした最後の日であろうものを探し出しおじいさんに渡す。

「ふむ、確かに『召喚』されておるようじゃのう」

「……認めてくださってどうもアリガトウゴザイマス」

自分でも驚くほど声が無愛想だった。

「しかしのう、一体誰が何の目的で……」

そう、そこが一番のポイントだ。

私は誰にどうして呼びだされたのか知りたい。そして日本に帰りたい。

「あの、私が日本に帰れる可能性ってどれくらいですか？」

「限りなく0に近いだろうな」

エルガーの言葉に顔から血の気が引いて行くのが、嫌なくらい自覚できた。

「異世界は数え切れないほどある。呼ぶことは可能だが送りだしただら最後、どこの世界に辿りつくかはわからない」

「そんな……」

つまり現時点で日本に帰れるなんてことは無理。

せめて、せめて日本茶の一杯でも最後に飲んでおけば——後悔の念が胸に押し寄せた。家出た時ちゃんとガスの元栓切ったつけ、とか。そんなどうでもいいことばかり。

家族を残して、こんなところに一人で。

そんな思いが生まれたのはエルガーの言葉を聞いた数十秒後だった。

11 日本の記憶（後書き）

1万HITありがとうございます！

ここまで読んでくださった皆様方に本当に感謝しています。みなさんが読んでくれたから、ここまでこれました！

引き続きアルカナの行方をお楽しみください。

12 友達作り大作戦

日本茶が飲みたい。
和菓子が食べたい。

「帰りたい」

夕方、私がいるのは一昨日の夜に散歩途中で見つけたミニ噴水付き芝生テラスだった。人気は無く、手すりに顎をのせて茫然と城下町を見ていると寂しさが増す。地平線に沈みかけた夕陽が顔の皮をヒリヒリと焼いていた。

今日の午前中、変な老人——後にエルナイトさんだと教えてもらった——に魔法で記憶を見せた結果私の身の潔白は見事証明された。本物の異世界人だってことも、偶然エルガーの部屋に出てきてしまったことも。

でもその代わり、ウォーターフォードから日本に帰る明確な術は無いとも宣告された。

日本に家族を置いてきてしまった。友達も大切なものも全部。

勿論テンションは下がり気分は憂鬱。

「はあ……」

文字通り頭を抱え、溜息を吐きだす。

西日で肌が刺激を受ける中、私は目を細めた。

——死ぬよりマシだ。

それが昔から自分を励ます唯一の言葉。どんなに凹むことがあってもこの言葉でやっていけた。

生きていなければ何も出来ない。笑えない、泣けない、歩けないし走れない。眩しい朝日も沈む夕日も見ることでだって出来ない。

希望も持てない。

日本に帰る術が見つからないなら自分で探せばいい。術が無いなら作ればいい。

ぺちん、と頬を軽く叩いた私は勢いよく立ち上がった。

「こんなところで悩んだってどうにもならないんだから！ 今はとにかく突っ走れ、七瀬ハルツ！ 大和撫子がこんなでどうするヘタレめっ！ チキンめっ！ ええい、やってやるよ異世界っ！ 絶対生き抜いてやるっ！」

最後に「あああああ——っ！」と夕日に向かって身を乗り出して大声で叫ぶ。

うん、我ながらいい絶叫だ。だいぶすつきりした。

さて、そろそろ夕食の時間だし。

夕日に背を向けテラスから屋内に入ろうとした時。

テラスの入り口に、メイド服の少女が一人。

それを見て私は硬直。

——見られてた！

電撃が体中を駆け巡った。少女の目には感情という感情がいつさ
い無くて、こちらがぞくりとしてしまうくらい冷えた瞳をしている。
そして深緑の髪を肩のあたりで二つ結びにした小柄な彼女は腕に
何かを持っていた。

「探していました」

その正体を探ろうとした時、彼女が口を開いた。
凜とした透明な声。

その声に圧倒されつつ私は曖昧な笑顔で首を傾げる。

「探していたって……私を？」

「ハル様でいらっしやいますよね」

なんだろう、この子メチャクチャ怖い。

でも不思議と悪い感じはしない。ただちょっと威圧感がすごいだ
けで。

「確かに私はハルだけど、何か用事？」

「これを受け取っていただきたくて参りました」

そう言っただけで彼女は私の前に立つと腕に持っていた何かを差し出し
てくる。片手でも持てそうな紙袋で、先が折られていて何が入って
いるのかはわからないけど——微かに甘い匂い。

いかにもパン屋の袋のようなそれを渡して任務は達成と見たのか、軽く礼をした少女は屋内への敷居を超えた。

「ちょ、ちよつと待って!」

慌てて追いかけると彼女が無表情で振り向く。髪と同じ緑の瞳がわずかに見開かれた。

「なにか」

「あ、あの、名前を!」

近くで見ると、彼女はとても美人さんだと気がついた。瞳も大きいし、形のいい唇はきゅつと結ばれ品の良い顔立ちだ。

「シエルルですが」

「シエルル? あの良かったら……」

「先程のことは誰にも言いませんのでご安心なさってください」

エルガーなみの鉄壁無表情!

先程のこととはやはり独り言と絶叫のことを言っているんだろう。

「違うの、あの——よかったら私の友達になってくれないかな」
「トモダチ?」

なんじゃそりゃ、という感情が少し顔に出た。

前々から考えていたのだが、城内で女の子の知り合いがいなくて大変なことだ。女の子同士の話だってあるだろうし、色々わからないことを尋ねるにも同性の方がいい。

名付けて友達作り大作戦ってなわけで。

いつまでもグダグダ落ち込んでいるわけにもいかない、今はここに
いるんだから。

でも一人は寂しすぎるし、出来れば一人くらいは知り合いが欲しいななんて思っていたところなのだ。

「トモダチとは、ハル様と私が個人的な交流を持つということです
か」

「え？ うん、まあそうなるけど」

なんだか言い方が難しくてきとくに答えてしまったけれど……
コジンテキナコウリユウでまあ大体合ってるよね！

「申し訳ありませんが辞退させていただきます」

シエルルの冷たい声に私はしばし呆然。

「え」みたいな顔をして固まってしまった。

「……なんで？ やっぱ、嫌？ 男顔だから？」

「あなた方騎士様と私達メイドの個人的交流は階級的に問題がありますので」

「階級？」

なにそれ、上流とか中流とかそんな感じのこと？

「失礼します」

シエルルは私を置いて乱れの無い歩調ですたすたと廊下を歩いて

行った。西日を受けた私は心がますます凹むのを感じながら紙袋の折口を開く。

甘い匂い。

中に入っていたのは、まだ温かみの残るマフィンだった。

「シエルル——ッ！」

城内に響き渡る声。

重たい剣を腰にぶら下げながら私は赤い絨毯の上を走っていた。どうしてかわからないけど自分でもびっくりするくらい必死で。

角を曲がったところで足を止める。そしてシエルルが五十メートルほど先を歩いているのを発見した瞬間に飛び出していた。

勿論「シエルル——ッ！」と大声で叫びながら、だ。

さすがに気付いたのか、シエルルが驚いて振り返る。走っていた私は踵が擦り切れそうなほど勢いよくブレーキかけ、なんとか彼女の前で止まることができた。

「なにか」

「これ、作ってくれたのシエルルでしょ？」

持っていた紙袋を見せるとシエルルが驚いたように瞬きをする。

やっぱりそうだったんだ、と私は確信した。

なにせ紙袋の内側からもシエルがつけているであろう香水の匂いがした。昔から女の子に囲まれていたおかげで会得した、女子の匂い嗅ぎわけ技がこんなところで役に立つなんて。

「素敵なプレゼント、ありがとう」

「別にそういうわけじゃ」

そう言って首を振ったものの、彼女の頬は傍から見てもわかるくらい真っ赤になっている。

——無表情だけど照れ屋なんだ！

それを見てこっちまで赤くなってしまった。男子高校生か私は。

「やっぱりさ、階級とか関係無しに、私の友達になってくれないかな。ここでの友達、第一号！ 私、ここで一人きりだから」

ディアもエルガーもジェラルドもおじいさんもいるけど、やっぱり足りないものがある。

もしかしたら無意識のうちにヨーコの身代わりにしようとしているんじゃないか。

ただ一人でいるのが怖いだけじゃないのか。

一人でいることに同情されたくない。寂しいのは嫌だ。そんな人間らしい欲に駆りたてられてシエルを犠牲にしようとしているんじゃないか。

でも。

私の欲云々よりも。

マフィンを見た時、甘い匂いを嗅いだ時——この子の温かさがわかった気がして。

「シエルル、私のこと心配してくれたんでしょ？」

一人になりたくない、じゃなくて。

この子と一緒にいたいって気持ち膨らんだ。

「毎日暗い顔をしてる私を励まそうとしてくれたんだよね」

そう言って微笑みかけると、シエルルはぼかん顔だった。

むしろ複雑そうな顔って言うんだろうか。何か変なこと言ったかな、私。

そろそろ不安になりそうなくらい無言の間が続いた後、シエルルは静かに閉ざしていた唇を上げる。

「確かにそれを作ったのは私です。ハル様を心配したのも本当です。ですが、メイドが騎士様を支えるのは本来あるべき姿。当然のことをしたまでです」

うん、そう言われると思ってた。

バッチコイ！

「わかってるよシエルル。だけど騎士とかメイドとか階級とか関係

無く、私はシエルルと友達になりたいって思うんだ。そんなんじやダメかな？ 勿論そんなこと許せないって言うなら『メイドが騎士を支える』ってだけでもいい。でもその代わり、私もそれなりにお礼をさせてもらうけど……」

あ、なんだか押しつけがましい。
こんなんじや断れるわけないじゃん。

「ごめん、嫌ならいいんだ……」
「やらせていただきます」

シエルルの声に、私は落としかけていた頭を持ち上げた。

「え！？ いいの！？」
「ハル様がよろしければ、私もお役に立ちたいと思います。トモダチ、私の手には余るかもしれませんが——ところで」

嬉しくてつい笑顔になった私に、シエルルは無表情で確認のようにこう尋ねた。

「ハル様は、女性ですよね」

ちなみに。

初対面で私を女だと見抜いたのは、ヨーコと合わせて二人目だった。

「ぷっ」

ディアが吹き出したきり肩を震わせてうずくまる。必死に笑いを噛み殺しているようだが隣にいるエルガーはますます眉根に皺を寄せるばかり。

朝の魔方阵のことからずっと肩を落としていたハルをなんとかして元気づけようと二人は丁度彼女を探していた。

そして見つけたのは、メイドと話すハルの姿。

赤い絨毯が敷き詰められる回廊でいきなりディアにストップされ何かとエルガーが角から顔を覗かせれば表情をこころ変えるハル。

その会話を角の先で黙って聞いているディアとエルガーはもはや盗み聞き同然である。

「ハル様は、女性ですよね」というメイドの言葉に立ち尽くしている光景が、傍から見ているとおかしくてついついディアは笑ってしまった。

ところがいつも通り無表情のエルガーは壁に寄りかかったまま何が面白いのやらといった感じで口を閉ざしている。

ハルを励ますから、と無理やり連れてこられたもののいつの間にか彼女自身の気力も回復しているし別に自分達は用なしだったのではないか。

「よかったねエルガー」

「何がだ」

「ハルが元気そうで」

ぴくり、とエルガーの表情が僅かに動く。

「そういう奴なんだろ」

ゴーン、と。

夕時の鐘の音が、城内に響いた。

13 友達作り大作戦、成功

「ねえねえ聞いてっ！」

ノックをして返事も聞かず、私はエルガーの部屋のドアを開いた。中にいたのはソファに座ったままのディアと、珍しく剣の手入れをしているエルガー。

私はうるさいくらいの足取りで室内に踏み込むと同時にドアを閉め、くるくると踊りながら二人の前に立つ。

「なんと私七瀬ハルツ、本日友達が出来ましたっ！」

ぱつと両手を上げてそう宣言すると、ディアは笑顔で拍手をしてくれた。

エルガーはやっぱり無言。

「メイドさんなんだけど、すごい美人でね！ しかもなんとっ、初対面にて私を女だと見抜くという所業を成し遂げたんですよ！ 滅多にいないよ！ びっくりして固まっちゃった！」

「お、おお、それはすごいね……！」

なんだかディアの目線が異様に泳いでいる気がするんですが。気のせい？

友達作り大作戦は見事成功。メイドのシエルルと友達になった私は気分上々だった。

無表情だけど美人で、照れ屋で優しい子だ。普段はルーと呼んで

ほしいとのことだったのでそれは了承した。しかし彼女、生粋のメイド。メイドの中のメイドだから私のことを気軽に「ハル」とは呼んでくれないらしい。

「ともかく朝のことは吹っ飛んだよ！ 日本に帰る手立てなら探せばいいんだし、今はとにかく仕事仕事っ！ 騎士団を頑張らなきゃ！」

「その仕事病のお前に新しい任務が来てるぞ」
「そうそう仕事——って、え？」

気合いを入れて拳を握りしめる私に向かってエルガーが珍しく声をかけてくる。

しかし剣を収めた彼の言葉に私は思わず間抜けな声。

「ニンム？」

ニンムなんて、そんな一般庶民の私が滅多に聞くこともないような単語！

ニンムってあれでしょ？ 任務でしょ？

「え、その任務って何するの？」

「預言書の探索だ」

でた、預言書！

以前ジェラルドが言っていたから一応頭の中には止めておいたんだけど……何の役割があるのかさっぱりわからない。

怪訝な顔をしているのに気付いたディアが「ああ」と声を上げる。

「預言書っていうのは、ウォーターフォードの人間なら誰もが知ってるものだよ。この世界にたった一つしかなくて、その一冊はバラバラになって色々なところに隠されているんだ」
「その預言書ってそんなに大事なもののなの？」

一応一国の騎士がそれを探しに行かなきゃいけないんだから、そこそこ大事なものなんだろうなあ」とディアに視線を向けると、彼は珍しく真剣な面持ちで頷いた。

「預言書はこの世界に起こる『困難』を書き記した本なんだ」
「だから予言？」

ノストラなんとかつていう有名な人の名前を、日本でも何回か聞いたことがある。彼はたくさんの予言を残しこの世を去ったらしいけど、予言のうちのほとんどが当たっているとかが当たっていないとか。

「ハルの言う予言は未来の予知でしょ？ 預言書は未来の『困難』を書いた上で、それに対する対処法も載っている。だから、預ける言葉で預言書」

「へえ」

「しかもその『困難』は全部当たってるからね——ある意味この世界で一番恐い本かもしれない」

ディアが妙に冷めた表情でそう言うので聞いていたこちらまで背筋がぞくりとしてしまった。

でもそれだけ重要なものだとしたら国と国の間で預言書を求めている戦争みたいなものも起きたりするんじゃないだろうか。なんて言う

たつてこれから起こる不吉なことが書かれているわけだし。

「ともかく、よかったじゃないか。新しい友達が出来たんなら、この城内の案内も十分にしてもらえるだろうし。まあちよつと静かそうな子だったけど」

打って変わって人のいい笑顔でかけられた言葉に私は首を傾げた。

「シエルルが無口だって、私言ってたっけ？」

ディアのみならずエルガーの動きまでもが止まった。

「シエルル！」

「ルーです」

「ルー、聞いてよ！ ディアとエルガーったら私達の会話盗み聞きしてたんだって！ ありえない！」

星が瞬く夜空の下、テラスの椅子に座りながら私は拳を握りしめて憤怒。

仮にも、仮にも女子の会話を盗み聞くな！ しかも「友達になってほしい」なんて痛々しい台詞を聞かれていたなんてっ……！

どつりでディアの様子がおかしかったわけだ。

とりあえず二人のことは小一時間説教してきた。

「何か問題でも」

「いや、問題っていうかなんていうかさ！」

「恥ずかしいのですか？」

無表情でそう尋ねられ、私の顔に血が上ってきた。

「そつ、そつだよ、恥ずかしいんだよっ！」

普通に学校みたいに王子モード出ちゃってたしさ！

「ははは……大失態」

「いいではありませんか。団長殿とディア王子とは親しい仲なのでしょう」

「うん、そりゃあまあね……」

そう返答して一瞬後、「ん？」と私は顔を上げた。

「ディア王子？」

今「おうじ」って単語が聞こえた気がしたんですけど。

「ディア王子でしょう。ハル様、もしかしてご存知なかったのですか？」

走馬灯のようにウォーターフォードに来てからの記憶が頭の中を流れていく。

僕はディア。ディア・ファイアライエス・コーラル。

コーラル？

代々この国『トゥールーズ』を治めるのが王族『コーラル』の姓を持つ者たち。

ディアからは確かにそう説明を受けましたが——彼、自分が王子だなんて一言も言っただけで済んだよ。ええ。

「ディアが生王子い——っ!？」

「生って何ですか。そのことは国民も承知の事実ですよ」

厳しい突っ込みにも、私は唇をわななかせたのみ。

まさか本物の王子に会ってしまうなんて！ 王子様だよ王子様！
王様の息子！

「で、でもディアはそんなこと一言も……っ!」

「ハル様には知られたくなかったのではないですか？」

なんでやねん！

ともかく、私はとんでもなく失礼なことをしてきてしまった。最初なんて顔はたいちゃったし！ 王子って、どうりで顔綺麗なわけだよ！ むしろ顔整ってない王子なんてこの世にいるのか!？

「うああああ——っ、まじで——っ!？」

あの天然タラシ王子め！ どうりで私の手を取ったりする仕草が優雅だったわけだ！

手すりに身を乗り出して夜景に向かってひとりしきり絶叫。すると見かねたようにルーが澄んだ声をかけてきた。

「ところでハル様、三日後の出立についてなのですが」

「ああ、預言書探索のこと？」

心臓をヒヤヒヤさせつつそうルーの方を振り返ると彼女は静かに頷いた。

「こちらを何時頃に出発されるのですか？」

「私は個別に六時半なんだって。どうしてもわからないけどさ……」

預言書の探索は三日後から。東大陸の端にある「サンストーン」という場所に向こうに何泊かして行いたい。とは言っても必ずしもそこから預言書が見つかるわけではないらしいんだけど。

しかし一般的に移動手段は馬。当たり前だけどごく普通の女子高生をやっていた私は当然乗馬技術など持ち合わせていない。一体どうしろって言うんだ。

「怪我などなさらぬよう、気をつけて下さいね」

ルーの不吉な言葉に私は「う、うん」と首を縦に振った。

「別に怪我なんてしないと思うんだけどなあ……」

「何を仰っているのですか。預言書の探索では怪我人だけでなく死者が出ることもあります」

「死者！？」

思わず声が裏返った。

死んじゃうなんてそんな！

「だから油断はなさらないでください」

「うん、わかった！ 絶対生きて帰って来るからね！」

がしつ、と私は力強くルーの小さい手を握った。

探索、三日前の話だった。

「次はサンスターンか」

その声には僅かな期待が含まれていた。

彼が彼女を見ているのは、いつも夜。しかもきまって遠い場所から腕組みをして様子を窺っている。

小さいテラスを見ることが出来るその部屋には彼一人。
嘲笑が漏れた。

騎士団の少女は新しく友人を作ったようだった。相手はメイドの——
確か名前をシエルルと言ったはずだ。一片も笑顔を見せない
彼女はどこか騎士団団長のエルガーに似ている。

「ナナセ・ハル——消すのは容易いがいい駒になりそうだ」

海の底のように蒼い瞳が、闇夜で瞬いた。

01 城外参り

私の名前は七瀬ハル、今を生きる高校一年生！

ちよつと男顔な私が、誕生日にいきなり異世界にトリップしちゃった

周りは知らない人だらけだしいつの間にかなりゆきで騎士団に入団しちゃったりしてね！ そのおかげで毎日てんてこまい！ もう大変！

一体この先どうなっちゃうの、私——っ!？

「なんてね……」

はは、と私は一人苦笑をもらした。

今までの出来事を一世代前の漫画風に表わすとこんな感じだろうか、とちよつと想像してみたところこんな風になってしまった。我ながら恥ずかしいことを思い浮かべたものである。

今日から私の所属する騎士団第一隊と第二隊の面々は東大陸の端、ここから遠く離れた『サンストーン』という地域に『預言書』の探索に行く。

預言書はこの世界に起こる『困難』とその対処法を書いた本らしいけど一回の探索で見つかるのはほんの二ページ分ほどらしい。それを現地に何泊かして探すんだから、相当な手間がかかるはずだ。

ちなみに私、この間までは探索には自分一人で行くものかと思っ

ていたが無表情魔王エルガーに「そんなわけあるか」と一蹴された。

ともかく、そんなこんなで探索に出発する朝が来た。

「おお、いたいた！ ハル、こっちだよ！」

城内一階部分、巨大な大門の前に第一隊の集団を発見。そちらに向かっててくてく歩いていると、そんな声がかけられた。

集団の中で目に付いたのは、きらつきらに輝く金髪と銀髪。
ディアとジェラルドだ。

まだ閉じられた大門は大きすぎて首を曲げて見上げなきゃいけないくらい背が高い。一国の城の門だからこれが当たり前なのかもしれないけど——うん、ナイス大門！

二人の方へ走っていくと腰の剣の重量感がダイレクトに膝に響く。かよわき乙女の足にこんなに重い物は耐えきれない！ なんて言うてはいられず二人の前になんとか到着。

「おはよう！」

「おはようハル。今日の調子はどう？」

「うん、結構絶好調かも」

荷物を地面に置いた私はぐるぐると肩を回した。ちなみに今日はいつもの制服と何やら装飾がいつぱいついた紺色の上着に、下は白

いズボン。その上から更に黒い外套っていう重装備、肩がこりそう
だ。

普通はみんな利き手と反対側の腰に剣を差しているんだけど、それだと私はうまく移動できないので鞘をベルトに引っ掛けて後ろに回すことにした。ベルトと鞘が並行だから、短い剣であればあるほど抜くのは有利らしい。

——そしていざという時のため、昨日ちゃんと剣を抜く練習してきたんだ！

小さい頃は血豆が出来るほど竹刀を振っていた私だ。一日くらいの練習でへこたれるほどヤワじゃない！

「それにしてもサンストーンの遺跡かあ……あそこ志気下がるんだよな」

はあ、とジェラルドが重々しく溜息をついた……幸せ逃げちゃうよ。

「遺跡？ 遺跡に探索にいくの？」

「ハル知らなかったのかよ。あそこの遺跡は周りが森ばっかで鬱蒼としてて、湿気が多いんだ」

どつりでジェラルドのテンションも低いはずだ。確かに彼はそういうジメジメしたところが苦手そうなので「そうなんだ」と相槌を返す。

「だけど今日はなんとってハルと二人つきりだからな！ 楽しもうぜ！」

「は？」

目を点にした私の横で、ディアがぼんと手のひらを拳で叩いた。

「忘れてた。ハル、君はジェラルドと先に出てもらうんだ」

「ええええ——っ！？　なにそれ聞いてないよ！　なんでよりによつてジェラルド！？」

女の敵と二人きりで行けっか！　マジ無理！

「大丈夫大丈夫、僕らもすぐ追いつくから」

そう言ったディアの目線が軽く右に泳いでいるのを見て自分でもわかるくらい口元が引きつる。

「あ、みんな馬取りに行っちゃった！　じゃあまた後でね、ハル！」
「ちょ、ちよつとディア——ッ！」

裏切り者め！

ディアは第一隊の面々とともに馬の宿舎があるほうへと駆けて行った。残されたのはジェラルドと私、ただ二人。

「さあ行こうかハル！」

テンションの高いジェラルドに腕を引かれた瞬間、巨大な門が音をたてて開いた。

黄色い歓声を聞くのは本日何回目でしょうか。

初・記念すべき城下町デビューを果たした私。上から見て大体わかつてはいたが、城の外は道も舗装されてて綺麗な城下町だ。均等な高さの建物がずらりと並び、その下では市とか露店とかにかくお店がたくさん！

花に水をやりたり少年達が駆けまわったりみんな平和そうだ。

一体どこへ向かうやら、ジェラルドは足早に私の一步前を歩いている。

「騎士さま、こっち向いて——っ！」

そんな歓声に愛想のいい笑顔を振りまきながら、だ。

——芸能人？

海外スターが日本に来た時の空港の賑わいを思い出し、私の頭に浮かんだのはそんな単語だった。こっち向いて、とか普通一般人は言われないからね。

「ハルも手振つときな」

「……」

はは、と口元を引きつらせつつもなんとか笑顔を作り手を振ると「きゃーっ」と再び歓声が湧き上がる。体育の時間とかにもあったな、この光景。

「ところでジェラルド、一体どこに向かつてるの？」

「もう着くぞ、ほら」

彼が指差した先、見えるのはちょっと大きめの建物。外側には窓がちらほらついているだけで他とは違う異様な雰囲気。白いタイルで覆われたその門の入り口には、私には読めない文字がびっしり。

「なに、ここ……」

あたりまえだけど私の反応はこんなもの。なんだか最近敏感になった牢屋センサーが過剰に警報を鳴らしている気がするんですが！

「入ればわかるって」

ジェラルドはそのまま門をくぐっていつてしまう。一人入口で立ち尽くしていても意味がないので私も渋々後についていった。

ドアを開くとカラン、と鈴の音が鳴った。

「おお、ジェラルドじゃないかい！」

同時に聞こえたのは脳みそを揺さぶられそうな大声。

——こ、声でかいっ！

のけぞった私をよそに、ジェラルドは木製のカウンターまで歩いていき、そこにいる恰幅のいいおばちゃんに話しかけている。

「お久しぶりですマダム」

「マダムだなんて気色悪いこと言ってんじゃないよ色気ついて！」

おばちゃんはカウンターの向こうから豪快にジェラルドの頭をはたいた。ばしん！……ってなんだか最早人をはたく音じゃないよ
うな気がする。

二人が何かを話しているうちに私は室内を見渡した。

全体的に茶色っぽくて、外側のイメージとはかけ離れてる感じだ。とは言っても内側には物なんてほとんど置いてなくて奇妙な絵がい
くつも飾られているだけで、他にはソファとテーブルがいくつかあ
るのみ。絵は見れば見るほど不気味——これなに動物？

「ハル、行くぞー」

ジェラルドに声をかけられ、私は絵から視線を外して彼について
いった。二人はカウンターの向こう側の木のドアから更に奥に入っ
ていく。

「ねえジェラルド、本当にここなんなの？」

進むにつれ壁が灰色になっていく。まるで、あの時の独房みたい
に。

——やばい、独房軽くトラウマだ！

自覚したトラウマはともかく、私は荷物を握り締めながら後に続
いた。

「ほら、これ見ろよ」

ジェラルドの明るい声にトラウマに陥って俯いていた顔を上げ
ると、そこには灰色の金属製でめちゃくちゃ重そうなドア。

そしてそこに入るように促された私は、足を踏み出してん？と首を傾げた。

——ワラ？

床に敷き詰められていたのは大量のワラ。そしてその先を視線で追い、黒い影が蠢くのを見て私は驚きに言葉を失った。

鋭い鉤爪に、眉間の間から突き出た二本の角。暗い色の硬そうな鱗で覆われた巨体は三メートルをゆうに超え、ぎらりと光る眼は赤い。そして口元からは光を反射する白い牙。背中から生えた翼は大きく、今にも羽ばたきそう。

「ど、ど、ドラゴン——ッ!？」

映画やら絵本やらで見たことのある姿に私はいつもよりワンターン高い悲鳴を上げた。

なんてたつて生ドラゴン！本物が目の前にいるものだから恐がるものか迷うけど普通の女子高生がしそうな反応をしてしまった。

カウンターのところに飾ってあった絵はドラゴンの絵だったんだ。

「大丈夫だよ、噛まないから」

いや、普通の犬とかならちょっと噛まれるくらい平気なんだけどさ！

小さい頃からアグレッシブな私、野犬に追いかけられたりなんて序の口、最近ではくちばしの鋭いインコに噛まれても無反応でいられるようになった。

けど……ちょっとでかいでしょうこれは！ 甘噛みでも死亡フラグだからね！

「……触っても大丈夫ですかね？」

「お、ハル勇気あるなあ」

赤い目はさっきから何かを訴えかけるようにずっとこちらに向けられている。正面から見てもなんだかちょっと目の鋭いトカゲみたいでむしろ可愛い。

「鼻の頭なら大丈夫だよ」

おばちゃんのその答えに「う」と思わず息が詰まる。

ちょっと怖いけど……ちょっとっていうかかなり怖いけど！

この空気は触る空気だ！

おそろおそろ近付くとドラゴンの視線は相変わらず私に向けられている。うう、そんな目でみないでください！

なんとか顔の正面まで来たものの、ぎちぎちとした慣れない手つきで鼻の頭に触れると、硬くて冷えた鱗の感触が広がった。

対するドラゴンちゃんの反応はというと猫みたいにごろごろと喉を鳴らして目を細めている。

「かつ、かわいい……！」

「早速克服しちゃったか。恐がるハルを期待してたんだけどなあ」

ジェラルドとおばちゃんの笑い声が重なった。
そしてはて、と私は二人を振り返る。

「このドラゴンちゃんですんストーンまで行くんでしょ？ ドラゴンって走るの速いの？」

はあ？ とジェラルドは怪訝な顔。

「あの翼が見えないのかよ、飛ぶに決まってるだろ」

——飛ぶ？

とんだ御冗談を、と思わず眉が下がる。

小さい頃からアグレッシブだった私、家の近くにあった公園でブランコから振り落とされてそれ以来高所恐怖症。

手から力が抜け、荷物が床に落ちた。

私にとっては地獄の、空の旅の始まりだった。

01 城外参り（後書き）

2万ヒット感謝です！

読んでくださっている皆さま、本当にありがとうございます！

02 サンストーン

「い、いぎゃああ——っ！」

視界いっぱい青と、空を飛ぶ浮遊感に私は悲鳴を上げた。

たった今私七瀬ハル十七歳、ドラゴンに乗っております！

私の前で揚々と操縦するのはジェラルド。鼻歌の一曲や二曲は歌えそうな余裕っぷりでドラゴンの口元に繋がれる手綱を握っている。

対する私はジェラルドの腰に必死でしがみつくなかない。申し訳程度のベルトじゃ心臓が持たなくて思わず涙目になってしまふ。

「速い速い絶対速いからこれっ！」

先程、と言っても十分くらい前だけど、おばちゃんとジェラルドに連れられてドラゴンを見せられた私は「ドラゴンで走ってのサンストーンまで行くの？」とお問拔けな質問。

当たり前だけど、ドラゴンの醍醐味って飛ぶところにありだよー！

嫌がる私（オプシヨン：高所恐怖症）は恰幅のいいおばちゃんに無理やりドラゴンに乗せられ、いよいよ空の旅は始まった。

ばさばさと分厚い翼を動かして飛ぶドラゴンは、速度がジェットコースター並みに速い。おまけに飛んでいる位置は雲と地面のちょうど半分くらい。叩きつける風は強く下手したら本当に下に落ちて

しまいそうですます冷や汗をかく。

「ハル、そんなに恐がらなくなつて平気だつて」

「だ、大丈夫なわけないでしょうが！ 下見ろ下を！」

ぎゃんぎゃん騒ぐ私にジェラルドは余裕の言葉を返してくる。

「うーん、じゃあ仕方ないな。サンストーンについての伝説を話してやろう！」

「その前に下ろしてよ！」

「無理無理。俺だつて最初はドラゴンで行くの反対したんだぜ？でもエルガーに言われたんじゃ逆らえないだろ」

やれやれ、とわざわざ手綱から手を放して肩を竦めたジェラルドに私は思わず目を剥いた。

「ちゃんと操縦して頼むからっ！」

「はいはい」

悲鳴に渋々といった体で応じたジェラルドの後ろで、思わずはあと大きく溜息をつく。

さつきからリラックスさせようとしてくれるのかわからないけど、ジェラルドって危なっかしすぎる。やんちゃな悪ガキっぽいとうかなんというか、全体的に（ちよつと邪気のある）子供みtainな感じだ。

——正直振り回されっぱなしだし……！

「ところでハル、今回行くサンストーンについて質問は？」

「特にないけど……」

「じゃあいいことを教えてやる。あそこは地下に通路があるって噂なんだけど、そこには成仏しそびれた亡霊がいるらしいぜ」

そんなこと笑いながら言われても困るんですけど。

「噂でしょ噂！」

女子に恐い話吹きこむとか男子高校生かあんたは！

「地下通路は噂だけど、亡霊の話は俺も何度も聞いたことがある。実際騎士団の中にも見たことある奴はいるんじゃないかな」

「私に話すよりディアあたりに話す方が恐がつてくれそうだけどね」

ディアが耳を塞いで悲鳴を上げる姿を思い浮かべて思わず吹き出した私に、ジェラルドも「はは」と笑顔を零した。

「ハルはそうやって笑っておいた方がいいぞ」

「え？」

「人間笑ってなんぼ。笑顔でいりゃあなんとかなるって」

なんだかわからないけど……これは励ましてくれてるのかな？

なんとなく浮遊感にも慣れてきたので、こんな質問を試みることにした。

「ねえ、ジェラルドってディアとエルガーと仲良いの？」

「仲良いつていうか昔からの顔なじみだからな。あの二人とは」

顔なじみという単語に思考が一巡。

大体ヨーコと私の間柄ってとこか。日本にいる懐かしい友達の顔を思い出しなんとなく心臓がしめつけられる感じ。

いつか帰れるのかな。

「二人って昔からあんな感じだった？」

「まあな。エルガーは無愛想だしディアは毎日ぎゃんぎゃん泣いてるし、騒がしかった気がする」

ふーん、と私は小さく零した。

三人の小さい頃なんて想像できないけど、みんな前からこんな風だったのか。

ドラゴンがまた翼を大きく一振りした。

サンストーンまで、あと数時間。

「お腹すいた——！」

おそらく午後二時くらいだろうか。

東大陸の端、サンストーンに辿りつきドラゴンから下りた私は伸びをしながら叫んだ。

昼食をすつ飛ばして長時間空を飛んでいたからか、空腹にお腹も鳴るし耳に幕が張ってるみたいで気持ち悪い。

「まあまあ、あと一時間くらいしたら騎士団も着くだろうし、それ

までの辛抱だ」

ドラゴン専用の宿舎——とは言っても大きな小屋のようなところで鎖に繋がれたドラゴンの鼻を撫でながらジェラルドが呑気に言う。

「今日は遺跡の近くの宿に泊するらしいし、明日は日が昇ってから探索開始だな。ハル、しばらくここで待っていてくれ」

「え？」

「俺は市場の方でドラゴンちゃんの餌買ってこなきゃいけないんだ。悪いけど、な？」

ドラゴンに餌って市場で簡単に手に入っちゃうものなの？

まあ私はウォーターフォードの知識も薄い人間だし、ここは大人しくジェラルドの言葉に従っておいた方がいいだろう。

ジェラルドはそのまま街の方へ行くために宿舎を出ていき、取り残されたのは私とドラゴンのみ。

「……暇だなあ」

一人でここにいるのも仕方ないのでその辺りでも散歩してこよう。

立ち上がった私にドラゴンがどこか寂しげな視線を向けてくる――

——いや、ちょっと散歩に行くだけだから！

「すぐ帰って来るからね！ 大人しくしてるんだよ！」

それだけ言い残し、私は足早に外へ出た。

確かに……周りは木ばかりだ。

少し歩いたら街があるらしいけど、一本道が続く以外に隔離された宿舎の周囲は鬱蒼と草木の茂る森。しかも薄暗いしなんともおどろおどろしい雰囲気！

「テンション下がるのもわかるかも……」

まだ日も高いのに静まり返った森は、確かに心が鎮まって騒ぐのにうってつけではない。

だけど日本ではなかなかお目にかかれない光景だし、敢えて道なき道を行ってみよう！

ぐつと拳を握りしめた私は一本道の横にある獣道に足を突っ込んだ。

がっさがっさと足を動かし雑草の生えた森を進んでいると、小さな虫がひらひらと飛んでいく。それを手で払いながら更に踏み出していくと、何故か森の奥が明るくなっているのが見えた。

「ん？」

どこかに開けてるのかな？

宿舎からそれほど離れているわけでもないし、と明るい方角へと歩を進めるとそこにあるものがなんなのか段々とわかってきた。

——街だ。

森の奥は切り立った丘のようになっていて、その下には大きな街――
—— だけどそこからは人の気配は一切感じない。

灰色の外壁に絡まるツタや、ところどころから生えた草。湿気の匂いも濃く寂しげな印象のその街は天井が抜け落ちた建物も多く、中にある階段なんか日差しを受けていた。

これが、遺跡？

その時。

『アルカナ』

少年のような高い声に、私は振り返った。

だけどそこには誰もいない。

ただただ森があるばかり。

「だ、誰……？」

この声、通学路で聞いた声だ！

『大丈夫、もうすぐ会えるよ』

「あ、ちよつと待ってよ！」

消え入った声相手に呼びとめるが、そのまま一陣の風が吹き抜けて何も聞こえなくなった。

「……なんなの、まったく」

いきなりここまでトリップしちゃったのは、多分あの声が原因だ。
勝手すぎるでしょいくらなんでも！　ちゃんと現状説明くらいし
てつてよ！

ふーっ！　と大きく息を吐いた私は苛々とした足取りでその場を
後にした。

「アルカナって何？」

「あるかな？」

夜。

宿泊している宿での晩ごはんの場で、私は他人から見ても明らかに不機嫌全開な顔でディアにそう尋ねていた。

「うーん、そんなの聞いたこと無いけど……」

「でもアルカナっていう何かがあるはずなんだけどなあ……」

昼間の謎の声に対し、心の中から湧いてくる感情は「なんで私をここに呼んだんだよおい！」と「さっさと日本に帰して！」と「とにかくムカつく！」だった。

だっていくらなんでも自己中すぎ！　自分の都合で人を異世界に拉致監禁ですよ！　常識的に考えてアリエナイ！

ウォーターフォードの初友達、シエルルことルーから持たされたお城のもっちりパンにかぶりつく私を見てディアは「はは……」と苦笑い。

「でもそのアルカナっていうのが、ハルがここに来た理由と関係してるなら、早めにそれについての調査を始めなきゃね」
「そうだね」

とにかく今は食べて食べて食べまくるっ！

腕まくりをしてパンに手を伸ばすと、ディアはまだ食べるの……
？ と言いたげな視線をこちらに向けてきた。

明日から、探索が始まるうとしていた。

02 サンストーン（後書き）

すごくたくさんの方に読んでいただけているようで、作者自身本当にびっくりしています！感謝感激です。

もうすぐ3万HITです。読んでくださっている皆様、ありがとうございます。

03 探索開始！

びょーん、と。

目の前にミノムシがぶらさがった。

「い、い、いやあああああ——っ！」

悲鳴を上げた私に騎士団の面々が振り返り、しまいにはディアとジェラルドが駆け寄って来る始末。虫相手の絶叫は自分のものとは思えない悲鳴がほとんどだ。

「どうしたの!？」

「む、む、ムシがあ——っ！ 芋虫の類があ——！」

その言葉に団員たちは、なんだ虫かよ、といった風に視線を逸らし皆それぞれの持ち場に去って行った。

今現在、昨日見た遺跡で預言書の探索を進めるシュヴァイツ城直属騎士団の第一隊と第二隊。建物の中は崩壊があるかもしれないので、あまり入っちゃいけないって言われてるけど……やっぱりちゃんと探さなきゃダメだよな！

そう思っただけ自然の棲み家と化しつつある遺跡に踏み込んだものの、建物の中にも結構虫がいて、冒頭に戻ると言うわけだ。

ただ一人女性団員である私の「ムシこわいムシきらい」という気持ちをはわかってくれる人はほとんど——というか全然いない。

「なんだよ、単なる虫か」

ジェラルドがミノムシを手でとってほれ、と私に突き出してくる。それを見て背中にぞわぞわっと鳥肌が立つのがわかった。

「どっかやって！ こっちに向けないので！」

「こらジェラルド、あんまりちょっかい出しちゃダメだよ」

「へいへい」

ディアの言葉につまらなそうにジェラルドがミノムシをポイ捨て。一応手袋みたいなのはしてるけど……頼むからその手で肩とかを絶対に叩かないで欲しい。

「じゃあハル、何かあったらまた呼んでね」

「うん、ありがとう」

立ち去った二人に、私は盛大に溜息を零した。

崩れ落ちた天井の瓦礫を漁ってはみるものの預言書らしきものは一片たりとも見当たらない。この辺りにある建物はもとと一般人が使っていた家が多いらしいけど、家具っぽいものも無いし相当時間が経っているのがわかる。

この遺跡の奥の方には神殿もあるという話も聞いているけど、今日はこの街のほうの探索をある程度済ましてしまおうらしい。

——そういえば最近エルガーに会ってないな。

ふと鬼畜団長を思い出しつつ瓦礫をひっくりかえすと小さい虫が

わらわらと溢れだしてきた。

「う……気持ち悪っ……」

室内はじめじめしてるけどそれなりに日差しはあるのに、湧き出る虫はどんどん増えるばかり。手袋配給されてて本当によかった。

「お腹減った」

日が昇ってすぐに宿を出発し、作業を始めてかれこれ三時間。預言書の探索っていうよりむしろ瓦礫の撤去？ 外套も暑くて着てられないから畳んで剣と一緒に置いてある。

額に浮かんだ汗を拭って伸びをすると背骨が凄まじい音をたてた。

「和菓子が食べたい……」

重くなった肩をぐるぐる回しながらそう呟き、手袋を外して腰に巻いてあるポーチからもつちりパンを取り出す。ルーが持たせてくれたおかげでおやつには不自由していないけど——やっぱり日本のお茶菓子も恋しくなってくるこの頃。

「預言書も全然見つからないし——おまけに一人が探す面積多いし」

最近憂鬱だし。

そろそろ次の建物に移ろうと、置いてある剣を腰に掛けなおして外套を着る。建物から出ると強い日差しが肌を焼いた。

——今日だけで相当日焼けしたんだろうな……。

今度は目の前にある背の高い塔——多分時計塔だろう。これは探索するのに骨の折れる建物だ。

外側の壁にも草が生えていて古ぼけたレンガ造りの時計塔は大体四階建てくらいの高さ。正面のドアはぶち抜かれていて、留め金の金属すら残っていない。

「ハル！」

その時、ディアの声に呼ばれて私は振り返った。

「そろそろお昼御飯だつてよー！」

そう言ってこちらに手を振って来るディアに、うーんと唸り時計塔を指差して叫び返す。

「ここ軽く見てから行く！ 先食べてて！」

今日はお弁当らしいし、一人くらい席を外れていても大丈夫だろう。ディアも了承してくれたようで頷いて姿を消した。

「はぁ……」

重い息を吐きだし、時計塔に踏み込むと足元の雑草がカサリと音をたてる。

時計塔の中は珍しく天井も崩れていなかった。薄暗いそこには壁から生えた石の階段が上の方まで続き、中央の床が抜け落ちて黒く影を落としている。

一人で来るにはちょっと——っていかかなり不気味っ！

ジェラルドの「地下通路に亡霊云々」の話が蘇るが、ぶんぶん頭を振ってなんとか気持ちを直す。階段に足をかけて上っていると、時々レンガの隙間から光が覗いた。

足が重い。

薄暗い時計塔の中、募るのはマイナスな感情だけ。

——最近憂鬱。

それが一体なんのせいなのか、もうよくわかっていた。

いつまでも前に進めない。日本に帰る手段も見つからない。何のためにここにいいのか、本当にわからなくて。

とてつもない不安があるからだ。

だから苛々する。いつまでも変わらない現状と、何も掴めない自分に。

エルガーとディアがいる。ルーっていう友達もできた。ジェラルドだってなんだかんだ励ましてくれるし、きっと恵まれた環境なのに。

その場に似合わず、私は唇を噛みしめた。

「——クソ」

めっちゃネガティブ……！

こんなところで悩んだってどうにもならない。あのテラスでそう叫んだはずだ。生きてるんだから、今はとにかく突っ走らなきゃって。

わかってる。そんなの、ずっと前からわかってるのに。

「……なんでここに來たんだろう」

やるべきことの姿が見えない。今『突っ走る』べき方向がわからない。情けない話だ。

騎士団に入って見ず知らずの人たちを守っていく——それで本当にいいのかな。

気がつけば、時計塔の一番上まであと少しだった。階段からちょっと足を踏み外せば闇に真っ逆さまでけど、想像しないようにまた一段上る。

重い剣をぶら下げての階段コースはきつかったけれど、一番上にある鐘を見たら疲れもなにも全部吹っ飛んだ。

周りに柵もない場所であそこ無音のまま過ぐす錆びた巨大な鐘は、確かにここに人がいたんだと確信させるものだった。

鐘からは太い縄が伸びて、これを引っ張れば澄んだ音がでるんだろっな、とか。

そんなことばかり考えていて、預言書のことなんてすっかり忘れていた。

外を見ると、高い建物はこの時計塔くらいで三百六十度の大パノ
ラマが広がっている。

古びたこの街は、とても綺麗だ。

オプシヨン高所恐怖症の私が恐いなんて感情も忘れてしまうほど
の圧巻で、なんだか自分の悩み事なんてちっちゃいことなんだなっ
て思わせてくれているみたい。

そうだ。

今はわからない。答えが見つからない。
でも、一人じゃなくなつた。

進むべき道が見えない。

だったらこれから見える。

不安でいっぱいだ。

だったら未来は希望で溢れてる。

今が最悪で憂鬱なら、後ろに下がる道はない。

道は前にしか続いてない。

「――頑張るよ、ヨーコ」

見ててね、私の大事な親友。
日本に帰るには少し時間がかかりそうだけど。

零れ落ちそうになった涙を、顔を上げて堪えた。

鳥の声がした。

遺跡の中央広場。

「ハル、遅いなあ」

「そう言っなってディア。あいつはあいつで考えることもあるんだろ」

不安げな声を上げるディアの肩をジェラルドがぼんと叩いた。

第一隊と第二隊は各々昼食をとるようにしたのだが、ハルだけは一人時計塔の探索を続行している。心配だな、と眉を下げながらディアがまた一口パンを頬張った。

「異世界から来てたった一人なんて、不安だらうなあ……」
「いいからさっさと食え」

エルガーは相変わらずニコリともせず冷たく言い放つ。その様子にジェラルドは苦笑いしたまま肩を竦めた。

「けど、本当なのかよ？ ハルが異世界から召喚されたっていうのは」

「事実だ。エルナイト卿に頼んであいつの記憶も見たが……確かにこの世界のものではなかった」

淡々と言葉を並べたてるエルガーを前に、二人もたじたじだった。なんだか普段より殺気が増しているような――と目配せし合う。どうやら気のせいではないらしい。

「……遅い。少し様子を見てくる」

「ちょ、エルガー！ 僕も一緒に行」

「いつてらっしゃーい」

立ち上がったエルガーに手を伸ばそうとしたディアを後ろから押さえつけ、ジェラルドは冷や汗をかきつつ騎士団団長を見送った。

「ジェラルド、なんで止めたんだ！ ハルに今のエルガーなんて任せたら八つ裂きにされちゃうだろ！」

「ハルは八つ裂きになんてならないだろ。とにかく俺らは大人しくしてるんだ。なんで苛ついてるかわからねーけど、下手したらこっちが八つ裂きだぞ」

「……確かに……」

歩いていく魔王の背中を見ながら二人は頷き合った。

「ごめん、ハル！」

心の中の声は、驚くほどぴったり一致していた。

「ん？」

そろそろお昼ご飯を食べに行こうと時計塔の階段を下りているとき、妙な違和感が一つ。

階段が一段分、消えていた。

——さっきはちゃんと全部あったのに。

嫌な予感を感じつつそこを飛び越え足早に下へと下りていく。その時にパラパラと砂が落ちるのはご愛敬。

なんとか無事にドアの前まで戻ってこれたものの、気になるのはやっぱり階段。

実は上にいく階段以外にも、もう一つ下へ続く階段が存在していた。

闇に包まれ奥が見通せないその先はなんだか想像するだけでぞつとする。

「……あー」

小さく奥に向かって声を出すと、声が反響してますます不気味なこと。

どっちにしる後々探索しなきゃいけないんだし——今のうちにぱぱっと終わらせちゃおうかな。

嫌いなものは最初に食べる派の私、恐る恐るドアに背を向けて階段に一歩足を下ろす。

下からもわわっと上がって来る冷気に背筋が冷えて——なん

だか嫌な予感。

しかしその階段をゆっくり進んでいてすぐ「あれ？」と私は素っ頓狂な声を出してしまった。

階段が途中で途切れていたからだ。

「なんだ……別に何もなかったんだ」

ジェラルドの亡霊云々話を信じたわけではないけれど、不気味さを感じるのは事実だし何しろこんな暗闇の中に一人でいるんなら恐くもなるって。

——階段無くなっちゃってるし……これは不可抗力だね。まさか下に落ちてまで探索しろなんて鬼畜なこと言わないだろうし。

口を開けている間に鳥肌をたて剣を握る手に力を込める。なんだから何が飛び出してきそうでついつい武器触れちゃうけど——か
よわい乙女には鋼の剣くらい強力な味方がついてないよね！

じゃあそろそろ戻ってみんなと合流しようかな、とドアに向かう
一段目に足をかけたとき。

パラパラ。

肩に細かい砂が降ってきて、嫌な汗がつつうと背中を流れた。

「……そんなまさか、ね」

はは、と薄っぺらく笑いながら上を見上げると遥か上まで続く階

段が見える。そのうちの 하나가、なんだかこちらに近づいてきているような気が――

――気がつていうか、近づいてきてない？

硬くて重い石で出来た階段のまるまる一段が、しまいにはぐるぐる回転しながらこっちに向かって落ちてくる。

ぼんやりその光景を眺めていた私は、それが間近に迫ってようやく悲鳴を上げながら後ずさった。

「ぎゃあああああ――っ！」

とても女子が上げる悲鳴じゃなかったけど。

だけど後ずさるっていうのはここでは最もしてはいけない行為なわけで。

ドギャン！ と目の前に落ちた石段が割れると同時に、私の足は階段の終わりから踏み外していた。

「ひっ――」

傾いた体重はどうしようもない。後ろに向かって身投げ状態の私の頭の中を勢いよく記憶が駆け巡っていく。

――落ちる

体全体を襲う浮遊感。終いには『死』の文字がありありと浮かんで十七年間の人生とオサラバしそうになった脳みそを、

「ハルッ！」

鋭い声が揺さぶった。

ついで、がしっ！ と腕を掴む力。

「ひひひひひひひひ——っ！」

「言ってる場合か馬鹿！ 自分で上がる努力をしろ！」

危機一髪、宙ぶらりん状態の私の腕をかるうじて掴んでくれるのはディアでもジェラルドでもなくて——まさかのエルガー。

「え、え、エルガー、助けてくれてあり」

「いいからちゃんと手を掴め！ 状況を考える男顔っ！」

「男顔男顔うるさい！ 言っとくけど生れつきだから！」

階段から身を乗り出して私の腕を掴んでくれるけど——女でも165センチの身長ってそれなりの体重がある。下手したらこのまま一緒に落ちちゃうなんてことも……

「いやあああ！ 死にたくないいい！ せめて、せめて死ぬ前に日本茶を——！」

「騒がしい！」

手袋同士だし、外套も滑りやすいし私の体は重力に引っ張られてずるずる下に落ちていく。エルガーだって頑張ってくれてるけど、この態勢には無理があるだろうし。

足元に広がる黒に思わず涙目。

「泣きそうです、団長」

落ちたら痛いんだろうなあ、この下どこまで続いてるかわからないけど。

「諦めんな馬鹿」

そう言って私を持ち上げようとしているエルガーの真横の壁に――ピシッとひび割れが一本入った。

その次に二、三段上の石段にも線が刻まれる。

「エルガー、やばいかも」

「そう思っただったらさっさと上げれ」

パラパラと砂が舞うのがしつかり見えた。長年両目Aを誇ったこの瞳、嫌なところで役立ってしまったものだ。

「私のこと捨てていいよ」

逆光でエルガーの顔が完全に見えるわけじゃないけど、その言葉に彼の金色の目が見開かれるのがわかった。

誰かに迷惑かけて死ぬなんてまっぴらだ。

それなら一人で未練なく死なせてくれ。

「まだまだ生きたいけど、誰かを道連れにするくらいならあっさり捨ててもらった方がまだマシだし」

「お前の遺志を汲む気はない」

ぎゅ、と腕を掴む力が強くなる。多分痣になるんじゃないかな、これ。

エルガーの返答に私は苛ついて思わず逆ギレしてしまった。

「まあ、いいからさっさと行けてこの魔王っ！ 部下が上司の命守るのは普通のことでしょーがっ！ 未練なく成仏したいの私は！」

「他人の命捨てて自分だけむざむざ生き残れるかっ！」

腹まで響く低音ボイスに、思わず茫然としたその時。

パキン、とガラスの割れるような音がしたかと思うと私達を支えていた階段が崩れ落ちた。

走馬灯が走った。

03 探索開始！（後書き）

THANK YOU 3万HIT！

3万HITありがとうございます。

正直ここまで来れたのはたくさんの方々が読んでくれたからです。
これからもがんばっていきますので、どうぞアルカナの行方をよろ
しくお願いします！

04 地下通路

「つつ……いたたたた」

暗がりの中、私は瞼を上げた。

階段から真つ逆さま、下に落ちたものの高さはそれほどなかった。予想では地下六階分くらいまで凹んでいるんだと思っていたけれど、実際は目測二階と半分くらいのところから落ちたらしい。それでもこつして意識があること自体幸運なんだろうけど。

なにより横向きに落ちた分まだ良かったのかもしれない。体の右側はしばらく痺れて動かなかったけど今はもう直ったみたいだし。

「エルガー？ どこー？」

暗くて周りがよく見えないから恐る恐る声を出すしかないけど……

「太った」

真下から聞こえた声に私は驚いて勢いよく飛びのいた。

「ぎゃああ——っ!？」

「なんだその悲鳴は」

「びつくりするでしょうが！　っていつかなんで下にいるわけ!？」

闇の中で黒い影がむくりと体を起こすのが認識できた。真昼間だ

って言うのに薄暗いこの空間では夜目が効くのは遅いけど。

「お前が下だったら圧死してただろうな」

「まさかとは思うけど……団長空中で体の位置逆にするとかそういうサーカスみたいなこと……」

「後々ディアに小言喰らうのも面倒だから仕方無く」

—— やったんですか！

あんたは完璧人間か！ そりゃあ騎士団の団長なんて運動神経良くなきゃできないんだろうけど、さすがにサーカス団入れちゃうよ！

間髪入れず団長がマッチを取り出して火をつける。辺りがちよつと明るくなったので立ち上がって周囲を見回してみるけど……とても上によじのぼれそうなでっぱりとかは無さそうだ。

「うーん……どうしよっか」

「どうするもこうするも、ディア達が救助に来るまで待つしかない」

もっともなご意見に、私は唇を尖らせた。

だってこんなところで待ちっぱなしとかお腹すいちゃうし暇だし。

エルガーはいつの間にか近くに落ちていた太い木の枝に布を巻きつけて火を移してたりして、彼がいるところだけばうっと明るくなっている。私も明り欲しいな。

「時計塔の地下ってことはどこかに通路があるのかな」

「そうかもな」

大した反応も無く、お互いに無言になる。

——は、話しづれえ！

エルガーと二人っきりで話した素直な感想はこれだ。

考えれば最初に投げ飛ばされて以来、二人で話す機会なんて無かったわけだし。ディアとかジェラルドが会話を繋いでくれていたからこそそのコミュニケーションだったんだね。ありがとう、二人とも！

そんな風に普通に話しやすい二人に感謝していた時、ぐいっといきなり前から誰かに肩を押された。

「！？」

誰、とは言ってもここにはエルガーと私の二人しかない。

だけど、あれ？

「ちょ、まっ——うわっ！」

あまりの力に私は後ろに向かって尻もちをついてしまった。肩を掴んだ腕の力は強くて外套の上からなのに肌に完全に食い込んでいる。

「エルガーッ！？」

何を血迷った！

明りはまだ向こうにあるのに、自家製松明放り投げてまで私をねじ伏せるって一体どういうこと！？

「どうした!？」

けど……あれ？

エルガーの声は確かに光の方からして——じゃあ私の肩を掴んでるのは一体ダレデスカ？

ぼうつと、松明の明りで照らされた相手の正体に私は息を呑んだ。真っ白くて細い躯体に、顔にぽっかりと開いた無数の穴。

骸骨だった。

「キヤ——ッ!？」

なにこれなにこれなにこれ!

ナニコレ!

ガイコツが私を押し倒してるってどういう状態!? しかも肩を押さえつけている方と反対の手は高々と振り上げられそこには鋭いナイフが握られている。

そのナイフが私に向かって振り下ろされそうになった瞬間、真横からの衝撃にガイコツが吹っ飛んだ。

半泣きでそこを見ると——どうやら鬼の団長がガイコツを蹴り飛ばしてくれたらしく足を上げた状態で小さく舌打ちする。

「さっさと起きろ!」

「は、はい!」

素早く体を起こすと同時、エルガーが剣を抜いた。

どこからともなく何体ものガイコツたちがいつの間にか私達二人を囲んでいて、仕方なく私も剣を抜く。おぞましい光景に手が震えるがなんとかそれを構え準備は完了。

「え、エルガー……これって」

「おそらく古い魔術だろうな。誰がやったのかはわからないが——
——少なくともこいつらに話を通じるとは思えないし、適度に倒しておくのが得策だ」

「て、適度に……？」

手に武器を持ったガイコツたちはぼろ布をまとって裸足で少しづつこちらに距離を詰めてくる。そのたびに骨と骨がぶつかってカタカタと不気味な音をたてた。

「……気持ち悪い」

一般的女子高生から言わせてもらうと、これほど気持ち悪い光景ってないと思う。どこかのネズミの国（海の方）のインディーなんちゃらじゃないけど……生でガイコツ動いてるって想像以上に怖い。

と、目の前の一体が手に持っている錆びた剣を振り上げた。

「行けっ！」

「ぎゃあ！」

背中に目でもついているの！？

背後からエルガーにどつかれて、私はガイコツの群れに突っ込む

形になってしまった。しかもその時目の前のガイコツの頭に私の剣がぐさつ！と勢いよく突き刺さって。

「いっやあああああああつ！」

当たり前だけど半狂乱。

「いちいち騒がずとにかく倒せ！」

「わああああ！」

慌てて剣を抜くと頭の部分にひびが入って割れ、頭の無い理科室の人体模型に――

やば、気絶しそう。

頭が無くなっても骨なら関係ないのか、目の前に剣が振り下ろされる。間一髪避けたからいいものの、錆びた刃に当たっていたら怪我じゃ済まないかもしれない。

――気合だ七瀬ハルツ！　今まで何年剣道をやってきたと思ってるんだ！

冷静に、けど素早く相手をぶちのめせ！

そう思うと、腕が勝手に上段の構えを取ってがら空きになった頭からガイコツを真つ二つにした。背骨を割る感覚に、思わず鳥肌。

人間の骨って脆い！

でもこれで一体は戦闘不能になった。エルガーの方からも金属と金属がぶつかりあう音がする。まさかとは思うけど松明片手にやつ

てるのかあの人はっ!?

ばきいっ! とまるで木か何かを斬っているような感覚と飛び散る破片に毎度のこと「ひいい」とか「いやああ」とか悲鳴を上げてしまう。――ごめん、ごめんねガイコツさん! 上司の命令ですから一応!

飛んだり跳ねたり走ったりの繰り返しで、ようやくほとんどのガイコツを粉砕することに成功した時にはすっかり息は上がっていた。

「団長さん、吐いていいですか……」

「吐くなら向こうでやれ」

冷たい態度のエルガーを尻目に、私は壁に手をついた。

――よかった、お昼ごはんすっ飛ばしてたから胃の中カラッポだ。

見知らぬ土地で吐くという女子からぬ行為は避けられたけど……
やっぱりお腹減ったなあ。

「おい、さっさと吐いたらこっちに来い」

「吐かんわ!」

剣を仕舞って言われた通り松明を持つてるエルガーの近くまで行く、壁にある異変に私は首を傾げる。

「穴?」

ぽっかりと人が通れそうなくらいの穴が、古びた壁に空いていた。サイズは大体ドアくらいなものだろうか。さっきのガイコツはもし

かしたらここから出てきたのかもしれない。

私の前髪が風で揺れた。

「どこかに繋がってるのかな」

風が通るっていうのは、どこかに繋がっていることを表している。小学生くらいの時に身に付けた知識だけど……エルガーの方を見るといつも以上に難しそうな顔で穴を凝視している。

一体どこまで続くのか、松明の明りも奥までは灯しきれない穴は人為的なものとわかる。無機質な風音が耳を掠めると鳥肌がたった。

「地下通路か」

「地下通路ってあの噂の？」

「ああ」

ジェラルドから聞いた噂？亡霊が出る、という話はさっきのガイコツのことだったとして、もしかしたら地下通路の話も本当なのかもしれない。

「行くぞ」

「ええ！？ 行くの！？ またガイコツ出てくるかもしれないよ！？」

トラウマが一つ増えました！

ってそんなことは問題じゃなくて、この穴に対して妙に乗り気な団長をどうにかせねば！

「それにほら……ディアたちが来るのも待つてなきゃいけないしさ！」

自分、ナイスアイデア！

この言葉を言えばエルガーも折れてくれるはず、と揚々に答えを待った私だが。

「それなら心配ない」

彼は手袋を取って松明と一緒に私に預けると、両手でおにぎりでも握るみたいに空気を集めた。

ん？

なんか黄色い玉みたいなものがエルガーの手の中央で浮いている。

——なにそれ？

彼が小さく呪文を呟くと、その玉はフワリと空中へ飛び出して上の方へ飛んで行った。

一瞬の出来事に、私は玉が消えた方に首を向けたまま硬直。

「これでディアにも伝言が行く」

「今の！？ 今の伝言！？」

「単なる魔術だ。行くぞ」

それにしてもあんなひょひょいのひょーいつて！
ウォーターフォードってすごいな。色々。

「けどさエルガー、建物には崩壊の恐れが……」

「後ろを見ても」

そう言われて振り返ると、散らばった亡骸たち。

その中のいくつかがカタカタと動いて一つの体を作ろうと集まりつつある。

「うつ……はやく行こう」

「賢明な判断だ」

出来る限り背中を見せたくないな、この状況！

「松明はお前が持つてろ」

「うんわかった」

手袋を返して、前を歩き始めたエルガーに私も急いでついていく。

後ろからカラカラと乾いた音がした。

がっしり。

この効果音、無論私の手がエルガーの外套の裾を掴んでいることを示している。

「……おい」

「なんですか」

「その手が邪魔だ」

「しょうがないでしょ——っ！」

いつまで経っても変わらない、延々と続く細い地下通路に私の恐怖パラメーターは絶頂を迎えている。

生ガイコツを見てしまったせいかな周囲の様子がやたら気になるし、誰かの服でもなんでもいいから掴んでないとどうにかなりそう！

「あのねエルガー、先に言っておく。私ほんっとういづの苦手。まじやばい。吐きそう」

「だから吐くなら向こうで」

「吐かないってば例えに決まってんじゃん！ もう向こう行けみたいなこと言うのやめて！ 死んじゃう！」

終始涙目の私にエルガーは呆れたように嘆息。

周りは真っ暗。しかも二人きり。少女マンガなら「あらまあ素敵な展開に期待できそう」が、ホラーに変わっちゃいそうなくらい不気味で。

松明が手の中にあるおかげでちよっとは安心できるけど——背後が気になって仕方ない。

「場所交換しない？」

「いざという時に殺されるのはお前だぞ？」

「……エンリヨシマス……」

脅し文句に近い言葉に冷や汗をかきつつまた後ろを振り返る。今のところ何かがついてきてるとかそういう感じはしないけれど……。

そっだ、と私はエルガーの方を振り返った。

「エルガー、さっきはありがとう」

「は？」

「階段から落ちそうになった時、助けてくれたでしょ。馬鹿馬鹿言っ
てても、なんだかんだ見捨てなかったし」

そう言うエルガーの眉間からシワがすつと消えた。
きよとん、とでも言うのだろうか。ビックリすぎて何も言えな
いみたいな顔で私の顔を見てくる。

——…シワ外れた！

ちなみにその間私は小さく感動していた。

眉間シワ大魔王のエルガーからシワ取ったらやっぱり想像してい
た通り、顔立ちのよく整った美青年になる。

「な、なんでそんなに驚いてるの？」

「……別に」

ふい、と視線を外した団長相手に私は一人考え込む。

——まさかとは思うけど……これは照れフラグか？

前にあったようにエルガーなりの照れ方をしているのかもしれな
い。

にっこり笑った私は言葉を繋いだ。

「最初にエルガーの部屋に落ちた時も、不審者扱いだったけど私を
殺そうとかそういう感じなかったしさ」

「……」

「正直、落ちたのがあそこでよかったと思ってる」

「……」

「騎士団に配属されて色々あったけど、そのおかげで何とか自分の居場所も見つかりそうだし。エルガーにもディアにも、感謝してるんだよ？」

「……」

あれ、おかしいな。

さっきと違ってかわって、彼の眉間にどんどんシワが寄っていく。

まさか胡散臭かった！？

「ねえエル——」

松明を持ってエルガーの横に並ぼうとした時、何故か彼の肘が顔面に衝突してきて「がっ！？」と声を上げてしまった。

「ちょ、ちょっと、急に止まらないでよ！ 一体な——」

ひょっこりと顔を覗かせて前に続く道を見て私は言葉を呑みこんだ。

地下通路は二つに分岐して、いかにも「どちらかが危ないですよ」な雰囲気。

女の勘が危険を告げていた。

05 腹が減って戦ができん

時計塔で、誤って階段から落ちてしまったエルガーと私。

ガイコツ相手にウォーターフォードでの初戦を繰り広げなんとかその場をかくぐつたはいいものの、噂の地下通路を発見しなやかんやでその中に進むことが決定。

おどろおどろしい雰囲気の通路を歩くこと数十分、事態は膠着状態に。

二手に分かれた道を見て「うーん」と訝しげな声を上げる私。

この場合どつちかが地獄のような道で、どつちかが楽々預言書に辿りつけるような道……なんてこともあるかも？

松明の火が風で煽られて左に傾いた。

「風が通っているのは左か」

「そつみただけど……」

分かれ道に気付いて一分くらい。そろそろどちらかに進まなきゃ背後からガイコツが追って来るかもしれない。

「左に行く」

「左？」

「出口がある可能性が高い」

まあ預言書があっても出れなかったら意味無いもんね。

左に進むと、また真つすぐな道が続いている。

いい加減飽き飽きしてきた景色に私は深く嘆息した。

「お腹へつたなあ……」

同時にぎゅるると腹が鳴り、「うつ」とエルガーの方を窺った。
当たり前だけど彼は相変わらずの無表情。

「……腹が減っては戦はできん」

「なんか食え」

「雑草の根っことか？」

「うまいのか」

「雑草なんておいしいわけないでしょうが！　いい加減突っ込んでよ！」

仮にも華の女子高生が地下通路の天井からひよろひよろ生えてる雑草なんて食べるわけないでしょ！

と言いつつ、低い天井を見上げて根強く地下まで伸びてきている根を見る。何十メートルも頑張ってるのねあんたたち。ちょっとは美味しいかしら？

いやムリだ！

小さい頃に花の蜜を吸う程度ならやったことあるけど雑草の、しかも根っこなんて食べれるわけないじゃん。

「はあ、お城のもっちりパンが恋しい……」

視線を戻し自分で言った言葉にん？と首を傾げる。

「あああああ——っ！ 忘れてた！」

「何をだ」

「ルーからいつぱい持たせてもらってたんだ！ もちもちパン！」

エルガーに松明を押し付けウエストポーチを開けると、落ちた衝撃で少し潰れたもっちりパンが二つ。一日に四つの計算で三日分持たせてもらったから宿にもまだ残りが余ってるし今食べても平気だろう。

「ねえ食べていい！？ 食べていいよね！？」

「好きにしろ」

うんざりした様子のエルガーが低い声でそう返してくる。

「やった！ いただきまーす！」

一個一個薄いガーゼみたいな布で包まれたパンの一つを取り、口に入れた私は思わずほろりと涙を流しそうになった。

—— お、おいしい……！

ミルク風味のパンは、ロールパンと形が似ている。とは言ってもロールパンより大きさが大きくて何より中がもちもち。日本産の

もち米でも使ってるんじゃないかってくらい！ バターとかジャムとかサブの役割たちがいたらもっとおいしいんだろうけどこのままでも十分いける！

と、前方を歩いていたエルガーが急に足を止めて振り返った。

「む？」

パンを口に詰め込んだ私は首を傾げる。

エルガーは私の後方——今まで歩いてきた地下通路を凝視している。もぐもぐパンを噛みながらながら私もそちらを見るけれど、真っ暗で何も見えない。

——どうかしたのかな。

ようやくパンを飲み込んで口を開いた瞬間、エルガーが手で私の口を押さえた。

どちらかと言うと叩くみたいな表現のほぅが正しいかもしれない。ごっ！ みたいな感じだし。

「うぐっ！？」

「静かに」

どうでもいいけど息できん息！

静かに、と言われ全身の動きを止めて耳を澄ますと何か変な音が聞こえる。

かちゃかちゃと何かがぶつかり合うような音。それがたくさんこ

ちらに近づいてきているような気がした。

「行くぞ」

エルガーの言葉に、暗闇に背を向けて歩きだす。
なんだか妙に背筋が冷えるのですが。

まさかとは思うけど――

「ガイコツ復活……？」

「二度も戦うのが嫌ならさっさと歩け」

パンを食べたのは失敗だった！

出来る限り早く歩くけど、背後から近づいてくる足音はどんどん近くなっている。こちらは火を持っているから明るさですぐ居場所がわかるんだろうけど、こちらから見れば暗闇から聞こえるガイコツの足音……ホラー過ぎっ！

しまいにはざりざりざり！ と剣を引きずるような音まで聞こえてきた。

「い、いやだああ……」

後ろ振り返れないっ！

ついに小走りになった私の横で、エルガーが腰から剣を抜いた。
松明を私に押しつけ

「合図をしたら伏せろ」

いつも以上に低い声音でそう言うてくる。

—— いやいや合図って！ 合図って何！？ そこかなり重要だから！

「3、2」

カウントダウンかい！ と私は内心突っ込んだ。

「1」

しかし突っ込んで間もなく、松明を持ったまま私は勢いよくその場にしゃがみこんだ。何をするのかわからないけど、鬼畜団長の言うことだからしゃがまなきゃ死んじゃう気がする！

ごっ！ とその時に膝に鼻をぶつけた。

同時に風を斬る音がして、頭上を太い剣が通り過ぎ背後にいた二人分のガイコツに直撃！

「ぎゃああああっ！？」

「いいからそこを退いてろ！」

あまりに近場で繰り出された一撃に、しゃがんでいた私はクラウチングスタート状態。いつきに膝を伸ばしてその場から離れた。

「近っ！」

真後ろにガイコツがいたもんだからついびっくりしたけれど、エ

ルガーは動じずに攻撃を繰り返して前の方にいるものから倒していく。

騎士団団長だから当たり前かもしれないけど、全体の動きに無駄が一切無い。剣筋も滑るようになめらかだし、油断も隙も無い。一撃で骸骨の頭蓋を叩き割ってしまうようだから相当重い斬撃なんだろう。

「エルガー、大丈夫!？」

「お前はそっちで待機だ! 起き上がって来る奴を碎いておけっ!」

頷いた私は松明をどうにかしようとして、地下通路を形作る頭ほどの大きさの石と石の間に斜めに木の枝を突き刺す。

「あ、あれ?」

なかなか入らないな……。

そうしている間にも倒れているガイコツたちは修復を始めつつあり、骨が一つの体を作ろうと一カ所に寄せ集まっていくな。

——や、やばいやばいつ!

急いで別の隙間につっ込んだりしてみろけど——やっぱりダメだ。松明片手に戦うなんて芸当私には到底無理だし、どうしてもどこかに置いておかなきゃいけないのに!

とうとう一体目のガイコツが立ち上がった。

「げっ……!」

こっちを向いている虚空の穴が恐い。さっきまで近くにいたエルガーも暗闇の中までずんずん進んで行ってしまった。

一人で骨相手に戦うなんて無理無理無理っ！

「こっちこないでええええ——っ！」

涙目の中そう叫ぶと、ぐいっと松明が石の間に食い込んだ。

——やった！

そう思っ て手を離れた瞬間、指先すれすれを鋭い何かが通過。

「ひっ」

ガイコツが私の隙を見て頭をかち割ろうとしたらしい。剣を地面に食い込ませてこちらを見てくる。

その距離わずか一メートル。

——どっひゃああああああ！？

そんな心の中の悲鳴は口からダダ漏れだった。

「どっひゃああああっ！？」

剣を抜く間もなく勢いよく拳で骸骨の頭をぶん殴ってしまう。
がしゃん、と背後に倒れ頭蓋骨も粉碎してしまった一体目を私は「うわああああ！」と叫びながら夢中で蹴って向こうへやった。

しかしその間にも周囲からじりじりと詰め寄って来る他のガイコツもいるわけで。

「いやだいやだいやだあっ！ ヨーコ！ ヨーコヘルプミィ！」

懐かしき友人の名前を叫びつつ振り下ろされる剣やら鎌やらを避ける。迫って来るガイコツ相手によろよると後退し剣に手をかけて抜こうとした。

その時。

ごすつ、という音がしていきなり右の足元が沈んだ。

「っ！？」

とつさに足を見ると、踏んでいるところの石が他より一段沈みこんでいて——嫌な予感パラメーターは急上昇。

「エッ……」

エルガーッ！

心の中でそう叫ぶと同時に私の立っていた床がバカン、と下に向かって開いた（・・・）。

——仕掛けとび……っ！

頭の中でぐるぐるとある映像が回転する。誰かが床にある石を踏んで、それで作用した仕掛け扉が開いて石を踏んだ人間が下に落ちる——戦国時代の城じゃあるまいし！

しかし現実はどうも言っていられず、私は闇に急降下！

「ぎゃあああああああ——！」

今日叫んではっかりだ——！

口を開けた扉が上の方で閉まるのが見え、そして真っすぐ落ちて間もなく背中に硬い何かがぶつかった。

「うえっ！」

どうやらどこかに着地したようだが、着地点は仕掛け床から二メートルほどだ。なにこれ全然仕掛けないじゃん——。

侮った私が馬鹿だった。

ごろ、っと左に転がったことで今の状況をやっと掴める。

こっ、斜面だ。

「iiiiiiiiiiii——！？」

仰向けから真横に転がる。しかも真っ暗で何も見えない闇こえない。松明は上に置いてきてしまったし私にはもっちりパンと剣しかないのに！

転がるたびに剣が床とぶつかって高い音をたて、なんとか体をよじっているうちに最終的に滑り台を滑るような形になってしまった。小さい頃土手で段ボールを使って滑り降りる子いるけど……正直あ

んな斜面なんてもんじゃない。

—— やばい！ 死亡フラグが！ 死亡フラグが立ってるよ完全にこれは！

しゃー！ と滑っているうちにもバランスを取るように私は腕と足を肩幅に広げている。けれど今から何が起こるかわからない、どこまで滑っているのかわからないという恐怖に自然と歯が震えた。

エルガー、ディア、ジェラルド、ルー、エルナイトさん、ヨーコ、父さん母さん兄貴誰でもいいからとにかく助けて！

ぐいつ、と急な斜面が突然上に向かって角度を変えた。しかし勢いは止まらない。

そしてついにその時はやってくる。

—— ぎょえええええ！

斜面は終わりを告げ、目の前で地面が途切れた。

私の体が空中に軽々と投げ出された瞬間だった。

05 腹が減って戦ができん（後書き）

お気に入り件数が100件を超えました。

もつと精進しなければいけないところもたくさんありますが、こうしてたくさんの方々に気に入ってもらえていると思うとすごく励みになります。

よんでくださっている皆様、ありがとうございます！

これからも頑張りますので、何卒よろしくおねがいします！

06 預言書

「いぎゃああああ——っ!？」

地下通路の滑り台（仮）から勢い余ってすっ飛んだ私。

高く宙に舞った視界には、周囲の景色なんて全然と言っていいほど見えない。なんたって地下だから周りは真っ暗闇。

その中を、ぐるんぐるん回転しながら体が下に向かって落ちていく。頭と指先に遠心力で血が集まる感じがして心の中でも「ひゃあああ」と悲鳴が上がった。

「死ぬ死ぬ死んじゃう——っ!」

誰に向かってでもなくそう叫んだ途中、嫌な予感が背筋を突きぬけた。

やばい、くるっ!

その瞬間、ゴッ! というけたたましい音と共に額と鼻に衝撃が走った。

「がつ!？」

首と背骨がよじれる感触、でもって顔面超痛い。そのまま顔を使ってバウンドした私の体は仰向けに地面にたたきつけられていた。

——泣いてもいいよね、これ。

倒れたまま、体の痺れに耐える。

思えばウォーターフォードに来てから怪我が絶えない。最初はエルガーに投げ飛ばされ、騎士団の練習で腕を痛め、最終的にこうして空まで舞ってしまった。

テンションのただ下がりっぷりは明らかだ。

「つて、こんなことしてる場合じゃない……」

上ではエルガーが一人で骸骨相手に戦っているはずだ。とは言ってもあんな急な滑り台上れるわけないし、別々にここからの脱出を図る他ない。

エルガーのことだからガイコツ相手に負けたりしないだろうしね！

ここで立ち上がった私を誰か褒めてほしいものだ。騎士団の一員として探索という任務はしっかり遂行しなければ！

けれどやっぱり全体重を受け止めた顔は只事では済まず、体を起こした途端鼻からドロツとした何かが流れてきたけれど。

「うわ……鼻血かな……」

ティッシュも無いし仕方なく服の袖で顔を拭うけど、どんどん流れてくるこれは間違いなく鼻血。

「ううー……」

段々目の方も慣れてきたので首だけ動かして周りを見してみる。

ドーム型とでも言うのか、横は直径五十メートル縦は三十メートル

ルくらいの広さ。その壁からさつき私が飛び出したであろう滑り台が突き出ている。

広っ！

こんな変な空間作ってどうしようって言うんだろ。アリの巣かここは！

そのうち、正面にぽっかりと穴が空いているのをようやく発見した。

四角く切り取られたその穴は異常に小さく普通の女の人が四つん這いになってギリギリ通れるくらいだろうか。それが壁の下の方に一つだけ。

その他には出口も無い。

一歩踏み出すと、ザリ、と私一人だけの足音が響いた。

何の気配も感じない。

静かすぎて、ガイコツも誰も、動くものは何も無いんだと思えた。

穴の前まで行ってその中を覗き込むと、微かに向こう側が明るいのがわかる。穴の入口から出口までは五メートルといったところか。

鼻血を拭い、剣をベルトから外して手に持つと私は穴の中に入って全力で匍匐^{ほふく}前進。腹ばいだし剣を持ってるのでスピードは遅いけど、こんなに真剣にやったことないってくらいの勢いで進む。

——だって後ろから何か来たら怖いし！

ともかくそれでなんとか穴から出た私は、目の前の光景にびっくりしてしまった。

さっきのドームよりもっと広い、直径百メートルくらいの床に縦は最早上まで見えないくらいのだだっ広さ。

そしてその中央には石で造られた――譜面台？

譜面台を照らすのは宙に浮いた水色の球。ソフトボールくらいの大きさのそれらはざっと見た限りでも百はありそうだ。それがグルグルと譜面台上空を旋回中。

辺り一体が青い光で照らされていた。

「……なにこれ、魔法？」

水中にいるような鮮やかな水色に、私の口からはそんな言葉がポロリ。

――って、見とれてる場合じゃないっ！ 預言書をさっさと探してここから出なきゃ！

はっと我に帰るけど中央の譜面台が気になって仕方ない。好奇心には勝てず剣をベルトに戻しつつゆっくりそれに近づいていくと、青い球が「りーん」みたいな音を発しているのがわかった。

譜面台の上にはA4サイズくらいの紙が二枚だけ置かれている。それはわかったけれどその紙が何なのか、まったくの謎！

手に取って見てみると、古い羊皮紙のような分厚いものの上にたくさんくさんの文字が綴られている。ウォーターフォードの文字は私にはよくわからないからなんともいえないけど……。

りん。

「……」

りん、りん。

「……」

りんりんりんりんりん。

「うるさい……」

さっきから上にある青い球がりんりんうるさくて集中して羊皮紙を見れない。心なしかこいつら眩しくなってる気がする。

紙を持ったまま上を見ると青い球がさっきの二倍くらいのスピードで回り始めている。輝きも増して、なんだか一個一個が生きているみたいだ。

けど勿論魔法とは縁の無い和の国日本出身の私。

「こええ……」

感想はそれしかでてこなかった。

綺麗だけど球が宙で勝手にぐるぐる回っている光景ってやっぱり

異様！

早々にここを立ち去ろう——そう思って紙をポーチにしまおうとした時。

アルカナ

酷く儚げな声に私は顔を上げた。

この声、ウォーターフォードに来る時に聞いた声だ。

まだ声変わりに達していない少年みたいな声音。その声が誰かを——呼んでいる。

アルカナ

やっと会えた

「誰？」

周りには誰もいない。

けどその声はドームで反響して確かに私の耳まで届いている。

宙を舞う球はやがて中心に集まり、一つの大きな丸になった。

——まさかとは思っけど……この球が喋ってるとか冗談ないよね……

直径一メートルほどのそれはフワリと譜面台の上に降り立つとゆっくり形を変え始める。なんだかそれがどんどん人型のようになっていくのは目の錯覚だろうか？

十秒ほどで、それは小さな子供みたいなシルエットに大変身。やがてちゃんと色がつき始め、譜面台の上に立つ者が何者なのか私にもわかった。

「ヨーコ……？」

髪の色も瞳も鮮やかな水色だけど、顔立ちとショートカットはヨーコをそのまま幼くした感じ。服装はポンチョにズボンっていう変な格好だけど——ヨーコ以外の誰でもない。

「どうしてここに……」

「君の記憶にある人間の姿を借りたんだ。上手にできてるかな？」

光る自分の姿を見下ろして彼女がそう言う。ヨーコの姿をしてるけど声は相変わらず高い男の子から変わらない。

彼女はこちらに視線を向けるとにっこり微笑んだ。

「会いたかったよ、アルカナ」

——アルカナ？

何度も聞いた、けれど誰も意味を知らないその単語。

「僕の名前はオニキス。その預言書の番人さ」

彼女——オニキスが私の腕を指差しそう告げる。
勿論私の手には古い紙が二枚だけ。

「嘘っ！？ これ預言書だったの！？」

「まさか気付いてなかったの？ それは預言書の中でも特に大事なページなんだ」

オニキスはふふふとヨーコの顔で笑った。——う、やっぱり本人じゃないと不自然っ！ ヨーコはもうちょっと笑い方豪快だし！

「日本にいた時に私を呼んだのはオニキスだよね？」

「そつだよ。君にはどうしてもウォーターフォードに来てもらわなきゃいけなかったからね」

譜面台に腰掛けてオニキスはこちらに好奇心の混じった視線を向けてくる。一方私は苦笑いのまま表情が硬化。

——なんだかんだここに来ちゃったのってこいつが原因かい！

少々苛つときたものの、なんとか持ちこたえる。

「さつきからアルカナって呼んでるみたいだけど……私別にそんな変な名前じゃないよ？ ちゃんと七瀬ハルっていう命名があるんだから」

「アルカナは名前じゃない。救世主のことを表すものさ」
「救世主？」

日常会話ではあまり出てこない言葉に私はふと首を傾げた。
そんなライトノベルじゃあるまいし。異世界トリップで救世主とか笑っちゃうよ。

「黒髪に黒い瞳をもつ少年が、この世界を救うべき異世界からの救世主。またの名を『アルカナ』と言い、彼は必ずウォーターフォードに呼び寄せられる」

—— ちよい待ち！

少年、という言葉を私の耳は敏感に拾った。

「あのー……私少年じゃなくて少女なんですけど……一応現役女子高生だし」

そう言うとおニキスの動作がぴたりと止まった。
誰でもそうだけど、女だってことを申告するとみんなみじまじと見てくる。ディアもエルガーも騎士団の面々も。

「預言書にも間違いはあるらしいね……」

深刻そうにそう呟いたおニキスはぐりぐりと眉間のツボをマツサージしている。外見は小学三年生くらいのヨーコなのに行動が疲れ切ったサラリーマンっぽい。

「でも救世主って……ここはいたって平和なんですよ？ だったら別に救世主なんて必要ないんじゃないの？」

「残念ながらそうもいかない」

肩を竦めた彼女の姿が一瞬にしてうつすら透けた。
発光していた体も切れかけの電球みたいにちかちかと暗くなったり明るくなったりを繰り返す。

「ちょ……おニキス？」

「時間切れみたい。アルカナ、その預言書はちゃんと持ち帰るんだよ。君がここにいる理由はそこに書かれているはずだから」

遺言か！

突っ込みどころだけど、オニキスは半透明のまま宙にふわりと浮かびあがった。

「ま、待つてよオニキス！ アルカナとか全然わけわかんないんだけど！ 私は具体的に一体何をすればいいわけ！？」

「それは僕にもわからないんだ。大丈夫、また会えるよ」

「そんなこと言ったって説得力——」

ぱん、と泡が弾けるみたいにしてオニキスが空中から消えた。

途端に辺りが闇に包まれる。

「なさすぎなんだってば……」

一人取り残された私はどうしようもなくなって一分くらいそこに立ち尽くしていた。

「どうしろって言っわけ……」

やり場のない苛々と悔しさに唇を噛んで、剣が収まる鞘の先を地面に叩きつける。

ガツツ、と硬い音がするだけだった。

——私がここにいる理由？

オニキスの言葉を思い出して手にある預言書を見るけど、さすが

に真っ暗な中じゃ文字も読めない。

出口を探そうと壁際に視線をやったところで、また穴を発見。最初に地下通路を発見した時のような、ドア一枚分くらいの大きさに切り取られたそこを私はじっと見据えた。

今なら怒りをパワーに変えてガイコツでもなんでも倒せる気がする！

闇に足音だけが響いた。

ちなみに、私が進んだ通路の奥は行き止まりになっていて上に梯子だけが通じていた。

三十メートルくらいだろうか、普通の女子高生ライフじゃとても体験できないくらいの梯子の長さ両方の足の裏が悲鳴を上げる。

最終的に一番上には蓋がしてあって、重い石でできたそれをずらすのは一苦労。

息を切らしつつ蓋をずらして顔を出すと、眩しい夕日が差し込んだ。

「疲れた……」

なんとか梯子から這いあがり服についた埃を軽く払う。

繋がっていた先は所々大きな穴の開いた建物。彫刻やなんかが柱に細かく刻まれていて、大理石みたいな石で出来てるから——おそらくここは明日探索予定だった神殿だろう。

地下に迷い込んだのが昼を少し過ぎたくらいだった。でもって今は夕日が沈みかけている。

——地下探索長っ！

エルガーの方は大丈夫だろうか。

神殿から出て目の前にあった石段を下りると、午前中まで探索していた時計塔がすぐ見えた。なんとなく「帰ってきた！」みたいな気分になって小走りでそちらに向かうと、その影から急に誰かが飛び出す。

その人物——ディアは私の姿を見た瞬間

「キャ————ッ!？」

女の人みたいな悲鳴を上げた。

「ははははハルッ！ 良かった今までどこにいたの!？」

詰め寄ってきてがっしり私の手を握ったディアが怖いぐらいの近さでそう叫ぶ。なんだかいつもより声が1トーン高い。

「探したんだよ！ 何この血!？ 怪我したのっ!？ 手当しなきゃ!」

「これ鼻血だから……」

「誰か——っ！ ハルが死んじゃう！ ハルが死んじゃうよ——っ！」

「人の話を聞かんかい！」

ディアの叫び声に騎士団の面々がわらわらと集まってきた。みんな感動したような、どこか憐れんでるみたいな目でこちらを見ている。

ふと自分の服に目を落とすと、予想以上に鼻血が付着。

「……」

——これは相当頑張ったと思われてるな。

ぐいぐいと顔をこすって顔面についている血を拭うけど落ちたかわからない。

「ディア、エルガーは？」

「あいつなら向こうにいるよ。ハルより先に地下通路から出てきて一緒にハルのこと探してたんだ」

ディアが言い終わると同時、ジェラルドとエルガーが騎士団員の間を縫ってこちらまでやってくる。エルガーも結構服汚れてるから、私も酷い有様なんだろう。

「ハル、よかったよ、君が無事で俺は今なら死んでもかまわない！」

ぎゅ、とディアから私の手をつさって指を絡めるジェラルドに「はは」と苦笑い。

「エルガー、なんかさつき私変な穴に落ちちゃったみたいでさ」
「知ってる。落ちる時の阿呆面が酷かった」

一言余計だっつの！

今日はちよつとピリピリ気味の私は心臓をなだめつつ、思わず笑顔になった。

なんたつて今日は収穫があるもんね！

「で！ 見つけたよ、預言書！」

ポーチからばさつと二枚の紙を出して広げると周囲からどよめきが上がった。その声に思わずニヤリ。

エルガーは大人しくそれを受け取りジェラルドも隣から覗きこんだりしている。騎士団のみんなもわらわらと集まってきたりして。

「じゃあ今日で探索は終了か」

「早いもんだな」

エルガーの手元にある羊皮紙を後ろから見ながら楽しげに話すみんなに、こつちまで笑顔になってしまう。

一応これでちよつとは役に立てたかな？

「よくやった」

仏頂面鉄壁仮面のエルガーから最後に褒め言葉を貰って、私はにっこり笑いながらも「あれ？」と心の中で首を傾げた。

なんか変な感じ。

「ハル、お疲れさまだったね！」

ディアがぎゅーっと抱きしめてきたので慌ててその腕から逃げながら、私は違和感の正体を確かめようとエルガーの方をちらりと見たけど——別にいつもと何も変わらないよなあ……。

日暮れに鳥の鳴き声が聞こえた。

06 預言書（後書き）

5万HIT感謝です！

初めに「目指せ5万HIT!」という目標を頭の中で掲げていたんですが、ようやくそれが叶いました。

たくさんの方々が読んでくださっているようで、本当に感謝しています。

更新速度は遅いですが、どうかこれからも見守っていただけると嬉しいです。

01 帰還

「準備はいいかの？」

薄暗い図書室の一角で、老人の声が響いた。

本棚の隙間、暖色の光を放つランプだけが周囲の景色を浮きたたせている。その中に佇むのは、老人一人と若者が二人。

老人、エルナイト卿の正面に並んで立つのは騎士団団長のエルガ！。そしてその隣には騎士団第二隊隊長のディア。

一昨日見つかった預言書の一部は、今現在エルナイト卿の右手に握られている。木製の床には大きく描かれた魔方陣。今から何が行われるかはもう明確だった。

「はい」

魔方陣の中央に立ったエルナイト卿の言葉に二人は静かに頷いた。

同時に陣の紋様から青い光が発せられ、預言書が風にあおられたようにフワリと宙に浮く。やがて二枚の羊皮紙に綴られた文字が僅かに動いたかと思うと――紙の上から文字だけが抜け出てきた。

一列になったそれらは回転しながらエルナイト卿の手のひらの上にゆっくりと降り立つ。それは青い光に包まれた、幻想的な光景だった。

全ての文字が手に集まると、彼は両手でそれをぐっと握りこむ。その瞬間、図書室を光が包み込んだ。ディアとエルガーもその眩

しさに一瞬目を細める。

「ふむ、まあこんなところじゃのお」

光が収まって両手を開いたエルナイト卿は満足そうにそう呟いた。

皺くちやの手には、預言書に書かれていた文字とは違う文字がぎっしり詰まっていた。

翻訳魔法、と呼ばれる魔法はこの世の全ての文字を自分の知る文字に置き換えることができるという便利な魔法だ。主に考古学者などにかつて栄えた文明の文字を読みとる為に普及しているものだが城内でも使える者は多い。

エルナイト卿もその一人である。

「預言書には、なんと？」

宙に浮かんだ預言書に翻訳後の文字を詰め直したエルナイト卿は「そう急ぐでない」とのんびり答えて二枚の羊皮紙に視線を向けた。

「ふむ、これは――」

「ただいま、ルー！」

「おかえりなさいませ」

ドアの前で、私はルーに思いっきり抱きついた。

一昨日の夕方サンストーンで預言書を発見して昨日帰ってきたんだけど、体はびっくりするほど疲れていて十時ごろには既に爆睡。今日は騎士団の第一隊は休暇で朝ごはんをすっ飛ばして眠ってしまった。

そんなこんなでついさっき午前十一時を知らせる鐘の音で目覚めたわけだ。

たかが三日くらい会わなかっただけなのに、ルーの姿を久々に見てなんだか涙まで溢れてきそう。女の子がいない生活ってやっぱり厳しい！

ところでルーことシエルルはシュヴァイツ城で働くメイドの中のメイド、そんな彼女が何故私の部屋の前なんかにいるかと言うと。

「お部屋にご招待！？」

「はい。よろしければですが」

彼女の言葉に私は朝っぱら（もう昼だけど）からテンションを急上昇させてしまった。

なんでもルーが自分の部屋に私を招待してくれるんだそうだな。なんて言っただってウォーターフォードに来てまだ一週間程度だし、これほど嬉しい誘いもない。

「行く行く！ 全然よろしいよ！ むしろ行かせてください！」

「少しうるさいルームメイドがいるのですが……それでも構いませんか？」

「構いませんって構いませんって！」

首をぶんぶん振りながらも「ルームメイト」という単語を脳内で分析し始める。

お城に仕えるメイドだから、彼女はやっぱり泊まり込みらしい。というよりシュヴァイツ城にいるほとんどの人がここで生活をしているくらい。

メイドは相部屋がいるらしいけど、騎士には一人一部屋が与えられている。昇進すると部屋も大きくなるとは聞くけど——異世界人の私には正直無縁な話だ。なんと言ってもここの文字が読めない時点で。

とにかく、このお城は昼夜問わず人が多い！

城自体が大きいためか人口密度も結構低くて真夜中とかトイレに行くときとかはあんまり会わないけど、昼間はけっこう賑やかだ。

騎士団の制服に着替えた私は、ルーと一緒に廊下を歩き始めた。

「ねえルー、この城って随分大きいよね……やっぱり怪談とか怖い噂ってあるの？」

「よくありますよ」

ヒヤリとするルーの声音に、私は思わず背筋を総毛立たせた。

「例えば、夜中に一人で回廊を歩いているとどこからともなく足音が聞こえてきて」

「……」

「それがまるで甲冑を着た人が歩いているような、金属的な足音で」

「……」

「後ろを振り返ると遠くの方に銀色の何か大きなものが」

「……あの、ルー？」

「どんどんこちらに迫って来るそれは甲冑でありまして」

「ルー？　ねえ聞いてる？」

「けれど真夜中に甲冑などという大仰なものを着込んで見回りをする騎士などいるはずありませんし」

「ルー？　ちよっと、もういいよ？　なんか寒くなってきたから！」

「それから逃げようとして走っても」

「もういいもういい！　もういいです！　はいストップ！」

途中から喜々として語っていたルーの口を手のひらで押さえ、私は冷や汗を流しつつそう言った。

サンストーンの地下通路ではガイコツと戦った私だけけど、幽霊やおばけの類の克服ができたのかと言えばそんなことはなく。

——むしろますますトラウマになっちゃったんですよー！

昨日なんて夢に出てくるくらいに、それはもう恐ろしい体験だった。その直後に怪談話なんてされたら泣いちゃう。いや、振った私が悪いんだけどね！

「ハル様は、怖い話が苦手なのですか？」

「苦手っていうか……まあ普通に怖いじゃん」

ルーの口から手を離すと、彼女の口角がニヤリ、と引き上がった。

——なにその企んだような顔っ！？

彼女が笑うところなんて初めて見た気がしたけれど最初の微笑み

がこれって恐くないか!?

「あ、そうだルー！ エルナイトさんって知ってる？」

話題を変えようとして浮かんだのは何故か謎の老人エルナイトさんのことだった。

以前魔法で記憶を覗かれてからは一度も会っていないあのおじいさん。ちゃんと元気にやってるのかな、と彼女の方を窺う。

「エルナイト卿ですか？」

「そうそう。なんかよくわからない人だなーと思って」

「あの方はご隠居される前まで何十年とこの城に仕え、戦時中も多くの命を救った大魔導士です。魔法についての知識が豊富で今でも尚この国に貢献しておられます」

「魔導士？」

ゲームに出てきそうな単語に、私は腕を組み首を傾げた。

魔導士ってことは魔法使い？ そんなに偉い人だったんだ、あの人。

人の記憶を無断で見るなんて悪趣味なことすると思ったけど、別にそれだけがあのおじいさんの全てってわけじゃないしな。

二人で話しつつ中庭の上の回廊を歩いていた時、すれ違った人の違和感に私は思わず立ち止った。

「……？」

振り返ると、こちらに背を向けて向こうに歩いて行く人の姿。背中ほどまである長い赤毛だけど、来ている外套は騎士団のものだ。

「ハル様、どうかされました？」

「……ううん、なんでもない……」

ルーの声に私は慌てて視線を戻す。その後も話を続けたけど、受け答えも少し上の空気味になってしまった。

あの人とすれ違った時——なんとなく嫌な予感が背筋を走った気がして。

不安を消そうと、私は剣の柄を握った。

01 帰還（後書き）

最近更新が遅くてすいません。

書きたいことは山ほどあるのに、なかなかパソコンをあける暇がなくて（泣）

でも五日に一度は更新するので！（↑結構ぎりぎりですけど）
頑張ります……！

02 ルームメイトinシエルル部屋

「ここ？」

「ここです」

横に並んで立つシエルルに、私はもう一度「ここ……？」と呟いた。

シエルルことルーにお部屋に招待されて廊下を進むうち煌びやかな装飾たちからは打って変わってだんだん湿気が多くなってきた。横幅が狭まり赤い絨毯が消え、見かけるドアの量が結構増えてきたところでようやく着いたのが。

めちゃくちゃ古い木製のドアの前。

「……」

いや、これ結構怖いよ。開けたら何か出てきそうだもん！ エルナイトさんのいる図書室と同じ空気を感じる！

城内で見かけるメイドの人数は数知れずだし、こんなでつかい城だとかやっぱり人手もかかるんだろ。下働きの人は多いからか部屋の造りはちよつと乱雑らしい。

——女の子をこんなところに住ませておいて騎士ってどんな身分やねん……！

心の中でつつこみを入れて固まっていると、ルーがドアノブを握

った。

「よろしいですか？」

「よろしいですか？……別になんか飛び出てきたりしないよね……？」

恐る恐る聞いた私を見てルーは軽く首を傾げた。

「どうぞ」

——も、問答無用——っ！

きい、と木の軋む音がしてドアが向こうがわに大きく開いた。

「……あれ？」

冷や汗を流しつつ目にした光景に私は間拔けな声を上げる。

ドアを開けた先には、おどろおどろしい室内なんて広がっていなかった。

小さい小窓が上の方に一つ。光源はそれだけに全体的に明るい部屋にはベッドとタンスが二台ずつあって、空いたスペースには丸い机とイスが置いてある。

な、生メイド部屋！

そして更に私がびっくりしたのは、テーブルの横にちょこんと立つ女の子の姿。

「ハル様、どうぞ」

「え！？ あ、はい、お邪魔します」

後ろからルーに声をかけられ、私は慌てて部屋に入った。

テーブル脇に佇む女の子もやっぱりルーや私と同世代くらいだ。こちらを爽やかな微笑みで見てる。この子が例のルームメイトさんらしい。

「紹介します。ルームメイトのロズです」

「はじめましてハル様。ロズです。以後お見知りおきを」

「は、はじめまして……！」

メイド二人目！

赤い髪のショートボブな彼女——ロズさんはメイド服の裾を軽く掴んで優雅にお辞儀。洗練されきったその動作に私の心は驚掴みにされた。

——ロズさんめっちゃかわいい！

何故だかわからないけどシユヴァイツ城に仕える人たちの顔のレベルって異常だ。美男子美女あわせて何人いるやらって話である。当然ロズさんもシユヴァイツ城の暗黙ルールに沿ってかわいい顔立ちをしている。ちょっと幼さを残すものの……これは普通に女子高生で通るだろうん！

ルーはうるさい子だって言ってたけど、なんだ、全然おとなしそうじゃないか！

「立ち話も何ですしお茶でもいかがですか？」

ぽーっと見とれている間にロズさんは手でテーブルの方を示した。
「あ、ああ、はい」と回りきらない呂律で応えと、

「……ロズ」

背後にいたルーがぞっとするくらい低い声音でロズさんと呼ぶ。

「はい？」

「ハル様は、女性です」

その言葉に、一瞬場の空気が硬直した。

「女性……？」

何やら不安げな声と共に、ロズさんがこちらに訝しげな視線を向けてくる。じつと顔を見た後、少し視線を下げたかと思うと、

「そんなまさか」

——私の胸そんなにないの！？

ロズさんは辛辣な台詞と共に私の方へ近寄って来たかと思うと、小さい手のひらをポンと私の胸の上に置いた。

「ぎゃあああ——っ！？」

なにしとんねん！

素早くその両手を跳ね返すと、彼女は形の良い眉毛を思い切り下げた。

「お、女……？ そんな、ハル様が女なんて……！」
「いや、その……」

気まぎれな空気をなんとか取り戻そうと口を開いた瞬間。

「そんな馬鹿なああああ————っっ！」

ロズさんが、真横のベッドに勢いよくダイブした。

私は一人、思わず茫然。

「ハル様が、ハル様が女性だったなんて！ そんな馬鹿な話っ！ そんな馬鹿な話がこの世のどこに！ 今度こそいい相手を見つけられたと思っておりますのに————っ！」

直後に始まった絶叫の早口に、私は「え」と口まで開いてしまう始末だ。

——— 清楚な感じだと思っていたのに！

枕にしがみついてごろごろとベッドの上を転がる様は残念ながらどう見ても清楚なお嬢様風メイドには見えっこない。

つまりロズさんは、ルーが（男の）騎士団団員を連れてくるとでも思っていたんだろう。それがまさかの男顔女子だったからこの落ち込みよう。恋人候補にいてもなっていたんだろうか。

なるほどこれは「うるさい」わけだ。

「あの……ロズさん？」

恐る恐るといった体の私に、ロズさんの動きが止まる。

こほんと軽く咳払いをした彼女は潔くベッドから下りてメイド服と髪の毛を直した。

「取り乱してしまいました、申し訳ありません。ですが私、ハル様が女性の方でも男性の方でもお知り合いでいたいのです」

「男性の方」のところがメチャクチャ強く発音されたのって私の気のせい？

「ですからどうかこのロズと、今後もお付き合いお願いできませんでしょうか？」

「あ……はい、こちらこそ。私、友達ルーしかないから……」

自分の台詞に、私自身もん？ と首を傾げた。

つまり現時点でロズが二人目のお友達ってことになる。

——友達少ない……！

とにかく友達が二人ってことは、それだけその子たちとの時間が大事だつてことだ。それはそれでいいことじゃないか。知り合いの一切いないこの異世界で、一か月も経っていないのに友達二人って多分すごい方だよ！

「では、そろそろお茶でも」

ルーの言葉に三人でそそくさと席に着く。机上には三つのカップにお菓子も置いてあって、お昼前だけど女子三人でお茶会なんて結構ロマンがあるなあと思った。

ローズさんは一暴れしてすっきりしたのか、満足げな笑みを浮かべてお茶の準備をしている。

「ハル様の出身地はどこですか？」

こぼこぼとティーポッドからお茶をカップに注いでいるローズさんがそう聞いてきたので私は一瞬どもってしまった。

「に、日本……」

「ニホン？ 聞いたことの無い地名ですわね」

「北大陸あたりですか？」

「いや、島国……」

そういえば、ディアとエルガー以外に私が異世界から来たってことを知っている人はほとんどいないはずだ。

なんて説明すればいいんだろう。っていうか説明なんてしても信じてもらえるわけないよね多分。

異世界から来たって、例えば高校の友達とかから言われたら。私だったら冗談だとは思わない。

「ハル様、綺麗な瞳の色ですわね。その島国ではみんな瞳は黒色でしたの？」

「え？ うん、そう。みんな黒だったよ」

そういえば、この世界に黒い瞳の人間なんていないって聞いてたけど、それは本当なのかな。

もし本当だったらみんなもつとオーバーアクションだね。

「ねえ」

三人いても、お茶を注ぐ音だけになると静かなものだった。
そこに私の声はびっくりするほどよく通った。

「私、変かな？」

自分のことばかり気にして、子供みたいで恥ずかしいけど。
もしこの黒い目が周囲から浮き立って見えたら嫌だなとかそんなことを考えてしまった。

「……ハル様は変です……」

「確かに」

うわ大体予想してたけど実際言われるときつついな！

私は足の上でぎゅ、と拳を握った。

「城内のメイドからちやほやされて、一体何が楽しいと言つのですか」

「そうですわよ！ メイドの中には女豹のような者までいるんです

わよ！ お気をつけにならないと手遅れになってしまいますわ！」

二人の言葉に私の思考回路は停止。

—— 違うそっちじゃない！

性格的な「変わってる」「じゃなくてもっと目に見えるものを！

「そうじゃなくて……私、目の色みんなと違うでしょ？ 黒なんてウォーターフォードにはいないって……」

「目の色なんて決まってませんわよ？」

当然と言わんばかりの物言いに、私は思わず肩を縮ませた。

「でも、黒い目の人間なんて……ここには」

日本では黒い目が「普通」で。

ウォーターフォードでは黒い目が「普通じゃない」。

普通じゃない、がこんなに恐いとは思わなかった。

多分これは、動物としての本能だ。周りと違うことがどれだけ自分に影響をもたらすか。周囲からどれだけ人が離れていくか。

「『いない』と『いちやいけない』は違います」

ルーの言葉に、私は顔を上げた。

「ハル様は、預言書の『黒い瞳の人間はいない』という言葉に氣になさっているのでしょうか？」

「うん、まあ……」

「預言書にいないと言われたって、黒い瞳のハル様はここにいるではないですか。それがいけないことだともおかしいことだとも私は思いません」

ルーは言いつつカップを手に取り、そっと口をつけた。

——…これは元気づけてくれてるんだよね。

「私、ハル様の瞳の色がとても好きですわよ」

どうぞ、とロズさんがカップをこちらに出した。
受け取ると、ほんのり薔薇のような香りがした。

——なんか、恥ずかしいな。

初対面の人にまで気を遣わせてしまつて。

自分の評価や周囲からの視線を気にしてばかりで、自分のことで手一杯。

それってまるで構ってほしい子供みたいだ。
でも、今この時くらいは。

この二人という時くらいは、子供でもいいかな。

お茶は、酸っぱい味だった。

酸っぱいけど、どこか甘かった。

「やはり厄介な存在だ」

普段以上に低い声音に、もう一つの影が蠢いた。

「どうしますか」

「厄介な存在は早々に消してしまう方が楽だ。だが」

深海の色をした瞳が、ずっと細められる。

「どうせなら、まとめて消した方がいい」

暗闇の中で怪しげに瞳が光った。

02 ルームメイトinシエルル部屋（後書き）

更新遅れてすいません。

実は六月の中盤まで、忙しくて更新できそうにないです。

それを乗り切ったらあとはたぶんスムーズになるので！

それまでしばらくお待ちいただければ……と。

ほんとダメダメな作者で申し訳ないです。

これからも、アルカナの行方をよろしく願います。

03 アルカナ

すたすたと廊下を歩いていた私は、重々しい図書室の扉の前で足を止めた。

ルーとロズのお茶会が終了後、現在時刻は午後五時頃。

夕方ですっかり日が沈みこんだ城内は、ところどころ火が灯っただけで幻想的と裏腹にちよつと不気味だ。奥の方で光が当たらない図書室は尚更！

わざわざ部屋までやってきたディアに「図書室に五時に集合ね」と告げられたのでまあ言われた通り来たわけなんだけど。

——なんかディアの顔が強張ってたのは気のせいかな？

そんなに重要な用事なのかな。なんだかドキドキだ。

軽くノックをしてドアノブを捻り重いドアを向こう側に押す。広い暗闇の中でも図書室の住人・エルナイトさん——そういえばあのおじいさんいつもここにいるな——の居場所はすぐわかる。ランブを携帯してくれているおかげでそこだけ明るいからね。

こん、こんと木板をブーツの踵が叩く音。

どうして私の足音しかないんだろう。

静まり返った室内で聞こえるのは一人分の歩く音。あとはなんか……変なブブブブっていうケータイのバイブ音みたいなやつ。

「おじゃましまーす……」

萎えた声で言いつつ明るくなっている本棚の横からりよっこり顔を出す。

——…なにこれ？

ウォーターフォードに来て何回思っただろう。なにこれって場面多すぎじゃないかな異世界。

浮いている二枚の羊皮紙は多分預言書だ。それがエルナイトさんの手のひらの上でぐるぐる旋回している。そこから何やら細い紐みたいなものが抜け出してきた。

紐じゃない、あれ文字だ。

文字が一本の紐みたいに連なって羊皮紙から飛び出してきてる。

くるくる円を描いて回った文字の紐はやがて意思を持ったようにエルナイトさんの手に集まると、彼がそれをぎゅっと握りこんだ。まるで、おにぎりでも握るみたいに。

その指の隙間から、ぶわっと細かい文字がバラバラになって現れてまた預言書の中に吸い込まれていく。

あなたたち……一体何してるんですか？

でもってエルナイトさんの正面、つまり私の方に背を向けて立っているのがディアとエルガー。なんか突っ立ってるみたいだけど、これって私が割り込んでよさそうな雰囲気じゃないよね？

「これで完了じゃのう」

エルナイトさんの呟きと文字が羊皮紙に元通り戻るのはほぼ同時。それとともにディアが「はあ」と息を吐いた。

「結構大仰ですよ、翻訳魔法」

「そうじゃのう。まあウォーターフォードの文字を異世界のものに訳すのはこれしかないからの、仕方ないんじゃないが」

その言葉に、私はピンときた。

すたすたと歩いていくと、ディアとエルガーの間に割って入る。

「わっ、ハル！？ いつからいたの！？」

「さっきからいた。エルナイトさん、その預言書ってまさか……」

「これだから女は……」

隣で呟かれた言葉に、私はぎつとエルガーを睨んだ。

「ほう。耳が良いのう」

彼はそう言って私の方に預言書を手渡してきた。横から二人も覗きこんでくる。

「翻訳魔法で無理やり異世界の言語に直したものじゃ。とは言ってもお前さんの記憶を頼りに造ったものじゃから正確には読めないかもしれない」

差し出されたそれには小さい文字がびっしり書き込まれている。多分私が読めるようにっていう気遣いなんだろうけど。

「この文字、知ってます……」

「ほう、知っておったか。なんと書いてあるのかわかるかの？」

「いや、なんていうか」

確かにここに書いてある文字は私が知っているものだ。日本にいた時に何度も見かけたし学生なんだから大体の意味はわかる——と思う。

でも！

「これ、私の国の文字じゃないんですよ残念ながら……！」

そこに書かれていたのは日本語ではなく。

英語だった。

しかも筆記体だし！

「読めないのか？」

「読めないことはないけどこんなにずらずら書かれると普通の高校生のは大半は読むだけで一苦労すると思うよ。普段はもっと一文字ずつわかれたブロック体ってやつで勉強してるから」

考えてみれば、筆記体勉強しないで外国とか行っても平気なのかな？ 前置詞とかしか読めないよこれ。

「単語難しいし……」

がつくり肩を落としているとエルナイトさんがふおっふおっふおっ
 といつもものしわがれた声で笑った。

「心配せんでも、それは元はウォーターフォードの文字じゃ」

「あ、そっか。なんて書いてあったんです？」

「そのことなんじゃがの」

妙に深刻なエルナイトさんに、私の表情も固まる。気のせいか横の二人も無表情だし、今の空気が痛いくらい肌に突き刺さる。

「この世界の存続について書かれておる」

「存続……？」

世界に存続なんてあるの？

日本にいたときは地球滅亡とか人類滅亡とかそういう映画もよくやってたけど。

「近いうちに、この世界の神が殺される」

エルガーの冷えた言葉に、私は硬直した。

「神様が殺される？ どういうこと？」

「預言書にはそう書いてあったんだ。巨大な力を持った者が現れ神を殺し、この世界は滅びるってね」

正直言って、え？ って拍子抜けする内容だった。

本当にみんなそうなるって思ってるのかな。だって預言書は言っ
てしまえば単なる紙だよ？ そんな百パーセントそうなるかなんて
わからないじゃないか。

あからさまに胡散臭そうな顔をしたこちらの様子にエルガーが溜

息をついた。

「預言書はこの世界で絶対の存在だ。その本に書かれたウォーターフォードの様々な場所で起こるとされた事象は全て当たっている」
「全て!？」

なにそれ怖い!

じゃあ本当に預言書の通りになるのだとしたら、ウォーターフォードが滅びるってことになる。

「ウォーターフォードが滅びるって、どうにかならないの!？」
「ハル、落ち着いて。預言書は『予言』するだけじゃないって言うたろ? 預言書っていうのは起こるとされた『困難』に対抗する方法も書かれてるんだ」

『預言書は未来の『困難』を書いた上で、それに対する対処法も載っている。だから、預ける言葉で預言書』

ふむ。そういえば確かにディアがそんなこと言ってたな。

「でも今回は困難ってレベルじゃない? 世界の滅亡だよ?」
「まあその話があってハルを呼んだんだけど……」
「え?」

一体世界滅亡と私に何の関係があるっていうんだろ?。
疑問に思っただけの時。

「『異世界から来た者が、神を殺そうとする者を倒す』」

ディアでもエルガーでもエルナイトさんのものでもない幼い声に、私達は振り返った。

本棚の間に立っていたのは瞳と髪の青い少年が一人。そこだけ淡く光っている光景は神々しさまで感じるくらいで、この少年が只者でないことを感じさせる。

——まさかとは思うけど、この男の子って……！

「オニクス……？」

「やあ、久しぶりだねアルカナ」

サンストーンで預言書を見つけた時に現れた自称『預言書の番人』。あの時は私の記憶の中にある姿を借りるとか言ってヨーコの姿でベラベラ喋っていたけど——今はまるで女の子みたいな綺麗な顔立ちをした男の子。

「何者だ？」

エルガーが鋭い瞳でじろりとオニクスを睨む。右手は剣の柄に置かれているし殺気が背筋まで伝わってくることから相当警戒しているらしい。

「エルガー、あの、えつとね……」

「僕はその預言書の番人だよ。名前はオニクス。あんまり警戒してほしくないな、騎士団団長さん」

ぎすぎすした空気に私もディアも内心大焦りだ。エルナイトさんはにつこり笑ったままだし、なんとかしてよ年長者さん——！

「け、けどオニクス、どうしてこんなところに？」

「預言書の番人が預言書から離れちゃ意味無いでしょ？ 僕はずっと預言書の傍にいたんだけど、魔力が安定してきたみたいだから出てきたんだ。ずっとあんな暗い所に閉じ込められっぱなしだったし気分転換も兼ねてね」

肩を竦めつつ話すオニキスに相槌を打ちつつ横目でエルガーの方を見る。いかにも何だコイツ信用ならないみたいな顔してるし！私と最初に会った時もこんな感じだったな確か。

「ハル、この子が本当に預言書の番人なの？」

「うん多分……サンストーンの地下道で初めて会った時は女の子の格好だったけど……」

——でも声からしても本人だよなあ。

じつとオニキスの方を見ると彼は困ったように「信用ならないなあ」と笑った。それから青い瞳を閉じるとすっと顔から表情を消し去る。

一体何をするつもりなのかと疑問に思ったその時、オニキスの足元から水色の閃光が駆け抜けた。眩しくて目を閉じてしまい、一瞬後に瞼を上げるとそこにいたのは。

「うわっ、女の子!？」

ディアがぎょっとしたように私の背後で叫ぶ。

ワンピース姿のヨーコ……サンストーンで会ったオニキスの姿と同じだ。

「これで大丈夫だね。まあそこのおじいさんは気付いてたみたいだけ」

「ふおっふおっふお」

「え！？ エルナイトさん、オニキスが只の子供じゃないってわかってたんですか！？」

うむ、と言った感じで頷いたエルナイトさんを見て私は少し感動を覚えた。単なるおじいちゃんだと思ってたけど、この人実は結構すごい人なんじゃないかな！

「で、その番人が一体何の用だ？」

ずっと黙りっぱなしだったエルガーが低い声でそう尋ねる。

確かに、魔力が安定したっただけの理由なら別に今のタイミングで出てこなくても平気なはずだね。

「そのページは預言書の中で一、二を争うくらい大切なページなんだ。なんと言っても世界の存続の話——神の生死の話が書かれているのだから」

真剣な面持ちのオニキスに、私は背筋に寒気を感じた。

ウォーターフォードが減びるってことは、そこにいる人間は全て死ぬことになる。人間だけじゃない、動物も植物も、命あるものは全て絶える。

預言書がどれだけ「重い」ものなのか、オニキスの表情でわかった。

「神は殺されかけるん（・・・・・・・・）だ（・・）。巨大な力を持った誰かの手によってね。それを阻止する役目を担っているのが『異世界から来た者』通称」
「『アルカナ』じゃのう」

——…え？

思わず呆けた顔で「え？」とオニキスの後の言葉を続けたエルナイトさんの方を振り返ってしまう。

今「アルカナ」とか聞こえたんですけど、気のせいですかこれ。

「そう、アルカナだ。異世界から来た人間、この世界と神を救う救世主。だから僕は君を呼んだんだよ、七瀬ハル」

オニキスはそう言って私を指差した。

——…は？ え？

ポカン顔でエルガーを振り返ると、やっぱり腕を組んだまま無表情。

ディアは首を傾げたまま硬直。

多分三人揃って意味不明みたいな感じだけど——いや多分この中で一番意味不明なのは私だと思う。

「聞ってるの？ アルカナ」

拗ねたような口調のオニキスをじっと見つめることたっぷり三十

そういえば二人にはアルカナ云々の話とか全然してないんだった。こりゃあ話についていけないわけである。

ディアの問いかけに、彼はにつこり笑って頷いた。なんだそのイイ笑顔は。

「ともかく、アルカナにはこれから色々頑張ってもらわないといけないね」

「色々って……じゃあ私がもし本当にそのアルカナだったとして、一体誰を倒せばいいの？ すっごい強い人なんですよ？」

『巨大な力を持つ者』とか言ってたし、何かすごいところがあるんだろう。早めに情報を仕入れておいて損は無いだろうし。

「そんなの知らないよ」

……。

わかったぞ、この自称預言書の番人の性格。

無責任の三文字に限る。

「オニキス、さっきから言おうと思ってたけど……それでどうやって神様助けるの？」

「それは僕にはなんとも言えないな。単なる番人だし？」

ダメだ。終わったこれ。

本当に私が『アルカナ』だったとして、このままじゃ結構まずい事態なんじゃないか？ 神様が殺されるのを阻止するのが役目のはずなのに、敵の情報が一切無いなんて。

「じゃあどうしろって言うわけ……？」

苛々で震えつつある拳を強く握ってオニキスを睨みつけると、彼は肩を竦めすつと瞳を細めた。

「それは君の行動次第だ」

そんな馬鹿な話あるかい！

内心突っ込みつつ彼の方を見ると、神妙な面持ちのままオニキスは口を開いた。

「ただ、神は君を選んだ。君がこの難題を乗り越えられると感じたから、君を選んだのだよ」

やけに重く感じる言葉に、冷たい空気が流れた。

午後五時の鐘の音が、荘厳に響き渡った。

03 アルカナ（後書き）

遅くなつてすみません。
再開します。

04 困った困った

「いたたた……まったく、叩くことは無いじゃないか」

苦笑いをして頬を押さえた少女——オニキスはたった今荒々しく閉まったドアの方に視線を移した。余程強く閉めたのか、その衝撃で長年の間で本の上に溜まった埃が舞い上がっている。

「まあ叩かれるのも無理ないのう。こちらの都合でウォーターフォードに呼んでしまったわけじゃから」

溜息混じりにそう呟いたのはカンテラを持ったエルナイト卿だった。隣に立つディアも腕を組んでうんうんと頷いてオニキスを見る。

「大体、預言書の番人だつて言うけど……君は一体何がしたいんだ？ ハルをこの世界に呼んで神の敵を倒させる？ 本当にそれだけなの？」

「僕はあくまで番人だから別に何かしたいわけじゃない。主の命に従うだけさ」

「主？」

ぴくりと反応したエルガーの方を見てオニキスは「そう」と顎を引いた。

「僕の主は預言書を造った、ウォーターフォードの神様だ。神がハルをここに呼んでほしいと言ったから僕はそれに従った。それだけの話だ」

その言葉に、相対するエルガーとディアは複雑そうな顔をした。まるで納得できない、とでも言うような。

二人の表情を見たオニキスは、小さく微笑んだ。外見相応の笑顔にはとても見えない笑みである。

「今日はもう疲れたから、僕は一眠りするよ。何か聞きたいことがあれば名前を呼んでくれると助かるな」

少女の姿の彼はそう言い残し、足元からふわりと消えた。

途端に暗い室内に降ってくるのは、重苦しい沈黙のみ。それを破ったのは年長者であるエルナイト卿だった。

「……お父上には報告したかの？」

「はい、一応。まだ可能性の段階だとも言っております」

そう答えたディアはさつと踵を返してドアの取っ手を握り勢いよく引いた。かと思うと無言のまま、しかし妙に焦った様子で外へ出ていく。

「若いうちは色々混乱するものじゃ」

肩の力を抜いてそう吐きだしたエルナイト卿は立ちつくした様子のエルガーを見やった。

溜息をつくと彼の元まで近寄って軽く肩を叩き、預言書を差し出す。

「翻訳魔法で訳した預言書はお前から言語研究の者へ渡しておくれ」

「……わかりました」

消え入りそうな声でそう返したエルガーも、ディアと同じように足早に図書室のドアの前まで行くと振り返ることなく出て行った。

「——あの娘もよく好かれたものじゃのう」

老人の呟きは、誰の耳にも届かなかった。

信じられないっ！

踵が床にめり込むんじゃないかってくらい強い足取りで廊下を歩いていて私は拳を握りしめた。

——何あのオニキスの態度！ 神様云々の話はともかくとして、いきなり異世界にブツ飛ばされた私に対する扱いが酷過ぎるっつの！ なにアルカナアルカナ言ってるの！ 私にだってちゃんとした名前があるんだってばバカヤロー！

とまあ勢いでオニクス（ちっちゃいヨーコバージョン）の右頬に一撃必殺ビンタをかましてきたあとで、肩を怒らせた私の様子は周囲からも余程異質に見えたらしい。すれ違う人十人中十人が振り返るくらいには目立っていた。

だけど怒ることにさえ疲れてきてしまったので、段々と歩調が緩くなった。

「はあ……」

神様を助けるなんて無茶な話が一体どこにあるって言うんだ。

大体神様なんて見たことも会ったこともないよ。本当にいるわけ？

混乱したまま歩いていると辿りつくのはやっぱりあのテラスだった。階段を上ったり色々な角を曲がったりするのにここにだけは何故か辿りつける。

いつだって、迷ったらここに来た。

「あー、いい眺めだ」

ベンチに膝立ちして手すりの向こう側を覗くと広がっていたのは城下町。日が沈みかけて、所々の露店では店じまいも始まっている。もうそろそろ冬も終わる。

ウォーターフォードには、日本と同じように四季があるらしい。

誰かに明確に聞いたわけではないけれど、肌寒さが消えて暖かくなってきたことから大体の季節の移り変わりがわかる。

「季節が移り変わるのって早いなあ……」

ここに来た時はまだ少し寒かった。独房の中にいた時はそりゃあもう、凍え死ぬんじゃないかと思うくらいに。

いつの間に春が来たんだろう。

伸びをしてベンチに寄りかかると、急に落ち着いた。

一体さっきまで何に怒ってたのか、わからなくなっちゃうくらい。

——苛ついたんだな、日常をいきなり奪い取られたことに。

ウォーターフォードに来る前は、ファンタジーな世界とかに憧れて頭の隅でちよつとくらい非日常に憧れたりしたけど。

実際にいきなり見知らぬ土地に飛ばされて、友達も家族もいなくて一人ぼっちになって——そうしたら非日常なんてどうでもよくなつた。

私が元いた場所に戻りたくなつた。

平和で変わらない毎日が愛しくなつた。

だから怒ってるんだ。理不尽にも。

自分の生活に飽き飽きしたことなんぞ棚に上げて、ただ周りが真っ白になっちゃつたことに。

「馬鹿だな私……」

結局自分で勝手に自分のこと振り回してるだけじゃん。

——考えても仕方ないか。今私はウォーターフォードにいるわけで、どう足掻いても日本には戻れないんだから。

ウツな気分で顔を上げて城下町からテラスの入口の方に視線を向ける。

と、そこには一人の青年が立っていた。

「？」

目が合ってしまったのでこちらは一瞬きよどったけど……相手は真顔のまま微動だにしない。

歳は大体私と同じくらいだろう。ただ、同級生とかから感じるあの子供っぽさが一切と言っていいほど無い。顔なんか恐くない？むしろ睨まれてない？

「あ、あの？」

金がかった茶髪に髪と同じ色をした瞳の彼は、私が口を開くのと同時にピクリと口元を引きつらせた。

さっきまでこちらを見ていただけの視線に、少しの嫌悪感が混じる。

——え！？ 誰この人！？ なんかめっちゃ睨まれてるんですけど！ 私なんかしたっけ！？

訳がわからんといった体で視線を送り返すと、彼は軽く舌打ちしてテラスの入り口から城内の食堂の方向へと歩いて行った。

いや、舌打ちされるってどんだけ嫌われてるんだよ。

謎の青年が去ったところでもう一度息をつくと、今度は青年が歩いていった方向とは逆の方からバタバタと騒がしい足音が聞こえてきた。

なんだか今日は騒々しいな。

そんなことを思いながらベンチに座っていると、視界に滑り込ん

できたのはなんとディアだった。

「ハルッ！」

息を切らせながらも私の名前を呼んだディアはテラスに踏み込むと一気にこちらまで近寄ってくる。

「え？ どうしたのディア、そんなに慌てて……」

「メイドの子にハルはいつもここにいて聞いてんだ。オニキスの話を聞いて色々不安そうに見えたから」

だから追っかけてきてくれたのか。

メイドの子って言ったら恐らくルーのことだろう。わざわざ彼女に会って居場所を聞き出して。

ディアはそのまま私の腕を掴んだかと思うと勢いよく立たせた。

一体何をするのか全然わからないけど、こちらはされるがままだ。

「ハル、僕はね、どんな理由であろうと君がここに来てくれてよかったと思うてる」

顔近い顔近いっ！

ぎゅっと手を握られたまま、大和撫子精神旺盛な私は硬直した。

だって普段女の子とばかり喋ってるし、彼氏とかいたことないし

！ こういう感じには慣れてないんだってば！

「君が騎士団に入って、あそこは変わった。少しずつではあるけれど、前より和気あいあいとしはじめてるし、みんなが明るくなったんだよ」

「う、うん……?」

そう、なのかな?

これは励ましてくれてるのか。優しいディアのことだ、私が落ち込んでると思つて来てくれたんだろう……多分。

「エルガーだつて丸くなつたし、あのメイドの子だつて雰囲気柔らかくなつたし!」

「はあ……」

「それにね」

ディアの手に力がこもつた。

「僕自身、ハルが本当にここに来てくれてよかったと思つてるのは——」

顔を上げるとダイレクトに目が合った。

青い目つていうのは、本当に綺麗な色をしている。

「僕がハルを、好きだからだよ」

04 困った困った（後書き）

一応ドタバタラブコメディの予定なので。

05 酸味

僕がハルを、好きだからだよ。

——ん？

ディアの言葉に、私は硬直した。

一瞬脳みその動作も停止して目の前が真っ白になる。

すき？

すきってなに？

——好きって何——っ！？

友情だ友情！ そうだそれだ！ それ以外に仮にもあのディアが私に向かって「好き」だなんて言うわけないじゃないか！ 勘違いしちゃったよははは！

「デイ、ディア……？」

混乱しきったまま顔を上げてディアの方を見ると、彼は相変わらずこちらをじっと凝視したまま。

「ハル、僕は君にここにいてほしいんだ。できることならずっと傍にいてほしい——友達じゃない、もっと近い関係で」

絞り出したような声音に私は息を詰まらせた。

私は日本から異世界にやってきた。
できることなら帰りたいと思っている。

アルカナっていうよくわからない『役目』の為にウォーターフォードに呼ばれたというのなら、一刻も早くその役目を完遂すればいい。

でも、ここ（・・・）に（・・）すごく（・・・）大切な（・・）もの（・・・）が（・・）できて（・・・）しまったら（・・・）——
——一体どうなる？

例え役目を終えたとして、

日本にいる家族や友人を取るのか

ウォーターフォードに残るものを取るのか

そんな辛い選択には迫られたくない。
だから誰との距離もほどほどに。

「ハル、もう一度言うよ。君が好きだ」

今まで男の人に「好きだ」なんて言われたこと無かった。
むしろ女の子の方が告白された回数多いし。

ディアは目の前に膝をつき、優雅な仕草でかشيずいて私の右手を取る。

「どうか僕の……僕の、恋人になっただけませんか？」

ドアの開く気配に、鏡の前で髪を梳かしていたロズは顔を上げた。振り返るとロズのルームメイトであるシエルルが疲れ切った顔で帰ってきたところだった。ドアを閉めた途端にエプロンの結び目を解き始める。

「おかえりなさい。どうなさったんですの？ 疲れてますわ」

「シャンデリアの掃除です」

「それは大変でしたわね」

肩を鳴らしてベッドに腰掛けた彼女にロズが苦笑を返す。そしてシエルルは長い息を吐いた直後「あ」と何かを思い出したように顔を上げた。

「そういえばさっき、ディア様に会いました」

「ディア様に？ 珍しいですわね……」

本来王子であるディアが一人で歩くのは滅多に無いことだ。大抵の場合誰かしら腕の立つ者が一緒にいる。普段はそれがエルガーだった。

「ハル様の居場所を聞かれて」

「ハル様の？」

「あんなに息を切らせて……何か急ぎの用事でもあったのでしょうか？」

シエルルの疑問にロズは肩を竦めて「殿方の考えることはわかりませんわ」と答える。

難しそうな表情で、シエルルは天井を仰いだ。

「——ごめん」

最初に口から零れ落ちたのは、たったの三文字だった。

「私は、ディアの恋人にはなれない」

体の表面はすごく乾いているのに、心臓が弾けそうなくらい熱かった。まるで焼けているみたいだと、そう思うくらい。

「——僕じゃ不安？」

「そうじゃないの。私は……いずれ故郷に帰りたいと思ってる」

そう言つと、心が急に縮まった感じがした。

何かに握られている感覚の心臓はやがて熱を引き始める。

「出来る限りウォーターフォードに大切なものを置いて行きたくない。ディアだつてそうだし、エルガーとかルーとかロズとかジェラルドとか……たくさん仲間が増えたけど、これ以上近い間柄になんてなれない。——なる気は無いから」

私の手を握るディアの腕からすつと力が抜けた。

それと同時に彼が立ち上がる。彼は身長が私より二十センチくらい高いから自然と見上げる形になってしまった。

さっきまで直接目を合わせられなかった。お互いどんな顔をしてるのかと思うと恐くて。

けれどちゃんと正面から見ればディアは思いのほかすっきりしたような表情で、小さく微笑している。むしろ私のほうが怖い顔してるんじゃないかなって思うくらい、穏やかな笑顔だ。

「そうか……ごめんね。ただでさえ混乱してるだろうに、変なこと言っちゃって」

「え……うつん」

「最後に一つだけ訊いていいかな」

優しい声のディアは口を開いた。

「ハルは、エルガーが好きなの？」

その質問に私は思わず目を剥く。

「そ、そんなわけないじゃんっ！」

「そうなの？」

「なんで！？ 私がエルガー好きとかびっくりでしょ！ どう見たって性格正反対だし！」

何を言い出すんだこの天然王子は！

咳払いをした私はディアを見据えた。

「とっ、とにかく、私は部屋に戻るね。色々考えることもあるから」

「わかったよ。邪魔して悪かったね。いい夜を」
「ディアもね」

自分では普段通り言葉を発せられたように思える。
動揺もしてない。心臓が爆発しそうにもなっていない。
ディアとすれ違い、バルコニーから城内に足を踏み入れた私は、
足早に自分の部屋へ急いだ。

泣いてもいないのに、手の甲は自然と頬を拭っていた。

「ハル……」

日の沈みきったテラスに一人取り残されたディアは、名残惜しうにその名前を呟いた。

彼の耳には城下町の喧騒など一切入らなかった。
たださっきまでここにいた少女の言葉が頭を揺さぶるばかり。

——たくさん仲間が増えたけど、これ以上近い間柄になんてなれない。
——なる気は無いから。

それでも僕は、君が好きだよ。

初めて会った時は黒い瞳に珍しさしか感じなかった。単なる珍しい色の瞳の少女だ、としか。

王族である彼に近づいてくる人間は、大抵は下心を持っている。他人の権利や地位を食いものにする者か『王子』に興味を示した人間かそのどちらかだ。

彼を王子ではなくて、一人の男として見てくれる人間は少ない。

その中でも、ハルのように自然体でストレートに接してくる人物は本当に数え切れるくらいいしかなかった。彼女に出会ってまだ半月も経っていないうちに彼の心はすっかり奪われていた。

「ふられちゃったか……」

ディアの顔からさつきまで貼り付けていた笑顔が崩れ落ち、乾いた唇からうすっぺらい笑い声が漏れる。

——仕方ない。ハルが決めることだ。

傷ついても、ハルの気持ちだけは優先したい。

一国の王子の想いは、夕闇には酸味の強すぎる味だった。

05 酸味（後書き）

お久しぶりです。

投稿が甚だしく遅れてしまつて誠に申し訳ない限りです。ようやく更新することができました。

そして、当初目標だった10万アクセスに到達することができました！

お気に入りも200件を超え……：すごくびっくりしています！

読んでくれている皆様方、ありがとうございます！色々な人に読んでもらっているからこそまで頑張れます！感謝です！

でもってアルカナもだいぶ投稿話数が増えたので、ちよっくら番外編を始めてみることにしました。

くだらないコメディーの話なんで。さらつと受け流してくれると助かります。

まだ一話しかないんですけどね（汗

<http://ncode.syosetu.com/n4465u/>

06 揺らぐ

「……」

朝。

カーテンが全開になって暑いくらいの日差しが差し込み、窓の外からは鳥のさえずりまでもが聞こえてくる。

そんな中。

私は、寝不足だった。

食堂の空いた座席に一人で腰掛けもつちりパンを咀嚼する。

——ダメだ。昨日色々ありすぎた。

ぼーっとした気分で深く溜息をつく。いつきに老けたんじゃないかしら私。

「おっはようハル！ 麗しの姫君！」

沈んだ気分で遠い目をしていた私の視界に、突如として銀色の何かが割り込んできた。

今日も眩しいくらいハイテンションなジェラルドだ。

「……」

「おっと、どうして目を逸らすんだハル？　ちゃんと俺の顔を見ろ」
「いやもう……眩しすぎて……」

薄ら笑いでパンを口に押し込んだまま、落ち込むテンションをどうにかしようと少し背筋を伸ばす。

今日は午前中から訓練なんだし、張り切らなきゃ。

「何かあったのかハル……あ、わかった！　フラれたか！」

ジェラルドがどうだ！　と言いたげな顔で放った台詞は思いのほか心臓に悪い。

「……まさか、凶星？」

いつきに血の気の引いたこちらを見て彼は真顔でそう訊いてくる。

「いや、別にフラれたわけじゃないけど……」

口からはそんな言葉が転がりつつも、脳は昨日の記憶を遡っていた。

『ハルが好きだから』

夕日をバックに王子様からの告白——まるで乙女が憧れるドラマみたい。

——私、それをぶち壊したんだ。

「じゃあなんだ、好きな奴に恋人が——」
「違うつて」

思えば、どうしてディアは私なんかを好きになっただらう。

一国の王子様だし、あまり女の子と喋ったりする機会が無いのかな？

それとも男らしい女子がタイプとか？

考えていた時、聞きなれた歩調の足音が近づいてくるのを察知して私は慌てて俯いた。

「おはようジェラルド」

「おう」

視界の端に映るのはキラキラ輝く金色の髪。勿論ディアだ。いつも通りの穏やかな挨拶にジェラルドも何も感じなかったらしく軽く手を上げて応答。そして。

「おはようハル」

——きた！

ガチガチに固まった首を上げて「お、おはよー」と返す。視線がぴったり合うと向こうは満足げに微笑んだ。

天使かあんたは！

そう突っ込みたくなるような笑顔のまま、ディアは視線を逸らし窓際の席の方まで歩いて行った。後ろ姿まで神々しいな。

「ディアの奴、今日は妙に爽やかだな」

いやもともと爽やかなのに爽やか二割増しくらいだったからねあ

の顔。

ディアはなんであんなしれっとしてられるんだ。私ばかりアタフタしてるじゃん。

「はあ……」

溜息混じりに席を立つとジェラルドは「もう行くのか？」とこちらに視線を寄越した。

「うん、食べ終わったから」

「おうわかった。今日の訓練、怪我しないようにな」

ジェラルドに釘を刺され苦笑いで食堂を出る。

訓練まで、後三十分。

ノックの音にエルガーは顔を上げた。

時刻は午後九時を回り城内の喧騒も静まりかけている。羊皮紙に走らせていたペンを置き、ドアの方を見ると入ってきたのはディアだった。

「やあ」

片手を上げた彼はそのままエルガーの机の向かいにあるソファに腰掛ける。その見慣れない表情にエルガーは眉間の皺を深くした。

「何かあったのか」
「え？」

ディアの顔に浮かぶのは、作り笑い。
問い詰めるように少し体を傾けたエルガーを見た彼は小さく苦笑を零す。

「ハルにね」

少し考えたように自らの指先を絡ませた彼は、ようやく手元から顔を上げた。

「ハルに、フラれた」

「——は？」

ディアの言葉はエルガーの思考を停止させるには十分すぎた。
思い沈黙がその場の空気を支配する。

「好きだって言ったんだ、ハルに。彼女を元気づけようとかじゃなくて、本当に好きだったから。出来ることなら寄り添いたいと思っ
た」

「……」

「ダメだったけどね」

何を言うのが一番良いのかわからない。
そんなことを思い、エルガーは硬直したまま視線だけを逸らす。

「何か言っ
てよ」

「何を言え
ばいいんだよ」

「じゃあ、エル
ガーは、ハルのこと好き？」

「はあ？」

ますます眉間に皺を寄せたエルガーを前にしても、ディアの表情は変わらない。いつも以上に穏やかで、静かすぎる。

「なんで俺があいつを好きになるんだ。正反対だろ、色々と」

くだらないと言いたげにそう返したエルガーは先ほどまで見ていた書類に目を落とす。

ディアは小さく笑って立ち上がった。

「エルガーはなんだかんだ言ってハルと似てるね」

「どこが」

「色々と、だよ」

その笑顔は、もう作られたものではなかった。

それだけ確認したエルガーはまた羊皮紙に視線を戻す。

「邪魔したね。もう戻るよ」

「ああ」

顔を上げず頷いた彼を見て、ディアは微笑みドアノブに手を掛けた。

訓練前日の夜だった。

木刀と木刀がぶつかり合う音に、私の意識はどんどん沈んでいく。

手に伝わる衝撃は大きいけど頭の中は魂が抜けたみたいに何も考えられない。なんとか反射で体が動いてるからいいものの、危ないかしいなあなんて自分でも思ってしまう。

「やめ！」

全体に掛けられた声が誰のものだったか判別もつかないまま腕から力を抜く。

——— なんか、今日めっちゃだるい……

アルカナとかアルカナとかアルカナとかのせいだな多分。

一体どうなるんだろう、これから。

神様を悪い人から守って、本当にそれで日本に帰れるんだろうか。

——— それに、神様やオニキスのいいなりになってるだけっていうのも癪だし！

オニキスのあの憎たらしい笑顔を思い出すだけで腹が立ってきた。私を怒らせてそんなに楽しいかチクショー！

テンションは上がらないけど無性に腹が立ってきた。

「ハル、休憩しとけよ。次は試合だからな」

気づくと周囲の人影はまばらで、騎士団のみんなは井戸の方で水分補給していた。昼間の中庭は蒸し暑い。やっぱり地面が芝生なだけある。

話しかけてきたジェラルドはどうやら私のことを心配してくれてるみたい。

「そうする。ありがと、ジェラルド」

「そう言ってもらえると一番嬉しいぜ。俺は女性の役に立てればそれで」

「はいはい」

苦笑しつつ木刀を置いて井戸の方へ向かう。とにかく試合だけは集中していこう。

これ以上暗い顔したって意味ないし、誰かに心配かけるわけにもいかない。

中庭の角に一つずつ、つまり計四つある井戸は歴史の教科書で見かける江戸時代のものみたいだ。てこの原理を利用して古いバケツみたいなのを紐で持ち上げて水をすくう。

と、バケツの中の水を手ですくったときに上から声が聞こえた。

「ほう、この少年が例の『アルカナ』か」

——は？

聞いたことのない声。

一体誰の——？

顔を上げると、井戸の向こう側——芝生から二段ほど上がった

高さにある廊下に二つの影があるのがわかった。

片方の影は大きい。エルガーとかディアよりも高身長だから百九十センチはあるんじゃないか。がっちりとした筋肉質な体形に、外国人のように深い彫りの顔。髪は燃える炎みたいな緋色。

目の色は赤銅色に近いけど、なんとなくそれが濁って見える。

「おっと、『お嬢さん』の間違いだったか」

口元だけを三日月型に歪めて笑ったその表情に、初対面なのに苛つときた。

——誰コイツ。

目の前に立ちふさがる体躯のいい男から視線を外して、その後ろにいるもう一つの影に目を向ける。

まるで幽霊のようにそこに佇んでいるのは、金がかつた茶髪の少年だった。

表情も一切の感情が読みとれないくらいまつさらで、何を考えているのか全然わからない。歳は私と同じくらいなのに——って、あれ？

彼、確かこの間テラスにいた……？

「確かに不気味な瞳だな」

思考に突如割って入ってきた男の声は、あまりに失礼な物言いだつた。

「はあ？」

「どうやら威勢だけはいいようだが、貴様ごときに神のおもりが務まるのか？」

なにこの人。

びっくりするほどうざい！

「大人なら言いたいことはつきり言えいいじゃないですか」

「餓鬼がなめたことをぬかすな」

「その餓鬼をからかうなんて随分お暇なんですねー。昼間から御苦労さまですことー」

ロズの言葉遣いを真似て言うと、自分でもびっくりするほど皮肉な受け答えになった。ざまみろ、これが現代女子高生の力だ！

ふ、と男の目が細められる。
その時。

「何の用だヴィオン」

いきなり目の前に誰かが割り込んできた。風でマントが舞い上がり、視界が塞がれる。

黒髪短髪にこの身長ってことはまさか。

「エ、エルガー？」

どうしてここでエルガーが出てくるんだろう。
びっくりしていると、ヴィオンと呼ばれた男はフンと鼻を鳴らした。

「これはこれは、団長殿ではございませんか」

「二番隊は警備のはずだ。何故ここにいる」

「アルカナを務める娘がいると聞いたからどんな者かと思いまして少々様子を窺いに参ったのですが、ね」

まるで値踏みするような視線を寄越され、私は背中を虫が這ってるんじゃないかってくらいの不気味さを感じた。

なんか、気持ち悪い。

「恐い番犬もいるようだし、噛まれないうちに今日はお暇しよう」

口角を上げて笑ったヴィオンは踵を返して廊下を歩いて行ってしまった。後ろにはあの少年もついていく。

「……誰アレ」

「二番隊の副隊長、ヴィオン・フォントノアだ」

二番隊の人ってことはディアの部下か。

「嫌なヤツ！」

どうせ最後に言ってた「番犬」って言うのもエルガーのことだろう。

未だ見えるヴィオンの背中に、私は眉間に皺を刻んで悪態をついた。

「なんか絶対仲良くなれそうにないわ今の人！ 初対面から失礼千万だったの」

「お前もなかなか負けてなかったけどな」

その一言にむっとしてエルガーの方を見上げると、彼の目は未だ

にヴィオンの背中を追っていた。

「あいつのように、これからはお前を『アルカナ』だと見る者も多くなる」

視線は外さずに、エルガーは言い放った。

わかってる。いつまでも気持ちだけ取り残されている場合じゃないんだ。

周りから見れば私はもう既に「神様を救う人間」なんだから。

——重いなあ、この役職……！

「用心しておけ」

不意にかけられた言葉と、いつも以上に真剣そうなその横顔に何故か少し胸の奥がざわついた。

湿気の混じった風が、前髪を揺らした。

06 揺らぐ（後書き）

久々の更新です
遅れてすいません

07 決意

「ヴィオン副隊長ですか？」

ドーナツで頬を膨らませたロズは、そう言い首を傾げた。

訓練終了後に晩ごはんとお風呂を済ませた私は、誰でもいいからとにかく話がしたくてルーとロズの部屋を訪れている。相変わらず服は騎士団の制服だけだね。

案の定この二人の部屋には夜食が常備されていたわけで、それを頬張りながらのトークになっていた。

「そうその人！」

「あまり良い噂は聞きませんわよね？」

「そうですね」

ティーカップでお茶を淹れているルーも深緑の瞳を伏せてそう答える。

やっぱり訓練中に会ったあのヴィオンとかいう男はあんまり人気のある方では無いらしい。ソリも合わないわけだ。

「妾を作ってはポイ作ってはポイですわ」

「気性が荒いので騎士団の団長や他の隊の隊長も苦勞なさっているみたいですよ」

ってことは直属の上司のディアは相当大変なんだろうな。
王子なのに気苦勞絶えなそうだし。

「そういえばハル様、昨日ディア様が探してらっしゃいましたよ」
「うえ！？ あ、いや、ちゃんと落ち合えたよ」

ルーの口から出た名前に思わず過剰反応してしまう。そういえばまだ昨日の話なんだあれ……！

話のきっかけを作ったルー本人は気付いてなさそうだけど、その横からの視線が痛いのは気のせいかな？ 硬くなった首を回転させて視線のほうを見ると、赤い瞳が二つ。

こちらの様子を見たロズが不敵に笑った。

「ハル様ー？ どうなさったんですのー？」

「いや、別にどうもしないけど……」

目を逸らしたのに意味深な笑顔を向けられ私は一人冷や汗を流す。多分気付いてる。ってか絶対気付いてる。ロズは恋愛事情とかには敏い子だ。

「そういえばさ、ディアって騎士団に所属してるけど王子の方の仕事は大丈夫なのかな？」

なんとか話しの流れを変えようと絞り出した議題に二人は声を重ねて「ええ」と相槌を打った。

「ディア様はこの国の第四王子ですもの。仕事はほとんど第一王子のロイ様が、第二王子のクロード様がこなしますわ」

「第四王子？」

だいよんおうじ、という漢字が一瞬変換できなかった。

「……お兄ちゃんが四人!?」
「三人です」

冷静に突っ込まれ、私は一人もう一度数を数え直す。
二人兄弟で兄と弟が王位継承を争って云々、みたいな想像をして
いた自分が恥ずかしい。

「それで、ディアの兄弟って全部で何人いるの？」
「王子が五人、王女が三人で八人兄妹ですわね」
「随分多いんだね……」

大所帯の中で育ったのか。確かにディアはお兄ちゃんも弟も勤ま
りそんな感じだ。

そう思って二人の方を見、ん？ と首を傾げる。

「そういえば二人共、家族は？」
「私たちは田舎から稼ぎに来てるんです。実家はここから遠いこ
ろにあります」

—— 出稼ぎってやつかあ、若いのに二人とも苦勞して…… って、
そういえば！

私二人の歳も何も知らない！
今更ながらルーとロズの歳やら家族構成やらを全然知らないこと
に気がついた。それだけじゃない、好き嫌いは何とかもつと話題を
膨らませるチャンスは今までにあつたはずなのに！

「ねえ、今いくつ？」

なんてさすがに間抜けすぎだし。

どうやって年齢を聞きだそうか迷っていると、ロズが「そういえば、ハル様」と声をかけてきた。

「今年おいくつになりますの？」

なんとというグットタイミング！

興味津津と言いたげな眼差しでこちらを見てくるルーは少し背は小さいものの大人っぽいし、ロズだって華ある女子だし。

あくまで予想だけど、二人は私と同じ年か一つ年上だな！

「この間、十七歳になったばかりだよ」

「そうですの！　じゃあ私たちにとっては――」

少し間が開いた。

「お姉さま（・・・）ですわね！」

「アルカナ、アルカナ……」

低い声はうわ言のように何度もそれを呟いた。

それ以外何も考えられないとでも言う恋のような、強い憎しみ。

「あれを使えば、あの女を使えば……」

今宵は新月。月が無く城内には無数の灯火が置かれている。その

明りにすら照らされない室内で、蒼い瞳だけが煌々と輝いた。

「……それ以上魔術を使われては……」

「平気だ。お前は口を出すな」

呟かれた言葉に、牽制をかけるようにそう重なる。

「もうすぐ。もうすぐだ。あと少しで奴を——」

月下に潜む影が妖しく揺らめいた。

ショック。

超ショック。

今まで友人として仲良くやってきたルーとロズ。二人ともちつちやくて可愛くてでも色気はすごい。だからてつきり——年上だと思っていたのに！

「私は来月で十七になりますわ」とロズ。

「まだ十五です」とルー。

お察しの通り、私が一番年上だった。

結局自分の部屋に帰ってきてベッドに寝転んでやることもなくゴロゴロしていたわけだけど。

こういう一人きりの時間は結構大切だ。まずどうやってたら女の色

気が上がるのか——じゃなくてアルカナのことをしつかり考えなきゃ。

まず、アルカナの役目をまっとうしたところで必ず日本に帰れるとは思っていない。

それどころか恐らく帰れない。私は『呼ばれた』だけのわけだから。

それに例の神様を殺そうとするくらい強い人に勝てるとも思わない。

その前に相手の情報皆無だし。

だからって何もしないわけにもいかない。

じゃあ別の視点から考えてみよう。

もし——もしもこの世界が滅びるなんてことになったら皆どうなる？

それを想像しただけで目の前が真っ暗になる。心が締め付けられる、なんて生易しいものじゃなかった。頭がガンガンした。寝転んでいてもわかるほどに、体が重くなる。

——アルカナと向き合うには、色々な物が足りない気がする。

それは私自身の勇気であつたり、この世界の知識であつたりするのだけ。

丁度その時コンコン、とドアがノックされた。

陰鬱な気分から急に現実に取り戻され、私はベッドから上半身を起こした。時刻はすでに九時を過ぎていた。

ブーツに足をつっ込んで立ち上がりドアの前に行くとそつと音をたてないようにそれを開ける。

そこには誰もいなかった。

ただ蛍みたいな淡い光が一つ、迷ったみたいにフワフワ浮いている。

本物の蛍を見たこと無いからよくわからないけど、こんな風に綺麗なのかな。

「迷ったのかな？」

でも本物の蛍には見えない。そのまんまの光って感じた。

なんとなく捕まえてみようと思って指を伸ばしそれに触れた瞬間、頭に声が流れ込んできた。

『ハル、聞こえるか？』

「!？」

聞こえてきたのは紛れもないエルガーの声だ。

「エ、エルガー？ いつからこんなピュアな妖精に……!？」

『馬鹿かお前は。とりあえず今から俺の部屋に來い。預言書について話がある』

「え、話って？」

『長くなる。いいからさっさと來い』

エルガーの声はそれだけ言ってプツンと途切れた。光はまた一度フワリと上昇したかと思うと、まるでヤカンの中のお湯が沸騰したような「ピ——ッ！」という甲高い音をたてて廊下の先まで飛んでいく。

「……なんだあれ」

まあいい。部屋で色々考え込むより人と喋っていた方が気が紛れる。

今夜は少し蒸し暑いな、と思いつつ部屋のドアを閉めて廊下を歩く。外が妙に暗いのは新月だからか。

少し不気味な夜だと感じた。

「エルガー、来たよー」

重い扉を開けると、部屋にいたのはエルガー一人だった。いつものように執務机に向かって何やら忙しそうにペンを動かしている。

「入れ」

「失礼しまーす」

部屋に踏み込んでソファの方を見ても誰もいない。

よかった、今はとてもディアと顔を合わせられる状態じゃないし。

「で、どうしたの？ 預言書のことか話があるって」

執務機の前に立った私は落ち着かない気分でエルガーの方を見た。

「騎士団で預言書の探索に行く地域が決定した」

「あ、そうなの？ 次はどこ？」

まだよくは知らない外の世界に興味もあるし、サンストーンは景色が綺麗なところだった。

今回もそんな風に綺麗なところに行けたらいいな、と思いつつエルガーの表情を窺うと何やら難しそうな顔。

「お前には、シュヴァイツ城で待機してもらう」

——は？

声を出すのも忘れて、私は立ちつくした。

何それ、ということ？ まさか——

「私が、アルカナだから……？」

「今日は妙に察しがいいな」

ペンを置いたエルガーは腕を組むとやっと私と目を合わせる。

「もしお前に死なれでもしたら、この世界は終わりだ。少しでもその可能性は小さくしておいた方がいい」

「だから、私にはついてくるなって言うの？」

アルカナだから。

私がこの世界を救う人間だから、もう騎士団の一人として役目も貰えないって。

——ふざけんじやないって話だっつの！

「なんで！ そんなの変でしょ！？ 私はアルカナの前に騎士団の一員だし、預言書の探索にもついてくから、絶対！」

「それでお前に何かあったら終わりだ」

「だけど——」

——決めなきゃ、今ここで。

アルカナと向き合うか、このまま逃げ続けるのかを。

決めるんだ。

私は今まで、この世界の何を見てきた？

この世界で何と出会った？

本当に些細で、だけど私の人生を大きく変えてしまうようなこの出来ごとの中。

驚いて迷っていた私の背中を、この世界の人たちが押してくれたんじゃないか。

——この世界、なんて大仰なことは言わない。エルガーとかディアとかルーとかロズとか、そんな周りの人たちだけでも構わない。その人たちの平和だけでも守れたら——

「アルカナ（……）の（・）私が（・）いなきゃ（……）、

預言書は（・）見つけれない（・・・・・・・・）！

咄嗟に口走った言葉に、今度はエルガーが啞然とする番だった。

「だってそうでしょ？ サンストーンの時だって、私が預言書見つけたし！」

「アルカナがいなくても今まで預言書は見つかってる」

「でも絶対私がいた方が効率が良い！」

ぎゅっと拳を握りしめ、必死の交渉を試みる。

「第一、お前はまだアルカナとしての決心がついてないだろ」

痛いところをつかれた。

だけど、もう決めたはずだ。

一度決めたことは、絶対に曲げない！

「私はアルカナとしての役目を全うする。そう決めた」

そうだ。向き合え、ちゃんと。

いつまでも逃げてはいられない。

「迷っていたんじゃないのか」

エルガーは優柔不断な私にとくに気付いていたらしい。眉間に皺を刻み、こっちを見てくる。

「今決めた！」

「偉そうに言うな」

腰に手をやってそう言った私を前に、エルガーは深い溜息をつく。

「だがそれなら尚更連れて行くことは出来ない」

「なーに言ってるの！ 騎士としては四分の一人前以下かもしれないけど、アルカナを預言書探索に混ぜて損は無いんじゃない？」

決めたんならこっちの勝ちだ。

これから先にどんな敵が待ち受けてて、どんな光景を見るのかはわからない。

もしかしたら誰かの命を奪うかもしれないし、誰かに命を奪われるかもしれない。

それでも、恐怖に捕まっていたら、前には進めないんだ。

「……」

「どう？ 私と一緒に行っていいでしょ？」

困ったようなエルガーの表情に、私は笑顔をもらす。

どんな運命でも、受け入れるんだ。

逃げずに正面からぶつかればいい。今は、それだけで十分だ。

今だけは、それで。

07 決意（後書き）

主人公、やっと優柔不断から卒業しました。
長かった……（泣）

08 目的地まで

『次の目的地はアマルテアだ。二週間後から二日かけて南大陸までドラゴンで渡り、砂漠で四日間の探索になる』

昨晚のエルガーの言葉を思い出しながら、私は廊下を歩いていった。今日の午前中は暇なので旧図書室に行ってオニクスとしっかり話をしようと思う。

——南大陸のアマルテア、かあ。

砂漠だって言うし昼夜での寒暖差は相当なものだろう。なにかあったかそんな服持っていないきゃ。

それに今日の訓練は特別演習だって言ってた。集合場所はいつも通り中庭だけど、そこからどこかに移動するらしい。

「一体何やるのかな……」

なんとなく嫌な予感がして歩きながらも溜息をつく。嫌な予感って大抵当たっちゃうんだよね、特にここに来てからは。

そんな風に考え込んでいる間に、旧図書室に到着。形だけのノックをして、縦長の重厚な扉を向こう側に開くと明りが洩れている方向から話し声が聞こえた。

「おお、来たようじゃのう」

エルナイトさんのしわがれた声がそう言つのと、本棚の角から私
が顔を出したのはほぼ同時だった。

「お久しぶりですエルナイトさん」

「ふおっふおっふお」

顔をシワシワにして笑う謎の老人エルナイトさん。その隣には彼
と今まで一緒に話していたらしい、見たことの無い青年が一人。

騎士団の制服でもない質素なカットソー姿に、どこか日本の面影
を感じて感動する。

水色の髪と瞳をした色白のその青年はにつこり笑うと「アルカナ、
久しぶりー」と片手を上げて挨拶してきた。

——…いや、誰!?

見覚えは無いはずだ。ましてやこんな親しげに挨拶してくる男の
人なんて……

「……まさか……」

「あれ、今更気付いたの？ もう、鈍感だなあ」

あっはっは、と笑うその顔が何処かで見たような気がして無意識
にも口元が引きつる。

「オニクス……!」

「大正解!」

いつもと変わらない調子に腹を立てた私は彼に近づいていくと、本棚に寄りかかっているオニキスの水色の髪から出ている耳を強く掴んだ。エルナイトさんはさっきから一連の行動を微笑ましそうに見ている。

「大正解じゃないでしょッ！」

「痛い痛い！ 掴まなくても聞いてるって！」

「アルカナって呼ぶなって何度言ったらわかるわけ！？」

「ごめんごめん！」

慌てた様子のオニキスを解放すると、彼は痛々しい表情で引っぱられた方の耳を押さえた。

「なんでいきなり大人になってるの」

「なんでって、もうほとんど魔力が戻ったし色々な姿になれるようになったからさ」

とやけに偉そうな口ぶりで語られたものだから、こっちも思わず胸を張る。

「で、突然なんだけどねオニキス、私考えた」

「本当に突然だね……」

珍しく焦り顔のオニキスの身長は案外低い。歳は大体大学生くらいって感じで、なんだか街中にいる普通のお兄ちゃんみたいだ。

その前で仁王立ちになった私。

「私は、ウォーターフォードにいる限りアルカナの役目を貫くって決めた」

「…… やつと決断してくれたんだ？」

なんとなく皮肉に聞こえたけど、そこはさらっと流しておこう。

「一体どういう心境の変化？」

「……大きい世界全部を守れなんて言われても困るけど、せめて身のまわりの人が平和に暮らせればいいなって思った。それだけ」

小学校の時に学校で戦争のビデオを観た。

歴史の中で起こったそれは、凄惨で酷く目に焼きついた。所詮は画面の向こう側、だけど確かに人が経験した恐怖は何も知らない私の心に刻みつけられる。

「アルカナがないせいでウォーターフォードの人たちが困ったり傷ついたりするのは問題だしね」

あくまでテレビの中の話、だった。

だけどそれが本当に起こるかもしれない。そうになったら、そして自分がそれを止める可能性を持っているなら尚更。

その役目を遂行すべきじゃないか。

「なんとなく——」

「え？」

オニキスは何かを言いかけて、もう一度唇を結んだ。

「なんでもないよ」

爽やかな笑顔で言われたら何も聞かざるを得ないけど、どこか納

得のいかない感じがしてもう一度オニキスの方を見る。

「そついえばそろそろ昼食が始まるのう」

「え、もうそんな時間ですか!？」

すっかり忘れていたエルナイトさんの台詞に、私は我に返った。

「じゃあ訓練があるんでまた後日!」

危ない、忘れるところだった。早くご飯食べなきゃ!

ブーツの踵を勢いよく鳴らした私は慌てて図書室のドアのところまで駆けて行った。

「お邪魔しましたー!」

部屋の外に出て、腕時計もないのに思わず左腕を見る。

——今度エルガーがディアに時計売ってるお店訊いてみよう!

このままだといつか絶対遅刻するわ!

そう確信して、食堂へと急いだ。

——
というわけで午後。

最初にいた中庭から城外に出て芝生だらけの道をしばらく、石造りの家のようなところの前まで連れられた騎士団第一隊。

私は一人、その石でできた大きな建物を見上げた。

「……なに、これ……」

周りの隊士達は慣れきった様子で大きく口を開けた入り口からその建物の中に進んでいくけれど、未知の領域にしか感じられない私にとってはあまり歩が進まない。

なんか中から変な鳴き声みたいの聞こえるし！

「おう、どうしたんだよハル」

背後からいきなり背中を叩かれ、私はびっくりして肩を跳ね上がらせた。

振り返ってみたらそこにいたのは今日も眩しいジェラルド。

「びっくりさせないでよジェラルド……ねえ、ここ何の建物？」

「ああ、ハルは来たこと無いんだっけ？ ドラゴンの飼育舎だよ」

「飼育舎あ！？」

なるほど、どうりで大きいわけだ。

中に入ると大きさの違う檻がいくつも置いてあるのが見える。その中には色鮮やかなドラゴンが一匹ずつ。昼寝をしていたり餌を食べていたり、それぞれ自由にしている。

「まあ隊士には一人一頭慣れたドラゴンがいるから、今日はそれで訓練するわけなんだけど」

「今日の訓練ってドラゴンなの！？」

確かに一人一人別のドラゴンを檻から出している。みんな慣れているのか恐がったり暴れたりとかが全然無い。

「アマルテアまで行くのにはドラゴンを使うから、そろそろみんな鈍った勘も取り戻さなきゃいけないし？ ハルも自分で操縦できるようにならないと」

でも、でもそれって。

自分で空飛べっていうことでしょ——ッ！？

「無理。絶対無理」

「どうしてだよ、ドラゴンかわいいって言ってたじゃん」

「違う違う！ 私高所恐怖症なの！」

「こーしょきょーふしょー？」

なんだそれ、と言った様子で耳をかつぽじったジェラルド。

もしかしてこの世界には高所恐怖症っていう概念が存在しないのか！？

私は慌てて身振り手振りで一生懸命高所恐怖症を説明した。

「高いところが恐いの！ すごく！」

結果として全然説明にはならなかった。

大して興味なさそうなジェラルドは、

「へー、そうなのか。まあいいや、とにかく一頭選べよ」

「よくないよくない！」

受け流し気味で私の腕を掴むとずりずり飼育舎の奥の方まで連れて行く。手前の方はもう空の檻ばかりだ。

「今日中に飛べるとは思ってないから。まずはドラゴンを選んで意

思疎通が先」

「ジェラルドこの間サンストーンに行く時は後ろに乗っけてくれたじゃん——ッ！」

ようやく手を離されたかと思うと今度はドラゴンの入っている檻に向き合わされる。

「あの時は特別だって。城のドラゴンは全部魔物討伐でいなかったから、仕方なく城外で借りたんだ。さすがに当日いきなり乗れって言っても無理だったろうし」

うう、過去の自分が恨めしい。

そして目の前の檻を見ると青色の鱗で覆われた、いかにもなドラゴンが一頭こちらを見つめている。体長は十メートルはありそうだ。

「……」

「こいつなんてどうだ？」

するとそのドラゴンは、ふーっと息を吐きだしてこちらに牙を剥いた。低い唸り声が腹の底まで響く。

ひゅっと風を切るような音がしたかと思うと、目の前にある鉄の檻に鉤爪がぶつかって火花を上げた。

「……まあ、ちょっと気性は荒いけど？ 他に比べてガタイもいいし」

「いやこれはさすがに可愛いとか言えないわ……」

本能的に背中を冷や汗が伝った。

とりあえず近くの檻を見ていくけどなんだかこっちを睨みつけてくるドラゴンしかないなさそうだ。

「なんか乗る前に引き裂かれちゃいそうなドラゴン達だね……」
「そんなことないって。俺だって結構気性の荒いのが相手だぜ？
おかげで操縦が上達したよ」

そう語るジェラルドの目が遠いのは気のせいか。

と、ある檻が目についた。

その中にいるのは他に比べて少し小柄なドラゴン。黒い体に赤い線が入った体長三メートルほどのそのドラゴンはたった一頭で檻の中で暴れ回っている。

「……あれは何やってるの？」

「ああ、あれはまだ子供のドラゴンだ。人間に換算すると十五、六つてところか」

その檻に近付いてよくみると、ドラゴンはゴロゴロ床を転がったり頭振ったり明らかに暇を持て余してる感じだ。

「……おいハル、まさかとは思うけど……」

「私、あの子にしようかな……なんか一番かわいいし」

人間に換算した時の年齢も同じくらいだし、どこことなく親近感が湧いてくる。

「だけど調教しきれてないから……下手したらあの尻尾に当たったりとか、じゃられて死ぬかもしれないぞ」

ジェラルドの言葉は最早右耳から左耳に流れていった。
するとドラゴンが視線に気づいたのか、動きを止めてこちらを見

てくる。

目が合った。

「超カワイイ……！」

「やっぱやめとけハル！ 躑されてないヤツは危ないんだって！」

肩を引かれそうわれた瞬間、ピンとひらめいた。
ジェラルドの方を向き「だったら」と口を開く。

「私が躑ける！」

大きい飼育舎に響き渡るくらいには大声だった。

でもジェラルドは「何言ってんだコイツ」みたいな目でみってくるばかり。返答は無い。

「やめとけ、こいつは檻から出たこと無いんだ。外から運ばれてきたらしいけど、景色を見ただけで飛べるかどうかもわからない」
「走るの速い？」

周囲をきよろきよろ見渡して出入口を確認。

あとあのドラゴンを誘導する目印なんかが無いかと思って視線を巡らしてみると、近くに約一メートル四方の木箱があった。

白いペンキで塗られたそれからは、役立ちそうな匂いがプンプン！

「なあハル聞いているか？」

白い箱の所まで歩き、中を覗き込む。ジェラルドはさっきから私を説得するのに必死なのか後ろについてきた。

「走るのはあんまり速くないけど、本当に危険なんだって。ガチで」
「走るの速くないなら大丈夫大丈夫。とりあえずここから出てすぐの芝生のところ行けばいいんでしょ？」

その中にぎっしり詰まっていたのは紐でくくられた巨大な生肉。何のお肉かわからないけど結構新鮮そうだ。ドラゴンの餌だろう。

「ねえ、これって檻の中に投げるの？」

その中の一つを取ると、余った紐が地面に着いた。これを使って振り回して投げたりするのかな。

「そうだけど、おいおい、何する気だハル」

「ジェラルド、合図したら檻開けてね！ そうしたら私、後は頑張るから！」

檻の前まで餌を持っていくと、小さなドラゴンは物欲しそうな顔でこちらを見た。目が「餌欲しい！」と訴えている。

「ちょっと待てハル」

「大丈夫！ 前に犬躰けたことあるし！」

任せた！ とジェラルドの肩を叩くと彼は「どうなっても知らないからな……」とようやく折れてくれた。そんな彼に剣を押しつけて踵を鳴らす。

ワイシャツの袖をまくりブーツが脱げないか確認して、肉のぶら下がった紐をベルトに巻きつけた。これでもかかってくらいぎゅっと固定して、振り回されないようにする。

——頼むからズボンだけは脱げませんように。

そうして走る準備を整えドラゴンの方を見ると、相変わらずキラキラした目でこっちを見てくる。入口もちゃんと開いてるし、外では何頭かのドラゴンが未だに飛ぶ準備をしていた。

「ジェラルド、いくよー、3」

鉄格子の扉を掴んだジェラルドは頷いた。なんかいつもより浮かない顔な気がする。

「2、1！」

ガチャン！ と勢いよく扉が開きドラゴンがゆっくりと檻から出てきた。だけど視線はしっかり私の腰にある肉を見ている。

背後のドラゴンと同時に、一歩前に踏み出した。

探索開始二週間前だった。

09 ドラゴン

「ドラゴンの操縦訓練か……そろそろ第二隊も予定組んでおう」

「そっちは今度どこに探索だ？」

「ワルキューレ」

「北大陸のか」

ドラゴンの飼育舎に向かって歩いていった二つの人影。片方は騎士団団長のエルガー、もう片方は騎士団第二隊の隊長であるディアだった。

空には既に何頭ものドラゴンが飛びかっている。大小様々のそれらが太陽の光に照らされていた。

「今日はよく晴れたねー」

「そういえば、ジェラルドにあいつのことを任せたんだが」

彼の言うあいつとはハルのことだ。芝生の上で待機中のドラゴンの中にも、それらしい人影は見当たらない。まだドラゴンを選んでいるであろうジェラルドとハルの様子を見に飼育舎に向かっていた二人は、地面から伝わってくる感覚に足を止めた。

「揺れてる……？」

周囲の隊員もそれに気付いたのか顔を上げる。飼育舎の中で何か異常があったのかと二人が歩くスピードを速めたその時。

「ひゃあああああ——っっ！」

その場にいた者の視界に映りこんだのは「走る何か」と「それを追う小型のドラゴン」だった。地響きはどつやらそのドラゴンの足音らしい。

しかしそれよりも、二人にとってはドラゴンの更に前方を走る人間——ハルに視線を奪われる。

「……あいつは何をやってるんだ？」

エルガーの呆れた声に、ディアもゆっくり頷いた。

勢いよく駆けだした私の背後を、ドラゴンちゃんはしっかりついて来た。腰元に揺れるお肉目がけて一直線。

だけど今は捕まる前にこの子を外に出さなきゃ！

「ひゃあああああ——っっ！」

だけど真後ろに自分より大きい何かが迫ってるって予想以上に恐い。

今までの人生で経験したことないくらいのスピードで走ってるんだけど……ドラゴンとは足の長さが違うもん！

ようやく外に走り出た。眩しい太陽に目を細める間もない。痛々しい視線がこっちに突き刺さるのを感じつつ、懸命に足を動かす。

—— やった、けど、こつから先考えてない！

もつとちゃんと作戦を立てて実行するんだった、と本気で後悔した時背後でピュッ、という風を切るような軽い音が耳に届いた。ふと、後ろで結んでいる髪の毛に違和感。

「え？」

寒気を感じて後ろを振り返るとドラゴンが前足を振りかぶったところだった。

ど、どんだけ肉好きなんだよ！

そんな心の中のつつこみとは裏腹に、口からは「いぎゃ——
——！」という盛大な悲鳴。そして足がもつれた。

「げっ」

女子高生からぬ低音が喉から飛び出し右肩からドスン！ と芝生にすっ転ぶ。そして真横にドラゴンの重い前足が下ろされた瞬間に正気に返った。

—— まずい、これはまずい。踏まれる。踏まれたら痛いと言っ
てらんない。死ぬ。

ドラゴンの腹の下だ、今！

せっかく探索の同行許可を貰えたのに怪我で待機とかなったら元
も子もない。

だけどこそのまま踏みつぶされるわけにもいかないし、ええいなんでもいいからとにかくこの下から出なきゃ！

腹ばいで伏せたまま、開いた右手の方向に匍匐前進しようとする。しかし突如またドラゴンが一步踏み出し、不幸なことに行く手に巨大な足が下ろされた。

ドラゴンはどうやら目の前から私がいなくなったと思ったらしい。呆然と突っ立ったままきよるきよる首を動かしているようだ。

やがてドラゴンは不思議がりながら前に進んで行った。なんとか踏まれずに済んだ私は彼（彼女？）が通り過ぎてやっと体を起こすことができて、慌てて服についた芝生を払う。

「ハル！」

声のした方を見ると飼育舎の前にディアとエルガーが立っていた。今までの全部見られてたんだ。

「あつ、別に大丈夫だよー！」

「そうじゃなくて、前っ！」

ディアに向かって叫んだはずが、なんだか死亡フラグを予感させる答えが返ってきた。

ん？　　なんだか背後に本能的な危険を感じるぞ？

振り向いたら、涎を垂らしたドラゴンちゃんと視線が合った。

グワアア——ッ！　と、ちょっと高めの咆哮を上げたドラゴンはいつきにこちらに向かって走って来る。なんだか妙に喜々と

した様子で。

腰にぶら下げてる肉どころか、私まで食べる気か！

口を開けてこちらに駆け寄ってくる姿が、犬とかぶった。

「待てっ！」

咄嗟に口をついて出た言葉。同時にドラゴンの瞳を真っ向から見据えると、相手の動きが止まる。

「待・て」

もう一度反復すると、今度は身じろぎもなくなった。

腰に手をやって剣を抜き肉と腰を繋ぎとめる紐に当てる。ゆっくり肉を外すと目の前の芝生に置くけど、目線だけはずらさない。

「待て」

そろそろ心臓に悪い。でもあと三秒！

「よし！」

その言葉に待ってましたとばかりにドラゴンが肉にダイビングする。まさか最初からこんなすんなり言う事を聞くとは思わなかった。

——犬より全然ラクだ……！

肩の力を抜いた私はその場に腰を下ろした。ちょーきょーとかなんとかってジェラルドが言っていたけど、それと関係があるんだろ

う。

それになんだか周りの視線が痛い気がする。ドラゴンちゃんを連れて早々に引っ込んだ方が良さそう。

「おおハル、無事だったか！」

背後から駆け寄ってきたジェラルドに片手を上げて応答する。

「どうやら作戦は成功したみたいだけどよ……」

「うん。なんとか餌やりだけは出来ただけど……この後どうするのか考えるの忘れてた」

餌を噛み砕くドラゴンを前に冷や汗。そういえばさつき私のも丸ごと餌みたいに認識していたような。大丈夫なのか、これ。

「っていうかさっきの、躰なのかな……？」

不安な声を上げた私にジェラルドは白い歯を見せて笑顔になった。さすが多くの女性を虜にするだけあって、色気に満ち溢れたその笑い顔にはとても敵いそうにない。

「大丈夫だつて！　なんだかよくわからないけど、こいつもお前の言うことには従ったみたいだし専属のドラゴン決定でいいだろ。名前決めるよ、名前」

「な、名前え？」

素っ頓狂な声を出した私に、餌を食べていたドラゴンがこちらを見てくる。普通サイズより小柄だし上目遣いだし、余計に愛嬌があった。

本人を前にすると、ドラゴンなんだしカッコいい名前をつけなきゃ！ って気分になる。

「え……ゴ、ゴンザブロウとか？」

「お前のネーミングセンスはどうかしてるな」

突然割り込んできたのはエルガーの声だ。こっちに近づいてくる影があると思ったら、彼とディアだったらしい。

「ハル、ちなみにそのドラゴンはメスだよ」

ディアの困った顔での宣告に、衝撃を受けた。

——ドラゴンってメスとかオスとかあんの！？

いや当たり前の話だろうけどさ。単細胞の生き物にも見えないし。

「じゃあ、花子は？」

「もつと華やかな名前無いのか？」

「シルヴィアとかどうだ？ 華やかだろ？」

ジェラルドの名前候補に残る二人は納得したような表情。だけどころなったら負けてはいられない！ 私の女の中の闘争心が勢いよく燃え上がった。

「裕子！」

「ドラゴンにしては微妙」

「サチエ！」

「なんか、ねえ……？」

「あかり！」

「もっとドラゴン相手の名前を考えろ」

エルガーに叱咤され、私は記憶を巡らせた。もうちょっとカタカナっぽくかつファンタジーちっくな名前。

「シ、シエラちゃん、とか？」

ダメ元で出した自分の中でのファンタジーな名前に、目の前の三人は目配せしあう。

「それが一番マシだな」

「いいと思うよ」

「俺のシルヴィアが……」

なんだか一瞬三人で合図したように見えたんですけど。

胡散臭そうだと疑った目でなんとなくエルガーを見るといつもの眉間に皺を寄せた表情（心の中での呼び名は魔王顔）でこっちを見返してくる。相変わらず恐い。

「じゃあ次はこいつに乗って空を飛ぶんだ。後はそうだな、感覚？」

「曖昧すぎるでしょ……」

ジェラルドのやや投げがちな言葉に私は苦々しい顔を作ってしまった。

と、いきなり足元に何かが押しつけられ疑問に思っただけを見たと。

「早速なつかれてるね」

ドラゴンことシエラちゃんが鼻頭を足に押しつけていた。いい匂

いしないよ別に。

「これで問題無いな。さ、ハル、乗って乗って！」

ジェラルドに背中を押されシエラの背中の方に回った私は冷や汗がどつと吹き出すのを感じた。

「ちょ、ちょいちょい待って！　これ鞍みたいな着けないの！？
こつ、馬に乗る時みたいなヤツ！　あれないと絶対お尻痛くなる！
ガチで！」

「大丈夫大丈夫」

ジェラルド（笑顔仕様）に無理やり担がれそうになり、全力でそれを避けて構えをとる。

「絶対乗らないから……！」

そう言った矢先に、ぐらつと視界が揺れて高くなった。

「いやああ——っ！」

「さっきから五月蠅い」

シエラの背中の方こう側から身を乗り出したエルガーが、私の体を子供の「たかいたかい」みたいな感じで持ち上げていた。言つとくけど高校生相手にやることじゃないから！

「絶対飛ばないからね！　嫌だから！　落ちたら死ぬんだからね！
？」

「僕が受け止めるよ」

「何言ってんの腕もげるわ！」

さらっとしたディアの発言にも絶叫を返し血眼で暴れる、ただど残念なことに騎士団団長はびくともしなかった。

シエラの背中を下ろされたかと思うと斜め前にいたディアがいつの間にか操縦するためにドラゴンの首元に結びつけた綱を「はい」と渡してくる。

——いやこれをどうしろって——

ジェラルドがシエラの首根っこを力強く叩いた。
同時に咆哮を上げた彼女がいつきに走り出す。

「えええええ！？」

今のは無いだろ！ 確実に三人これを狙ったでしょ！

心の叫びは風に消え、必死にシエラの首に抱きついていていた私は顔を上げてはっとした。

——壁！

飼育舎の高くそびえる壁が視界いっぱいに広がった。ぶつかる、その前に本能的に手が動き手綱を勢いよく引く。

周囲がどよめいた。

シエラが一息で頑丈そうな翼を広げたかと思うと、一度大きく振る。

「ひっ」

一瞬臓器が浮かび上がるあの感覚が走り、鳥肌が立った。
地面を走るような揺れは無くなり、その代わりに空を切る滑らかな感触と涼しい風が頬に当たる。

壁と水平に飛んだシエラの体は、やがて屋根の上に出た。

「シエラ、シエラッ！ 餌食べたから元気なのはわかるけどもうちょつとスピード！ 速い！」

回らない呂律を駆使してそう訴えかけると、シエラはますますスピードを速めた。ぐんぐん上に向かって上昇する。

「逆——！」

そう言っただけで気づいてくれたのか、シエラはゆっくり安定したように飛び始めた。

周囲にもドラゴンを操って飛ぶ数名の騎士団団員。なんだか妙に安心できる。

空から見るシュヴァイツ城はとても幻想的だった。あまりじっくり見たことがなかったから外装はよく知らなかったけど、乳白色で塗装されたお城は童話の中のものみたい。細身の尖塔がいくつも立って、囚われの姫とかが住んでいそうだ。いつものテラスも見える。

街の方は相変わらず、賑やかそうだ。視力が良いからよく見える。つくづく綺麗に整備された街だな、とか場違いにそんなことを思った。

「あと二週間か……」

二週間も待てるだろうか。

日本に帰りたい。ヨークに会いたい。こんなに学校に行きたいと思ったことは、今までなかった。

早く故郷に。

そう思うのに、目の前の景色から目が離せない。

シエラはまるで私を慰めるように、小さく鳴いた。

10 アマルテア

ドラゴンの訓練が始まって二週間。

アマルテアに旅立つその日が、ついにやって来た。

「お前は どうして そんな格好で来るんだ？」

早朝、ドラゴンの飼育舎の前で集合をかけられていた第一隊の面々。彼らの視線はしつかり私一人に突き刺さっている。

「ナナセとか言ったか、あの女子隊員……」

「なんかこう、あり得ない部分が多々あるよな……」

ひそひそと囁き合う隊員を尻目にエルガーの前に立った私は「えっと……」と頭をかいた。

「砂漠って聞いたから、涼しい格好がいいかなって思って。ほら、ちゃんと騎士団の制服も持ってきてるし」

最初から騒がしかった周囲がますますざわめく。

私が今着ているのは、高校の制服であるセーラー服だ。基本紺と白で赤いスカーフがある一般的な地味なヤツ。荷物は学校のスクールバッグ、ウエストポーチ、ショルダーの三つのみ。

これは私の数少ない服の中で一番暑いところ向きの格好だ。

「お前、そこは空気を呼んで制服で来ようとは思わなかったのか？」
「砂漠って暑いんでしょ？ 風通し良い方が涼しそうだから」

そう答えるとエルガーどころか周りのみんなも「わかってない」といった様子で溜息をついた。

「……では、アマルテアに向けて出発する。ドラゴンの配列は先日言った通りだ。襲撃に備えて四名は最後尾につくように」

——スルーされた！

エルガーのスルースキルには日に日に磨きがかかっている気がする。しかもそれが発動されるのは私の前ばかり。そんなに答えに困るような事を言っているはず無いんだけどなあ……エルガーを見上げたまま「うーん」と首を傾げる。

「では解散、各自ドラゴンを連れて飛行を開始せよ」

エルガーの声でいつきに切り替わった空気。

——若いけど団長、なんだもんなあ。

背筋を伸ばして騎士団の面々と一緒に返事をする。

さて、今からアマルテアに出発だ。

今まで二週間みっちり鍛えられた私とドラゴンのシエラは最終的に息ピッタリ女の子チームになった——と思う。

「シエラ、餌だよー」

朝早いためか、まだ半ば眠たげなシエラの前に大きな肉の塊を放

り込み手招き。

シエラは小さく翼を動かすと、重そうな臉を上げて欠伸をした。

「出ておいで！　これからアマルテアに行くんだから！」

ぴくつと反応した彼女は肉を啜えるとのっそりした動きで檻から出てくる。

「よし良い子良い子」

他の隊員も自分のドラゴンを檻から出して飼育舎から出ていく。シエラは他のドラゴンに比べて体つきが小さく、まだ幼いドラゴンで、今回の探索では体力の面が心配されている。その割にはよく食べよく寝るけど。

と、歩き出した私たちの隣に巨大な赤いドラゴンが顔を出した。顔を出したと言うより首をもたげる感じだ。蛇とかが獲物に対してよくやるアレ。

「うわ、でかつ」

驚いた私をよそに、シエラは歩きながらモシヤモシヤと餌を食べている。

「おうハル、今回も頑張ろうぜ」

そしてその隣から操縦用の綱を持って姿を現したのは、誰かと思えばジェラルドだった。どうやらこのドラゴンの担当は彼らしい。

「おはようジェラルド、その子がジェラルドのドラゴン？」

「ああ、随分でかいだろ」

確かに見上げるほどに大きい。

ドラゴンの目の色は金色で、どこかで見覚えがあるような無いよう
うな――

「おいハル」

丁度飼育舎に出る頃、エルガーに声をかけられた。何だろうと視線を上げた瞬間に黒い物が目の前を覆った。

「いやああああ！？ 何！？」

「外套だ。お前持ってなかっただろ」

パニックに陥った私の顔から、シエラが黒い物体――外套を剥がしてくれた。正確には餌だと思って食べようとしたらしいけど、それが無理だとわかるとすぐに私の手元に吐きだす。

「え、なにこれ、砂漠行くのに暑くない？」

「日光がきついからそれを被っていた方が得策だ。体温が上がりず
に済む」

ああ、テレビとかで見る砂漠でみんなが布を被ってるのはそのせい
だったのか。

納得した私を余所に、ジェラルドが話を切り出してきた。

「ところでハル、そのドレスさ」

「ドレスじゃないって。セーラー服」

「せ、せーらーふく？ それ、風で捲れて下着見えることとか考慮
してないのか」

その質問に一瞬固まってしまった私の代わりに、エルガーが無言のままジェラルドの脳天に鉄拳を振り下ろした。

「いつてえ！」

「そんなことを訊く奴がいるか馬鹿」

「だって気になるだろ？ あんなドレス、じゃないせーらーふく？
なんて見たことないわけだしよ」

頭を押さえたジェラルドは涙目になりながらもエルガーを睨む。
確かに風でぴらつてなったらスカートは終わり。

しかし女子高生たるもの、そんな危険は日常茶飯事。自転車で登校する時、風の強い日、階段、それらに対応するためのものが存在するのは女性のうちほとんどが知っているはずだ。

だけど私はもっと強力な武器を手に使っていた。

「大丈夫、ちゃんとその対応はしてるから。ほら」

スカートの裾を持った私は、そのままそれを上に上げた。

「な、なんで私まで殴られなきゃいけないの……？」

シュヴァイツ城を出てからおおよそ二時間。

ドラゴンに乗って上空を飛行する私たち騎士団第一隊、その先頭

を行くのはエルガー。

鳥が飛ぶのと同じように矢印型でアマルテアに向かっているけど、私はその列の後ろの方だ。今日はしっかり鞍に跨って命綱も装着している。

セーラー服の腰回りにもいつもより頑丈にベルトを巻き、そこに剣が差してある。スクールバッグは二つある持ち手をそれぞれ肩にかけ、まるでちょいワル女子高生。

そして今回は砂漠での探索だしあまり大きい物は持ってくるなと言われてたけど、女子にしては少々省きすぎた。

なんたってスクールバッグの中身は、往復四日分と探索四日分計八日分の着替え。それから歯ブラシとか生活用品がちよつとと、暇つぶしに読むための英語の教科書。ルーから借りた日焼け止めと、ウォーターフォードの通貨。タオル数枚。

——我ながら女子力の無さにはびっくりだ。

勿論それだけ入れればバッグはパンパンだけどショルダーバッグにはその他もろもろの雑貨が詰め込んである。

これだけで荷物が済んじゃうって便利だけど悲しいよね。

ちなみに。

スカートの中には高校の体育で使う学校指定の赤い短パンをしつかり履きこんでいた。ウォーターフォードに來た日も寒くて下にジヤージを着ていたんだ。

スカートをめくって見せた私を前に二人は一瞬硬直した後、エルガーはジェラルドに対してそうしたのと同じくらいの威力で私の

頭に拳を下ろした。

「ねーシエラ？ 私何かまずいことしたのかな？ いくらなんでも殴ることなくない？」

まだ頭がクラクラする。

シエラに問いかけても、彼女はいつも「ガー」とか「ゴギヤー」とか短く相槌を打つだけだ。今日は外の世界に興味津津の様子できよきよると辺りを窺っている。

——初めて見た外の世界って、どんな風を感じるんだろう。

シエラにとって、今日は城外デビューの日だ。

私は生まれて初めて外に出た日なんて覚えてないけど、目に映るものの全てが不思議で周りを見てばかりだったんだろう。人の話なんて聞いている余裕なんて無いくらいに。

「綺麗な景色だねー」

下は見れないけど（オプション高所恐怖症）、正面を見れば遠くに頭を白くした山々が連なっている。空は晴れていて雲一つない。

「私、すごい所に来ちゃったな……」

大きな風が吹いた。

そしてその晩、ようやく砂漠地帯の近くにあるアマルテアに辿りついた。

砂漠の中で一番大きい都市のアマルテアは、商業の中継地点なんだそうで結構賑わっている。白くて四角く建てられた独特の住まいがずらりと並び、その軒下には多くの店が出ていた。

「すごい、こんな大きい街なんだ」

宿についてからすることも無く暇だった私は、一人アマルテアの小路を歩いていった。

騎士団の中にいた時以上に目立ってしまったのでセーラー服から騎士団の制服に着替えて街中に出ている。

今日はルーもロズもないけど、言葉も通じるし何より、

「人生初給料……」

があるからね！

給料の一部を入れた腰元のポーチに手を当て、ふっと一人笑いを零すと

「おっ、そこのお兄ちゃん！ どうだい恋人に花でも！」

近くの出店のおじさんに声をかけられた。

昼間と比べて少し肌寒いのにこの土地の人はみんな熱気ムンムンだな。

おじさんはどうやら花やらアクセサリーやら女性用の飾りを買っているみたいだ。残念ながら私とはあまりご縁が無いけど。

「え、いや、遠慮します」

「そうかい、そりゃ残念だな…… って、アンタ騎士様じゃないか」

驚いた様子のおじさんは頭にターバンを巻いている。教科書で見た異国の人々が確かこんな格好をしていたはずだ。

「騎士様が一体アマルテアに何しに来たんだい？ ああ、あの森を調べに来たのか」

「あの森？」

おじさんの言葉を反復する私に、彼は首を傾げた。

「あれ、違うのかい」

「すいません、『あの森』って、ここ砂漠の近くでしょう？ 森なんて無いんじゃないですか？」

「それがねえ、最近ここらで変な噂があつてな」

おじさん曰く。

なんでも二カ月ほど前から砂漠で奇妙な『森』が目撃されるんだそうだ。

それが現れる時間も日にちも不定期でまるでオアシスのような存在のそれは最初は「神からの贈り物」とあがめられていたらしいけど、その裏側で起こっている事実には段々と気味悪がられていった。

「——人が、消えた？」

「そうさ、初めは砂漠を渡っていた商隊、次は旅人、この街の人間も何人か消えてる。それがあの森に喰われたんじゃないかって言われてるんだよ」

——何それ、こわっ！

明日から砂漠で探索を始める身としては耳を塞ぎたい内容だ。

「青いかすみがかかっているから、この辺りじゃ『青の森』って呼ばれてるのさ」

「『青の森』ですか……」

深刻な声をもらした私に、おじさんは笑って「まあ暗い話はやめにして」と片手で出店の商品を示す。

「どうだい？ アクセサリーでも買って行ったら気になるあの子もすぐオチるぞ？」

「はは……」

おじさんの言葉はともかく、ルーとロズにお土産を買っていくのは名案かもしれない。女の子だし喜んでくれるだろう。

「そうですね……どれか買っていこうかな」

気を取り直して出店に並んでいるネックレスやら指輪を見つめる。色も豊富でキラキラ輝いているそれは、私から見ても綺麗だ。

「じゃあ——」

『青の森』

幻想的で神秘的なその森でこれから起こる奇怪な現象。それが何なのか、私は知るよしも無かった。

10 アマルテア（後書き）

15万HIT到達しました！

これからもこれを励みにして頑張っていきたいと思います。

またここまで長々と読んでくださった皆様に心より感謝です。
ありがとうございます！

11 いざ、砂漠デビュー

私にとって人生初の砂漠デビューは生易しいものではなかった。

「暑いッッ！」

耐えきれなくなった私はそう叫んだ。じりじりと空気だけで肌が焼けていく炎天下の下、頭には勝手に血が上る。

夜が更ける前にアマルテアのドラゴン宿舎に各々のドラゴンを預けてきた騎士団第一隊は別の動物に乗って砂漠を移動中。

その動物と言うのが、十七年間生きてきて見たことの無い——
強いて言うなら大きなダチョウのような二足歩行で首の長い鳥。
暑さに強く、アマルテアでは重宝されている『アークツルス』と
いう名前のその巨大ダチョウは多分地球上には生息していない生き
物で、これに乗ると聞かされたときは心底ビックリしたものだ。

勿論「なにこれ、こんなの乗れない。操縦できない」という旨を
エルガーにちゃんと伝えただけど本人は私の話をちゃんと聞いて
いるのか「別に平気だ」の一点張り。

結果。

「お前の熱気は異常だ。背中が一番暑い」

「いやそんなことないでしょ、私なんだかんだでエルガーの影にな
ってるんだから。日光遮ってるんだよこれでも」

街中で見かけるバイクの二人乗り。あれとは乗り物が全然違うけど、前にエルガー後ろに私のまさにその状態で砂漠を疾走中。

そしてシュヴァイツ城であらかじめ渡されていた黒い外套を頭からかぶって前にいるエルガーの服を両手でがつつり掴んでいる。

更にアマルテアを出てから日が昇り、背中には直射日光がかかって暑いことこの上無い。周囲を走る隊員の顔もげんがりしている。

「それで、なんだっけ？ 今回の探索、変な怪奇現象の……」

「『青の森』」

「それぞれ、そんなのどうやって見つけるの？」

昨晚出店のおじさんから聞かされた「青の森」のことは、既にほとんどの隊員が知っていたらしい。ちょっとだけ疎い数人は何だソレと言いたげな顔をしていたけど。

「青の森は目撃された時間にも位置にも共通点は無かった。地道に探すしかないだろうな」

「うえっ、こんな暑い中!？」

「夜になったら嫌でも冷える」

生粋の冬生まれで暑さに弱い私に対してエルガーは涼しげだ。この魔王め、ちよつとくらい汗かいて暑がっちゃえばいいのに！と後ろから不穏な空気を送ってみる。

「おいジェラルド」

背後を走っていたアークツルスに向かっていきなりエルガーが呼びかけたので驚いた私は肩を跳ね上がらせた。新陳代謝ビームがう

っ
かりバレるところだ。

「どうした？」

見慣れたジェラルドがヒラヒラと私に手を振りつつエルガーにそ
う尋ねる。

「隊を二つに分ける。お前に片方の管理を任せるつもりだ」

「マジかよ、ハルはどっち？ 女の子がいるなら俺はどんな困難に
でも立ち向か「こいつはこっちで担当する」

二人の会話に私は口元が自然に引きつるのを感じた。

「仕方ねえな。ハル、この探索が終わったら愛について熱く語り合
おうぜ！」

「ははは」

目を逸らして薄っぺらい笑みを返した私の視界に、休憩地点であ
ろう巨大な岩が映り込んだ。

砂漠の中で一際浮き立った巨大な一枚岩の影で暫く休憩を取り、
隊が二つに分断された。

大体同じ力量、人数の割合で二つに分かれた第一隊は、片方はエ
ルガー片方はジェラルドが取り仕切るらしい。

今更ながらだが、私にはエルガーとジェラルド以外知り合いがない。だから仕方なく一人座って水を飲みながら遠くを眺めているのだけだ。

——それにしても砂漠って暑いな。なんか陽炎で酔っちゃいそう
だ。

近くにいるアークトルスの軍団は慣れ切った様子で影にあるわずかな草を食べている。あれって草食動物なのか？

視線を再び遠くに向ければアマルテアの街はもう既に見えない。雲ひとつ浮かばない青空が下に行くほど白んで、陽炎で揺れているばかりだ。

——ダメだ、陽炎のせいで目がおかしくなってきた。

砂漠の向こうでやけに砂が弾けているように見えて、私は一人目を擦った。

「……ん？」

あれ、おかしいな。

やっぱり砂が変に弾けているように見える。風に吹かれて飛んでいるとかじゃなくて、まるで砂の中を何かが走ってるみたい。

「……走ってる、みたい？」

ぞつとした私は立ちあがって岩陰から出ると、近くにあったならかな丘まで上った。ブーツなので幸い砂が靴の中に入ることにはなかったけど沈みこんだ地面には苦勞した。

そしてようやく緩やかな丘に立った時、私の視界に飛び込んできたのは砂漠に残るアークツルス足跡。

そしてその後ろから蛇の肢体のように曲がった太い線が一本。

「なにこれ……」

太い線を目線で追うと、途中で千切れていたその先端からは、黒い角のようなものが二本砂の中から立っていた。

——とりあえずエルガー達に報告しよう。何かわかるかもしれない。

そう思っただを返そうとした瞬間、足の裏に震動が伝わってくる。

「……地震？」

いやまさか。

生唾を飲んでゆっくりともう一度二本の角の方を見ると、それが勢いよく動きだした。

太い線がこちらに向かって走ってくる。それは異様で不気味な光景に、私の思考回路が一回転した。

「き、き、きも——いつ！」

絶叫に騎士団の面々がこちらを向くのがわかる。しかしこっちは向かってくる砂中の謎の物体を前にして私は丘から駆け下り始めた。アークツルスの軍団も本能的な何かを感じ取ったのか暴れ始め、騎士団の隊員たちは剣を抜いた。

そして。

丘陵を下る私の背後から「ドン！」みたいな妙に圧力の籠った音がして、巨大な何かが砂の中から姿を現した。

「ム、ムカ——」

——ムカデえ——つつ！？

体長は横幅二メートルくらい。黒い角はムカデの頭から生えていて、鋭く尖っている。団子がいくつも繋がったような僅かに赤黒いその姿に私の脳みそは爆発寸前だ。

しかし悲鳴を上げる前に、足がもつれて勢いよく砂に顔から突っ込んだ。

——熱い熱い熱い熱い！

ゴロゴロと前回りです砂の上を転がる間に、口や服に砂が入ってざらざらするわ、目が回るわで完全に士気が下がっていく。

だけどムカデに踏みつぶされて死ぬのは嫌だ！

右手を外套の中に潜り込ませ剣の柄を握り、タイミングを合わせて足を踏ん張った。

踵を砂にめり込ませ、なんとか滑り落ちる勢いを止めた瞬間振り返りざまに剣を横に薙ぐ。

瞳に映ったのは散りじりに牙の生えた口内と、どす黒い色の喉。

「ぎっ」

その牙に自分がすり潰されるところを一瞬でも想像すると、冷静ではいられなくなる。

思わず両腕に力が籠り、日光を反射した剣が私に応えるように光った。

「ぎゃあああああ——っっ！」

固い手ごたえ。

バキィッ！ という太い木の枝が折れるような音が響いたかと思うと巨大ムカデの頭に剣が刺さった。

「ひえええええ！？」

なんで刺さるの！？　なんで！？　抜けないし！

ムカデは方向転換したかと思うと騎士団が休憩している岩陰に向かつて突っ込んでいく。私は剣の柄にぶら下がって震動に耐えていた。もしも振り落とされたらムカデの足に着き刺されて体中穴だらけになる。

辛うじて騎士団の様子を窺うと、エルガーが指示を飛ばしている。きに包囲網が広がっている。

——　ちよ、ちよっと待て！　このまま岩に突っ込んだら絶対圧死する！

剣が刺さっているのはムカデの体の先頭である頭だ。もしも一枚岩に向かつて突撃などしようものなら巻き添えを食うに決まっている。

そして柄に宙ぶらりん状態の私の両腕にも、限界はやってきていた。

時速何キロくらいで走っているんだろう。大体車と同じかそれより少し下だと思うから目算五、六十キロ。

そんなところから飛び降りたら例えしたが砂漠の砂でも痛いだろう。

「飛び降りるハル！」

「ナナセ隊員！」

「離れるんだ！」

いや絶対ムリだから！

「ムリムリム、」

砂漠の砂に少し凹凸があったのかムカデの体が上下に揺れ動いた瞬間。

すぽーん。

軽々しい擬音語と共に、剣があっさりムカデの頭からすっぽ抜け

「リ——！」

同時に剣も手から離れ、絶叫を上げた私は空中に放り出されたかと思うとすぐに落下を始めた。

「ナナセ！」

「ナナセ君！」

「ナナセ隊員！」

みんなありがとう、私の名前を覚えてくれて。
空を舞いながら、場違いにそう思う。
そして多分受け止めてくれようとしたのだろう。優しい隊員の一人がキャッチ態勢に入り、見事私はその腕の中に――収まらなかった。

心優しい隊員の額と、空中で変にバランスを崩した私の脳天とが衝突した。

うめき声が聞こえる。

暗闇の中で確認できるのは爛々と光る二つの青。一体何が光っているのかわからないけど酷く不気味で、嫌な感じだ。

「殺してやる……！」

怨念のこめられた声音。人間のものには感じられない。

「殺してやる！」

「うわああ――っ!?!」

がばつと起き上がると真下では一人の隊員がぶつ倒れていた。心配して駆け寄ってきた数人が突然起き上がった私にびっくりする。

「おいハル無事か！」

ムカデの位置がさほどかわっていないことからあまり時間は経っていないことがわかった。ジェラルドも不安げな顔でこちらを見ってくる。

「あれ、私今意識ぶっ飛んでたよね……！？」

「ああ、三秒くらいだけだな」

どうやら私より下敷きになった隊員の方がよほど重症らしい。

「伏せろっ！」

他の隊員の叫びの反射でその場にいた全員が身を沈めた。同時に何か黒くて大きい物が真上を通過する。

「何今の！？」

「ヒルデグリムの尾だ！ 気をつけろ、毒がある！」

どうやらあの巨大ムカデはヒルデグリムって呼ばれているらしい。私の中では勝手に巨大ムカデって呼んでたけどね。

とりあえず気絶した隊員を回収し、ムカデの方に向き直る。

さっき見た尾のはまるで剣の先のように尖っていて、あんなの毒がなくても突き刺さったら大事だとわかった。当たったら即死だ。

「致命傷を与えるには頭にある二本の角を折るのが早いはずだ」

ジェラルドの言葉に私は息を呑む。

近づくことさえ精一杯な巨大ムカデ（忘れてた、ヒルデグリムだ）の角を一体どうやって折ればいいんだ。偶然剣が刺さったさっきの場合はともかく、あんなのが二回も連続してできる自信無いし。

「これは誰かが飛乗るしかないな……」

「飛乗るって？」

「足が多くて近付けないから。まあエルガーはそんなことおかまいなしみたいだけど」

カラフルな髪色の中で、黒髪のエルガーは結構目立つ。

とエルガーに向かって牙を剥いたヒルデグリムが、百ある脚を動かして突進を始めた。ムカデって漢字では百の足って書くもんね、名前通りだ。

なんて言っていていられるほど見ているこっちにも余裕は無かった。

「危ない！」

ジェラルドは安心したように笑みまで零している。いや笑ってる場合じゃないでしょ！

しかし私の心配はあっさり杞憂に終わった。

直前まで迫った牙の生えた顎を、エルガーの剣が中央で割った。吹き出す濁った緑色の液体に一瞬ムカデの動きが止まる。騎士団の誰もが、それを見逃しはしなかった。

嘘でしょ？

——今、エルガー、剣振ったんだよね……全然見えなかったけど。

しかし動きを緩めたムカデはまだ懲りないのか口を大きく開いて
尚もエルガーを食べようとする。彼は彼で冷静に応戦して一撃一撃
攻撃を深くしていつてるみたいだ。

「ねえジェラルド、誰かが飛乗る方がいいんだよね？」

「え、まあそっちの方が角を切り落として早く終わるんだろうけど
……ハル、お前また変なこと考えてるのか？」

またってなんだまたって。

とにかく女子高生とは言え、私は騎士団の一員だ。上司が戦って
るのに部下が何もしないなんておかしい。新米なんだから今ここで
は少しでも皆の役に立つことが大切だ。

私は剣の柄をぎゅっと握りしめ、一つ頷いた。

大丈夫だって。ホラ、虫は小さいから気持ち悪いってだけで大き
ければ別に問題も無いし？ 肝心の口はエルガーが真つ二つにして
くれたから食べられちゃうなんてことも無いと……思うし？

「おしジェラルド、行くよ！」

「はあ？ お前行くって何を」

「何って勿論、あれの上に乗るの！」

頭の中で思い描いた通りにムカデを倒せるかはわからないけど、
やれるだけやってみよう！ どうせ死にやしない！

「エルガーの注意が私にそれた瞬間に、エルガーの代わりにムカデ
を攻撃して！」

「お前あいつに何する気だよ……」

「いいから早くいったいた！」

渋々といった感じでジェラルドが走り出し、私もその後を追う。
そして。

「エルガー————ッッ！」

声の限り叫んでエルガーに向かって突進。

五十メートルほど先のエルガーが剣で応戦しつつ何だと言いたげな空気を発する。その隣にジェラルドが滑り込み「交代だ！」と言つてムカデの頭を斬る。

そしてエルガーがこちらを振り向いた瞬間。

「飛ぶから、腕貸してっ！」

勢い余った私を目前に、なんとか言葉の意味は通じたらしい。

剣を地面に刺したエルガーは、指で手のひらを組むと中腰になる。

そして私はその手のひらに踵を乗せた。

重っ、っていう声が聞こえたような気がするけどそこはスルーで、
タイミングを見計らったエルガーが私ごと腕を振り上げた。

人生初の砂漠で、人生初の大ジャンプをした瞬間だった。

11 いざ、砂漠デビュー（後書き）

更新が遅れてしまつて本当に申し訳ないです。トロい作者ですいません。

それから、拍手タグをつけてみました。お気に召しましたら押していただけると励みになります。

これからもどうぞこの物語の住人達を、よろしくお願いします。

12 ムカデハンター七瀬

砂漠の中ぽっかりと浮かぶ街のはずれ。小さく質素なたたずまいの家から、しわがれた歌声が聞こえてくる。

ロッキングチェアで体を揺らし、手に持った書物の頁をめくる音。それに合わせて、音の凹凸が弾む。

「おばあちゃん、なんのうた？」

年端のまだ満たない呂律の回り切っていない少女はチェアの肘かけに顎をのせて大きな瞳でそこに座る老女を見上げた。

「これはね、おばあちゃんがおばあちゃんに教えてもらった歌なんだよ」

「おばあちゃんの、おばあちゃん？」

唸って首を傾げた少女に、老女は優しく「そう」と頷き微笑んだ。

「おばあちゃんのおばあちゃんが、そのまたおばあちゃんから聞いた古い歌。ずっと昔にご先祖様が作ったもので、もう覚えているのは、私だけになってしまったねえ」

遠くの物を見つめるように目を細めた彼女は再びリズムを刻み始めた。

黒い海に光る石

銀色の糸を引く神の指

砂中に眠る全てを吸い
ヴェネが再び宿すだろう

神の社の奥深く
そこに眠るは金の獅子
二つの瞼が瞬けば
道は続き導かん

青い光の中央に、――

―― 集中しろ。

上から見るとムカデの全長がよくわかる。大体五十メートルと少しくらいだろうか。

ムカデの頭の大きさは、横幅二メートル、縦幅も着地するのに不足は無い。

あとは無事にこの状態から二本の角を斬ることだけ。

それだけを考えろ。

エルガーの腕を借りて大ジャンプを試みた私には空中での動きが妙にスローに感じられた。人間の脳は危険に直面した時走馬灯が走るとか、周囲の動きが遅く感じるとかテレビで偉い学者さんが言っていた気がする。

これがその走馬灯なのかわからないけど。

掌の力を一瞬緩め、空中で体を動かすままに一回転。ムカデの頭が視界いっぱいに近いに近付いてくる瞬間に、急速に感覚が返ってきた。

「ハル！」

——大丈夫、いける！

ドン！ と足の裏に大きな衝撃。同時に黒光りする肌に剣を振り下ろした。

固い物の割れる音がして、深いひび割れがムカデの入った。その奥から緑色の何かが湧き上がって吹き出す。

「!？」

驚いた私の顔にもその緑色の液体がかかった。生ぬるいそれは――ムカデの血。

「わああああ——つつ！？」

きっしょい！

悲鳴を上げた瞬間、私の足元がぐらついた。ムカデが苦しむように、頭を空に向かって突きあげたのだ。ずり落ちそうになり、必死で伸ばした手が何かを掴んだ。

手から剣が抜けて地面に向かって落ちていく。頭を振り回すムカデにしがみつき、ようやく自分が何に触れているのかわかった。

「つつ、角——っ!？」

二つある角のうち一本につかまる私を、ムカデが頭を振って落とそうとする。

どうやら知恵だけはあるみたい、だけどッ!

不吉な音を立て、私がぶら下がっている方の角の根元にひびが入った。

ぎよっとして本能的にもう片方の角にも指をかけるけど、こちらの角もゆっくり傾いていく。

これはマズイ、嫌な予感しかない!

だけど細かいことが気になる性格の私にとっては、そのひび割れがあまり気に入らなかった。治りかけの怪我にぶら下がった力サブラを剥がすみたいに、いつきに折れちゃえばいいのにと。

思った自分はやっぱり馬鹿だ。

息を吸って、両腕に力を入れ思い切り下に向かって引っ張った。たかが高校生一人分の体重、だけでも少なくとも四十キロは超えている。更にムカデが頭を振り回しているから遠心力でもっと強い力が角にかかっているはずだ。

ぶちいっ、と血管の切れる音。

なんとか繋がっていたムカデの皮膚と角が、ようやく断たれた。

「よっしゃあああ——っ!」

角を握ったまま思わずガッツポーズ。晴れ晴れとした心の中に響くのは騎士団の仲間達の歓声と同時に――いくつかの悲鳴。

そうでした。私令、空に向かってダイビングしたんです。

大体高さは二十メートルくらいだったろうか、吹き出したムカデの血液と距離を変えないまま体が真逆さまに落ちていく。

心臓が凍りついたような感じがした。例え柔らかい砂の上でも背中から落ちるということは致命傷になりかねない。ましてや死ぬ可能性の方が大きいんじゃないか。

――死ぬ。

目の前が暗くなった瞬間、

くぐもった音と重い衝撃が体にかかった。

恐々臉を上げ、自分が生きていることを確認する。大丈夫、ちゃんと息してるよ私。生きてるよ私。

はあ、と私を受け止めた人物が大きく溜息を吐きだした。その人物を見て私は硬直。

「……エ、エルガー？」

「お前はいい加減に――」

ジェラルドとか普通の隊士さんとかが受け止めてくれたもんだと勝手に思っていた私は、間抜けにも口を開いて何も言えなくなっていた。

そしてエルガーは無情にもそんな私をあっさり腕の中から落とした。

バスッ！　みたいな鈍い音がして私は砂の上に落ちたわけだが、その時に乙女らしからぬ「うぎゃい！」という悲鳴を上げてしまう。

「何で！？　何で落とすの！？」

「お前はもう少し後先考える癖をつけるこの馬鹿ッ！　お前のその頭は飾りか！？」

「飾りつて失礼な！　ちゃんと考える力ぐらいありますうー！」

「じゃあなんだ、中身が無いんじゃないか！？」

「中身だつてしっかり入っとるわ！」

——　脳みそはあるけどシワが少ないだけだし！

じつくり十秒ほど睨みあった私とエルガーの間にニコニコと愛想のいい笑顔を浮かべたジェラルドが「まあまあ」と割って入ってきた。

「二人ともそう喧嘩すんなって。いいじゃんか。あの通り、魔物はこの世とおさばらしたんだし、さ」

ジェラルドが示した先にはついに最期を迎えた巨大ムカデと、その周囲にいる騎士団第一隊の皆さま。そしてようやく、自分が未だにムカデの角×二を握り続けていることに気付き「うわっ」と手を離れた。

「ともあれ一件落着だろ？　ハルは確かにちよつと無茶すぎだけど、終わりよければ全てよしってな？」

肩を竦めたジェラルドに対し、万年仏頂面魔王は舌打ちをして踵を返した。どう見ても怒ってるよなあ、あれ。

「……怒らせちゃった……」

「何しよんぼりしてんだよ。大丈夫、あいつ怒ってなんていねーから」

別にしよんぼりなんてしているつもりは無かったんだけど、彼にはそう見えたらしい。いささか強すぎる力で私の背中を叩いたジェラルドはまるで告げ口するような小声で言った。

「単にハルが心配なだけなんだって」

「心配？ エルガーが？」

「そ。あいつあんな顔して心配症だからなあ、自分が危ないことするのは平気だけど、俺らにはあんまりしてほしくないみたいだぜ？」

「なんか……」

一呼吸おいて。

「——厳しいお父さんみたいだね」

その言葉に横にいたジェラルドは勢いよく吹き出した。

時刻は変わって夜。

昼間から打って変わって砂漠の夜は凍える寒さだ。勿論宿なんて無いから今夜は野宿。せめて水浴びだけでもしたい。多分寒さで凍

え死ぬけど。

「はあ……」

騎士団は二手に分かれ、エルガーとの間で助け舟をしてくれていたジェラルドがいなくなってしまった。これは痛い。

ちゃんとエルガーに謝らなきゃ。それからお礼言わなきゃ。それにしてもあんな高いところからぶっ飛んだ人間をよく受け止めようなんて思うよなあ……普通腕もげるでしょ。

とにかく汗をかいて匂いの気になる服を着替えよう。

砂漠の中に点々と存在する岩の影に着替えを持って隠れた私は一人ごそごと高校のセーラー服に着替え始めた。冬バージョンだからセーターもあるし、ソックスじゃなくてタイツ仕様だ。

タイツを履いている最中に、何故かいきなり目頭が熱くなった。

「なにこれ……ホームシック？」

ルーやロズがないからだろうか。それとも暖かいベッドが無いからだろうか。

無事着替え終わった私は、疲れた体を休めるために岩によりかかって座った。

――頑張らなければ。

今やるべきことはそれだけだ。アルカナの役目を無事全うしたら私はウォーターフォードから日本へ、帰ろうと思っている。

思っている、はずなのに。

なんだか心が納得しない。本当にそれでいいと私は思っているのだろうか、自分でもわからなくなってきた。

溜息をついて目を瞑り、頭を岩の出っ張りにのせた。

——私、もしかして迷ってる？

気の重くなるような考え事に、うつすらと瞼を上げた私の視界いっぱいには日の沈みきった満天の空が映った。

「う、わぁ……！」

数え切れない星が瞳に飛び込んでくる。宝石のように瞬くそれらの間には僅かな隙間しかなくて、一体どれが六等星なのかわからないくらい輝いていた。

こんな星空を生まれて初めて見た。

地平線まで続く光の群れ。いつか見ることが叶えば、どんなに嬉しいだろうと夢見ていた、もの。

異世界なんだし、この星の中に地球は無いのかもしれない。私のいた場所のもっと遠くにあるのかもしれない。

どうして私が迷っているのか、それはまだわからない。自分の中で折り合いもつけられないけど、いつかその答えを出す日は必ずやってくるはずだ。

その日を迎えるために、今は頑張らなければ。

「……い」

とにかく騎士団の中で精進して、少しでも強くなって皆の足手まといにならないようにして。

「……おい」

ちよつとは後先を考えて行動するようにして、魔物とかもちゃんと一人で倒せるくらいに――

「おい」

「うひゃああつ!？」

低い声と同時に後ろで結っている髪の毛を引っ張られ、驚きで素っ頓狂な声を出してしまった。

「ななな、いきなり何……!？」

「何度呼んでも返事をしないからだ。晩飯だぞ」

いつの間にか真横に立っていたエルガーに着替えも腕からすっぽ抜けた。何度も呼んだって気配が無さすぎでしょ! 十人中十人がびっくりするわ!

「晩ごはん?」

「さつさと来ないと無くなる。食欲が無いならそれでも構わないが」
「あるある食欲すごくある!」

着替えを拾ってさつさと立ち上がった私に、エルガーは意味深な

視線を向けてきた。

「ん？」

「もうあまり無茶苦茶なことはするな」

呟かれた言葉に私は一瞬硬直。

あいつあんな顔して心配症だから、というジェラルドの言葉を思い出して思わず吹き出してしまった。

「何がおかしい？」

「だって、エルガーそんな顔して心配症なんだもん……！　ほんつと厳しいお父さんみたい！」

エルガーは笑われていることが気に喰わないのか苦々しい表情を浮かべてこちらを見ってくる。そして軽く舌打ちすると踵を返してしまった。

「あ、ちょっと待って！」

彼の後ろ姿を見て我に返った私は、着替えの隙間から輝くアクセサリーを引っ張り出した。

「これ受け取って」

ひょいと投げたそれは振り向いたエルガーが見事にキャッチ。彼はそれを不思議な物でも見るようにマジマジと見つめて「なんだこれは」と小さく呟く。

「ネックレス」

「それはわかる。どうして俺がお前からこれを貰う必要があるんだ

「？」

「日頃お世話になってるみんなにお礼も兼ねてのプレゼント。他にも何種類かあったんだけど、エルガーはそれが一番良いかになって」

アマルテアの出店で青の森のことを教えてくれたおじさんの出店で買ったものだ。「好きな子にでもどうだい」が売り文句だったおじさんからしてみれば、六つもアクセサリーを買いなんて「随分好きな子が多いんだなあ」とある意味感動だったらしい。

シンプルなラインのチェーンに掛かっているのは繊細に刻まれた小さな模様のネックレスヘッド。渦を巻くその中心には、金色の石が光っている。

エルガーの目と同じ色だ。

「それから、今日は助けてくれてありがとう。エルガーがいなかったら私、大怪我してたかもしれないし」

「そう思っただったらこれ以降危険な行動は――」

言いかけたエルガーの言葉に、私は自分の声を重ねる。

「やめるつもりは無いよ」

一瞬固まった彼は、いつそう顔を苦々しく歪めた。

「目の前にチャンスが転がってるのに、それを危険だからって逃してしまうほど理性のコントロールが器用には出来ないのが自分でもわかってるから。自重はするけど、完全に押さえろなんて絶対ムリ！」

「……お前な……」

「迷惑いっぱいかけれると思う。だから先に謝っとくね、御免なさい」

なんて自分勝手に押しつけがましいんだろう。

でもやっぱりムリなことはムリだ。この先何度も怒られることになるくらいなら、最初に言っておこう。私は単純で、馬鹿だから考えて動くなんて器用なことではない。

やや神妙な顔つきの私に、エルガーは溜息をついた。

「とつと来い。飯が冷めるぞ」

それだけ言ったエルガーはいつものような無表情に戻って、再びみんなのもとへ戻っていく。

——これは一応、許されたって思っているのかな？

無意識に頬が緩んだ。

笑って頷いた私は、着替えを持ったまま急いでその後を追いかけた。

12 ムカデハンター七瀬（後書き）

お久しぶりです。更新本当に遅くなって申し訳ありませんでした。ここまで待つてくださった方々に感謝です。本当に。もう駄目な作者ですいません！ 精進します！

13 幻の歌

くろいうみに ひかるいし

ぎんいろのいとをひく かみのゆび

さちゆうにねむるすべてをすい

ヴェネがふたたび やどすだろっ

瞼を開くと、まず見えたのは砂の上に無造作に置かれた自分の手のひら。

それから未だ明けきらない夜空の無数の星達。今は背後にある焚火の光の影響で、少し数が減って見える。

眠っていた状態から、私は体を起こした。

晩ごはんを食べたあとに揃って眠りについた騎士団の面々はみんなすっかり夢の中。いびきまでかいている人もいる。いざって時はすぐ頼りになるそうだけど、本当に大丈夫なのかな。奇襲とかされたらおっかない。

外套を下に引いて毛布にくるまっけていても、いや寒い寒い。さすがに夜は冷える。

なんか後頭部が痛いと思ったら、髪の毛を結んだまま眠っていたんだ。黒ゴムを外して簡単に手櫛で梳かしてからまた緩く結ぶ。

「ふえつくしっ！」

間抜けなくしゃみをした私は、こっそり周りの人が眠っていることを確認して息をついた。

——なんか変な夢、みたいの見た気がするんだけど気のせい？

肩をさすってもう一度眠ろうと体勢を変えた時、焚火の見張りなのか二人の騎士団員の会話が耳に入ってきた。

「『青の森』か……おつかない」

「今回も無事に帰れるといいんだけどな。ほら、ずっと前に魔物に喰われた奴もいただろ？」

「そっぴやそうだった。あのでかいサソリの時だろ？」

魔物に喰われる？

魔物って人間食べるの！？

恐くなった私はもう一度起き上がり、毛布を体に巻いて焚火の元まで歩いて行った。

「すみません、ご一緒していいですか……？」

「お、おお。ナナセ隊員か」

「眠れないのかい？ 隣にくるといい」

暗闇の中から現れた私に一瞬慄いたものの、二人はこころよく仲

間に入れてくれた。

片方の隊員は、ヒゲのいかした三十代後半くらいのおじさん。髪は短く刈り込まれて全体的に筋肉質な感じた。

そしてもう一人は二十代後半くらいの、乾いた金髪の男の人だった。顔つきも骨ばっていて、どこことなくヒゲのおじさんに似ている。

「自己紹介が遅れたな。俺はパニールだ。こっちは弟のルーシャン」
「よろしく」

歳の差が大きいのに随分親しそうに話しこんでいると思ったら、なるほど兄弟だったわけか。

「よろしくお願いします」
「近くで見れば見るほど男前だなあ」

弟のルーシャンさんにそんな（褒め言葉にカウントされるのかわからない）褒め言葉を貰って苦笑いを浮かべる私の目の前で、彼の脳天に兄のパニールさんの鉄拳が落ちた。

「いつてえ！」
「年頃の娘さんに向かってそりゃあ無いだろう」
「いえいえお気になさらず」

——むしろ「年頃の娘さん」の方が不慣れでむず痒いですしね！

「そういえばさっき、魔物がどうのこうのって……」
「ああ、魔物のことか。いや少し前に魔物に喰われた奴がいてね。あの時も砂漠での任務だったんだよ」

パニールさんの序々に進んでいく解説に比例して、私の頬は嫌な

予感にどんどん引きつつていく。

「その時に魔物に喰われちゃった奴がいてな。こう、むしゃむしゃと」

擬音入れないで——ッ！ 頼むから音で表現するのやめてグロいから——！

渋面を作った私に気付いているのかいないのか、二人はニコニコそっくりな笑顔を浮かべながらこちらを見てくる。

「まあそれ以来魔物はちつと苦手だったんだが、今日のナナセ隊員を見て勇気づけられたぜ」

「なんたつてあんなデカイ魔物に真正面から突っ込みまうんだもんな」

そっくりな兄弟の称賛に顔が赤くなるのを感じた。

すいません、ちょっと後先考えすぎないだけなんです。そんな大層な闘志みたいなのがあるわけじゃないんです。

「でもそんなこと聞いちゃったらもう魔物に突撃なんて出来ませんよ……」

「はは、でももう昔の話さ。俺もまだ若かったし、余計に恐く感じたもんだ」

「結局その魔物どうなったんですか？」

遙か昔に無事に討伐されていることを祈る私の前で、沈黙した兄弟は同時に首を振る。

「実はその時は捕まらなかったんだよ」

「逃がしちゃってな、またあんなデカイ奴に会わなきゃいいんだが。」

ま、今日の魔物も中々の大きさだったのにナナセ隊員の活躍のおかげで倒せたし、あんたがいりゃあ大丈夫だろう」

豪快に笑うルーシャンさんに背中を強く叩かれながらも、さつきまで恥ずかしくて火照っていた顔からすつと血の気が引いていく。
いや、もうあんな大きい節足動物の相手なんてしたくない。

「二人って何年前くらいから騎士団にいるんですか？」

「俺は八年前から。兄貴は十五年前からいる」

「まあな。昔はそりゃあメイドからモテてなあ」

「いつもの冗談だ。気にしないでくれ」

ルーシャンさんがそうやって私に小声で告げ口してくる。本当、傍から見ても仲のいい兄弟だ。

「十五年前かあ……」

「おう。ディア王子やらエルガー団長がこーんな小さい頃から知ってるぜ？」

丁度私たちが座ってるくらいの高さで手をヒラヒラさせながらパールさんが白い歯を見せて笑った。

——ディアの小さい頃はなんとなく想像つくけど、あのエルガーにも子供だった時があっただよね。想像できない。

「二人とも、どんな子でした？」

「おお、聞きたいか？」

あわよくば今ここで二人の幼少時代の話を聞いてしまえ、と身を乗り出した私の上にすつと影が落ちた。

何故だろう。背後からすごい冷気を感じる。でもって真後ろに誰が立っているのか一瞬でわかる。

パニールさんもルーシャンさんも、私の後ろにいる人物を見上げて茫然としている。

「随分楽しそうだが……一体何の話だ？」

「え、えと、団長……これは……」

——こ、こええええ！

じつとりと背中を冷や汗で濡らした私に「なあ、ハル？」ということにも増して低いエルガーの声。

「え？ いや、あの、ちよつと昔話を」

「お前ら全員さつさと寝ろ」

びしつと寢床を指差され、ルーシャンさんとパニールさんが早々に退散する。一方の私もいそいそと自分の場所に戻ろうとしたのだが、エルガーが火元の近くに腰を下ろしたのを見て足が止まった。

「エルガー、寝ないの？」

「火番をする」

待つて、それって仮にも一応上司にやらせちゃダメだね。年功序列順にも先輩だし。

「やるやる！ 私やります！」

「単に火を見てるだけだ。退屈だぞ」

「だからやるつて。エルガー代わりに寝ててよ」

その申し出に、エルガーは最近十八番になりつつある「苦虫を噛み潰したような顔」でこちらを見た。いかにも不服そうだ。

「何その顔……」

「危なっかしい。お前は寝ておけ」

——し、失礼な！

「私だって火くらい見れるよ！」

「……」

大股で火のところまで近づいて行った私は、砂埃を立ててエルガーの横に座った。うちの血筋は代々頑固者だ。こうなったら火の為に徹夜くらいしてやる。

「……オイ」

「エルガーは私の上司なんだし、雑用は部下の仕事。そうでしょ？」

「お前がぶっ倒れても運ぶ余裕は無いぞ」

「大丈夫、一日くらいの徹夜慣れてるし！」

なんとだって私は高校生、テスト前日なんか徹夜することはしょっちゅうだし体力もさほど減らない体質だ。

自信満々な私に対し、エルガーはげんなりとした表情で溜息を吐いた。何も言わない、ってことは別にここに居てもいいってことだろうか。

「……」

「……」

体育座りでひたすらに火を見ているというのは、あまりの退屈さにじわじわと精神がすり減る。

——しかもこの重い沈黙……！

今日は助け舟のジェラルドもないし、やっぱり魔王団長との空気をもたせるのは至難の業だ。

「あ、あのさエルガー」

重々しい雰囲気になれなくなり話題を探してそう切り出したものの、何を話すか全然決めていなかった。

「え、えつと……エルガーって誕生日いつ？」

無理やり絞り出した、プロフィール関係の質問にエルガーはいかにも胡散臭いと言いたげ。苦笑いのまま表情筋が固まってしまった私の思うことは一つ。

——話題選択ミスった！

「誕生日？」

「そ、そうそう！ ウォーターフォードにも誕生日を祝ったりするのかなーって思ってた」

我ながら随分無理のある会話のつなげ方だ。ちらりとエルガーの方を窺うと、いつものように無表情のまま火を見ている。

「覚えてない」

「覚えて、ない？」

もしかしたら、この世界では本当に誕生日を祝う習慣なんてないのかもしれない。それなら自分の生まれた日は知らなくて当然、なのかな？

——あれ、そうしたらどうやって歳数えるんだ？

「お前はどんなんだ？」

「え、私？ 私は二月十四日……ちょうどウォーターフォードに来た日だよ」

「それでやけに荷物が多かったわけか」

「そうそう。学校の女の子がプレゼントにね、お菓子くれたの」

学校に通っていたのがずっと昔のことみたいだ。まだ半年も経っていないのに、何年も前のことのように私の中で少し色あせてしまったような感じがする。

まるで私のいた場所は、最初からここだったような——。

「あ、そうだ」

一瞬だけ自分の中に芽生えた考えを頭から振り払うように続ける。

「あのさ、私って成り行きで騎士団の一員になったわけでしょ？」

エルガーのほうに視線を向けると、彼の目には焚火の炎が映っていた。相変わらず美形だ。

「じゃあ、エルガーはどうして騎士になったの？」

若くして騎士団の団長になっているエルガー。

そこまで上り詰めるには、私には想像のつかないくらいの努力があるんだと思う。

一体何が彼をそこまでさせたんだろう。一体どんな目標や夢があって、団長になったんだろう。

純粹に仲間として、エルガーという人物に興味があった。

だけど。

「そんなことは、お前に話す必要は無い」

凍てついた声音で返された言葉に、一瞬呼吸が止まった。

エルガーは私の方を向かない。ただ燃えさかる炎をじつと変わらぬ瞳で見つめているだけだ。

——拒絶、された？

あまりに呆然として、そのことに関する悲しみは湧いてこなかった。ただ、弾かれたという現実だけが心の中に水をしみ込ませるようにゆっくりと入ってくる。

「あ……」

自分が何を言おうとしたのかはわからなかった。

「じゅめん、なさい」

ただ何か、触れてはいけないうちに触れてしまったのではないか。

「眠くなってきたし、私もそろそろ寝ようかな」

全然眠くなんてない。ただ、それ以上エルガーに話しかけることも出来ない気がした。隣にただ座っているなんて尚更。

「おやすみ」

私は立ち上がり、毛布を持って自分の寢床に戻った。柔らかい砂の上に敷かれた外套の上に横になる。

途端に鼻にツンとした痛みが上ってきた。目頭が熱くなって、それを毛布にくるまってひたすらに耐えた。

——逃げたくせに何泣きそうになってるの、私は。

他人の痛みや傷に触れてしまったのかもしれないのに、私に泣く権利なんてない。

突然異世界からやってきた何の力も持っていない私を、たくさんの方が支えてくれた。心を開いてもらったとも思っているし、私だってウォーターフォードにいるたくさんの人達を好きになった。

ディアやジェラルドや、エルガーだって例外じゃなかった。

だけど。

——仲間だと、そう思っていたのは私だけなのかもしれない。

満天の星空の下、夜は静かに更けていく。

13 幻の歌（後書き）

難産でした（泣）
長くてすいません。

14 出現

ああ、誰か。

誰か助けて下さい。

「そろそろ休憩だ。気は抜くなよ」

この冷徹魔王エルガーとの冷めた空気から、私を助けて下さい。

お前に話す必要は無い。

エルガーが騎士になった理由。それを本人に尋ねて、案の定弾き返されてから数時間が経った。

夜が明けて朝ごはんを済ませた騎士団第一隊（を半分に分けた部隊）は、砂漠の中をアークツルスに跨って疾走中。巨大ダチヨウを鮮やかに乗りこなすスキルを私は持っていないため、仕方なくエルガーと二人乗り。

前に座る外套の裾をがっちり掴みながらも、正直言わせてもらおうと。

———すごく気まずい………！

いやこつちが一方的に気まずくなってるだけなんだけどね！別にエルガーは昨日のことなんて全然気にしていないのかもしれないし！

砂漠を走り続けて二時間。未だ「青の森」に関する大きな収穫も無く、時間は刻々と過ぎ去っていく。周囲の隊員達は既に日光に体力を奪われ少し疲労の色が滲んでいた。

「お風呂入りたいなあ……」

エルガーに聞こえないように小さく呟いて思わず溜息。

私が悪いのはわかってはいるけど、モヤモヤした気持ちは収まらないしお風呂に入れないから体がべとつくしなんだか苛々してしまう。

———
すごくさっぱりしたい気分だ。

勿論そんなことは叶わないので一人で肩を落とすことしかできない。

隊員の皆さんは男性だから全然匂いも何も気にしていないようだ。今のところ誰ひとりとして異臭を発していないのは奇跡とも呼べるだろう。

と、横から知らない隊員が近づいてきたかと思ったらエルガーに向かって何事かを話している。エルガーは頷くと素早く指示を出した。

すると走っていたアークツルスの隊列から、三羽（匹？）ほどが離れて別の方向に向かった。その先には、青空に向かって伸びる一筋の煙。

何かの合図とかだろうか。

休憩地点を目前に、私はそんなのんきなことを思った。

「発見されたのはアマルテアに向かう西の商隊のキャンプ跡でした。荷物は置き去りで水も食糧も残っています。しばらく周辺を搜索しましたが人の気配は感じられず」

戻ってきた三人の隊員は複雑そうな表情でエルガーに報告するのを、私を含めた他の面々も聞いていた。

「まるでその場からいきなり人が消えたような現状でした」

その言葉を境に、騎士団の皆も不気味がっているのか小声で何かを囁き合う。

「人が消えた？」

「青の森じゃないのか……？」

「確か人を喰うんだろ？」

青い霞がかかった青の森。

正体はわからず、ただ旅人や商隊の人々を次々に——喰っていく。

——超ド級ホラーじゃん！ 私ムリだよそういうの！ 知らぬ間に二人二人と減っていくみたいなの！

一人寒気に身を震わせた私の耳に、エルガーの声が飛んできた。

「今日はこの辺りに陣営を張ることにする。各自『青の森』と思しきものを見つけたら速やかに報告すること。火番は三人一組で交代制、異常があつたらすぐに俺に知らせろ」

三人一組か。よし、パニール兄弟と組もう。

あの二人なら心強そうだし、と一人頷いた私。そして、

「くれぐれも——引きずりこまれないように気を付ける」

エルガーの厳しい声音に騎士団の面々は神妙な顔つきで一斉に頷いた。

「ナナセ隊員、これを一口大に捌いてくれ」

夕食前。

晩ごはんの調理を手伝うことになった私の目の前に木の板と包丁、そして何の肉かもわからない肉塊が置かれた。

見たこともないようなその肉は、まるで今さっき捕えた動物のよ
うな鮮度を保っていて一体どうやってこんな砂漠の真ん中まで持っ
てきたのか気になるくらいだ。ひとしきりそれを見つめて、多分よ
くわからない動物のお肉だろうと鉋くらい大きな包丁を持つ。

「わかりました……けど」

脂ものっついていてなかなか美味しそうだったので普通に包丁をいれ

た私はルーシャンさんの方を振り向いた。

「一体これ、なんのお肉なんですか？」

「なーんだナナセ隊員、とぼけるのか？」

満面の笑みのルーシャンさんは疑問顔の私に向かって「ほらあんなが」と肉の種類をネタばらしする。

「昨日倒した魔物の肉さ！」

——は、いい？

キノウタオシタマモノ、ニク？

昨日。はい、昨日ね。倒した魔物。昨日倒した魔物って言うたあれ。

「ぎいやああああ—— ツッ！ む、むかでええええ！？」

ようやく脳みそがフル稼働して割り出した答えに、私は肉塊からいつきに距離を取る。誰も動物なんかを狩っているようには見えな
いと思ったら、私がハントしたヤツだったんかい！

「はっはっは、どうしたナナセ隊員」

「ど、どうって、それ虫ですよ……！」

昨日倒した巨大ムカデの体の一部に触れていたのかと思うと、腹の底から嫌悪感が湧き上がってくる。

「虫？ 単なる魔物だ。それに今回はいい獲物だったしなあ。こいつの肉は結構上物なんだぜ？ さっさと捌こう」

後ろに回ったルーシャンさんに背中を押されて、もう一度ムカデの肉を前に棒立ちする。確かにスジの入り方なんかが高級食材っぽい。

これは牛肉だ。黒毛和牛だ。そう自分自身に念じながら少しずつ肉を分けていく。

ムカデの肉なんか食べれるようになって、私ほんとにお嫁に行けるのかな。お嫁の貰い手も無いけど。

そう思うと、なんだか急に自分が寂しい人間のような気がしてしまったので自嘲気味に鼻でそれを笑った。

「エルガーさん」

かけられた声に、エルガーは体を起こした。時間的にはまだ深夜、冷え切った空気の中で響くのは隊員達の寝息と寝言それに焚火の火が弾ける音のみだ。

そして目の前で複雑そうな表情の若い隊員は口を開く。「ナナセ隊員が」という切り出しにエルガーの口元がピクリと引きつった。

「あいつがどうした？」

「先程から姿が見えないのですが」

「は？」

そんな馬鹿な、の一文が要約された声に隊員がハルの寝ていたは

ずの場所を振り返る。確かにポーチごと彼女の姿が消えていた。

「半刻ほど前にどこかに歩いて行ったのですが……トイレかと思つて気にしなかつたんです。しかし戻つて来る気配が無いのを見ると何かあつたのかと」

——また問題事を！

立ち上がったエルガーは若い隊員を含め三人に火番を任せアークツルス一頭を連れたエルガーは早々にキャンプ地から七瀬ハル搜索に出た。

「つたくあいつは……！」

いい加減頭で物を考える訓練をしろ、と心中で毒づいた彼の視界には星明りでわずかに照らされた砂地が見える。その中に、黒い物が蹲っているのを見つけそこまでアークツルスを走らせた。

「毛布……？」

落ちていたのは案の定隊員全員に配布されていた毛布だった。それを拾い上げた下には足跡が続いている。

「——？」

確かに足跡のサイズはハルのものだろう。だが、砂漠で不安定な足場とは言え少し足元が覚束ない足跡だ。足跡の先には、また幾層の砂の波が待ち受けている。

いくらなんでもトイレごときでこんな遠くまでくるはずがない。ということは、何か気になるものでもあつたのか？

単純思考のハルなので、そういうこともあり得ないだろう。それ以外に考えるとしたら——『青の森』が関係あるかだ。

その場から立ち上がったエルガーは、アークツルスにハルの足跡を追わせた。歩幅が少し乱れているということはよほど夢中になっていたのか、それとも。

大きくうねっている砂漠の砂の向こう側から、ほのかに青い光が夜空を照らした。

ハルの足跡は確実にその光に向かって進んでいる。幻想的で鮮やかで、人間にはとても魅惑的な蒼色に。

——これが。

緩やかな砂の丘の上に立ったエルガーは眼下に広がる光景に息を呑んだ。

青く発光する木々が、おおよそシュヴァイツ城の半分ほどの面積にひしめきあっている。まるで生きて動いているようにそれが風に揺れた。まあるで葉の一枚、幹の一筋まで染み込んだ色合いがそれを更に淡く人を惹きつける力を持っているようだ。

その景色の中で、わずかに黒の色彩が動いた。目を向けると一人の人間が、森に向かって足を踏み入れるところだった。

「——おいハルッ！」

叫べばまだ声の届く位置にいる。しかしその人間は、ハルは足を止める素振りも見せずついに木々の間に一歩踏み出した。まるでこ

ちらの呼び声など聞こえていないように足取りに変化は無い。

今まで何人の人間を飲み込んできたのだろう。そして飲み込まれた人々は一体どこに消えたのだろうか。

心のどこかに氷塊が落ちた。背筋がすつと冷え、それに対する嫌悪感を払うようにエルガーの体は本人の意思など関わらず青の森に入って行ったハルの足跡を追っていた。

14 出現（後書き）

更新遅れてしまって申し訳ないです。

ここまで読んでくださっている方々、本当にありがとうございます。
できる限り早く更新できるよう励みます。

15 青の森

歌声が聞こえる。

遠くから、凸凹の曲調に合わせて拙く歌詞を紡ぐ少女の声が響く。
一体誰がどこで歌っているのかわからないけど歌自体はなんとなく
聞き覚えがあった。

くろいうみに ひかるいし

ぎんいろのいとをひく かみのゆび

さちゆうにねむるすべてをすい

ヴェネがふたたび やどすだろう

だけど、この歌を聞くと頭に頭が痛くなる。

それにどうしてだろう、ものすごく——寒い。

私、なんでこんなに寒い思いをしてるんだろう。寝てる時は毛布
があったはずなのに、一体どこにいつてしまったんだろう。

そう思いつつまた一歩踏み出す。固い地面の感触が足の裏から伝
わってきて——幻から現の世界に。正気に戻った。

「——え？」

自分の呟きと同時に力の抜けた腕の間からずりりとかかが抜け落
ちた。予想以上に荒々しい音をたてて落ちたそれは、どこからどう
見ても私の剣だ。

剣を拾い上げようと腰を屈め、そしてようやく自分が立っていた

ということに気がつく。しかも外套も毛布も無しに傍から見ればすごく寒々しい格好で。

くしゅんッ！　なんて盛大なくしゃみをして鼻をすすり、冷え込んだ外気に肌を刺され意識が明瞭になってくる。自分の周囲の音と景色がようやく認識できた。

——青い。

一面、青い光を発する木々の群れだった。雑草や小さな茂みから木の根まで、淡い光が内側から存在を主張している。まるで街中のクリスマスツリーみたいだと場違いなことが頭を過ぎった。

——　　つて、そんなことを考えてる場合じゃない！　どうしてだかわからないけど、私今確実に青の森の中にいる！　超ド級ホラー（オプション死亡フラグ）に自分から突っ込んだようなものだ。

「え、えつと……何すればいいんだろう……」

さて問題はここからだ。前々から聞いていた幻想的な青の森も、人を喰うんだなんたのというおどろおどろしいイメージを植え付けられたら綺麗だなんてうつとりしてられない。見るなら外から見ればいいし、さっさとここからは退散したいものだ。

上を見上げると木々の隙間から星の光が僅かに見えた。木の葉まで発光しているから霞んで見えにくいものの、日の出はまだ先だと思わざるを得ない。

別に星の位置とか見てもどっちに進めばいいかなんてわからないけどね！

とにかく辺りを見回して一番暗くなっている方向に向かおう。光
ってるのは青の森だけのはずだから、暗い場所って言えば森の外側
だ。そう思ったけど。

「……明るい……」

どこを見ても青の森が続くばかり。煌々として目に対する刺激の
強い光は途切れるところをしらなかった。

「これ完全に迷子じゃん……！」

どうやってここまで来たのかすらわからないけど！　もしかして
誰かに連れてこられた！？　ないない、だって私自分の足で立つて
たし！

そんなことはないと思うけど……夢……とか？

考え込んでいた私の目の前の茂みから、葉と葉のこすれ合う音が
した。

青の森に踏み入れた瞬間、足の裏で感じる地面が硬くなった。柔
らかい小粒の砂ではなく幾重もの木の根を支える砂利すらも混じっ
た土だ。

ハルの姿はとうに目の前から消えていた。この鬱蒼とした森の中、
ただでさえ不気味な生き物の気配を感じる。その中にフラフラと迷
い込んで行ったたった一人目印も無い人間を見つけるのにはこの森

は広すぎた。

風が吹きつけて木々が騒ぐ。不穏な予感に胸もざわつく——その時。

森の奥から絶叫が響いた。

「なッ、なんじゃこりゃああ——ツツ!？」

草がガサガサ揺れていた時から嫌な予感はしてたんだ！ してたんだ、けど！

今現在、青の森に一人きり。周囲を囲むのは発光する木々と、鈍い光を反射した赤い生物。大きなハサミを二本持ち、まるで甲殻類のように硬そうな背中を上に向けて地面を這うようにこちらを窺ってくる。

私は知っている。この生物の名称を。なんと呼び、なんとかくべきかを。しかしそれは私の知るものよりも、遥かに大きかったのだが。

サソリだった。

「しかもでかいし……」

こちらにいる虫は日本人に対する嫌がらせなのか、どいつもこいつも巨大化したものが多すぎる。とは言っても例のムカデ程大きいわけじゃないから多少自分の力でもなんとかなるかもしれない。

縦は少し膨れ上がり私の膝くらいまで、横幅は畳半畳つてところ。生々しい赤色にいくつもの凹凸が目立つ。ハサミは鋭利かつ滑らかで、あれに傷つけられたらひとたまりもないだろう。

なんて考察している余裕は私には無かった。なぜならそう、お察しの通り——一匹だけだと思っただけの間に、かきまわっていたからだ。

『いや少し前に魔物に喰われた奴がいてね。あの時も砂漠での任務だったんだよ』

『その時に魔物に喰われちゃった奴がいてな。こう、むしゃむしゃと』

——なにコイツら……私を喰うのか!? 喰う気なのか!?

自分が食べられてる姿なんて想像したくないし想像しようとしても脳が勝手にフィルターをかけてしまう。ぎち、と相手の一匹が動く音はつきり私の耳に届いた。

全部で何匹だろう、どんどん集まってきた。

一瞬サソリのハサミが動いた。来る、と腰を低くする。剣を抜いて万全に備えた瞬間予想以上に重い斬撃が足元に向かって飛んできた。

「うわっ」

咄嗟に跳ねてハサミを踏みつけるともう一本飛んでくる。そのあまりの鋭さに冷や汗が吹き出した。こいつら本当に私を食べる気なんだ、と。

硬い甲羅に向かって剣を振り下ろし、そのまま跳び箱を飛び越えるように宙に向かって飛び出した。

一步を大きく踏み出し、真後ろを追ってくるサソリ集団を引き離そうとするけれど片手に剣を持った状態じゃどうしても動きが鈍ってしまふ。

と、真横に暗い影が映った。

「!？」

驚きに一瞬足が止まる。木の枝に尾を引っ掛けて自分の体を吊ったサソリがハサミを振りかざしている。その光景がゆっくりと眼球に染み渡る。

——刺さる！

咄嗟に剣で弾こうと腕を上げたその時、何かが私の真横を通過した。

シュン！ と頬の横にある髪の毛の襟足を掠めて飛んでいったそれはこちらに向かってハサミをきらめかせるサソリに深々と突き刺さった。わずかに開いた甲殻の隙間に潜んだ関節に。

「いやああ————ッッ!？」

一瞬で起こったグロテスクな惨事に、（仮にも）乙女としての嫌悪感が走った。力無く地面に落ちたサソリの背中。そこに埋まっているのは銀のナイフ。本物のナイフだったのだ。

そして「伏せろ！」という鋭い声が混乱する思考回路をかつさばいた。いつも聞いている声。いつも従っている声。反射で身をかがめるとその上をナイフと同じ色の剣が通り抜ける。

空中から飛び出してきたサソリに向かって正面から一撃。それだけであんなに重そうな化け物が吹っ飛ぶ。

「ハル、もういい立て！」

「ラジャーッ！」

言われた通り体勢を立て直す。隣に立っている人物を見る余裕は無かった。私を食べようと集まったサソリの集団は上下左右から襲いかかってきた。

——き、気持ち悪すぎる！

ようは最初に見たとおり関節を狙えばいいらしい。それだけでしばらく相手は動きが取れなくなる。動物の関節ってやっぱ大事だね！

「これじゃ埒が開かないけど！」

「後ろに退避する、五秒持ちこたえろ！」

五秒……五秒でいいの！？

そんなこと私が聞くまでもないんだろうけど、と前からくるサソリからなんとか背後を死守する。そして後ろからは——なんだか壮絶な音が聞こえますが！

剣でサソリの甲羅を打ち返した時、5、とカウントを終えた。

「ハル！」

「了解っ！」

そして私は一目散に逃げ出した。

とにかく前に行く背中が遅れを取ることはしてならない。ガチャガチャと背後から迫って来るサソリに若干の恐怖心を覚えながらも足は止めない。

道端に転がる異常な数の甲殻類。空に腹を向けて、まだ何匹が生きていたかほぼ絶命手前。そんな仲間を踏みつぶしながら私たちを追いかけてくるサソリは余程腹が減っていると見える。

もしかしたら上から奇襲をかけられるかもしれない。そう思って視線をさまよわせた時。

——…なに？

何かを感じる。その方向に向かって顔を上げると、森の中に開けた空間がある。青い光で照らされたそこに、立っているのは一つの小さい門だった。

石を積み上げて造られた、ドアの無い枠みたい。たったそれだけのはず。建物も何もない、はずなのに。

その門を通して見た向こう側には森は（・）無かった（・・・）。

森では無い。そこにあるのは硬質そうな床の細い道。建物が無いのに。門しか無いのに一体何故。

その方向から微かに感じる。これは私がアルカナだから直観的に

感じるものなのか。ただあそこには必ず何かが、ある。

「エルガー、右！」

前を走っていたエルガーも顔を上げ、門を見て一瞬表情を硬くした。サソリ集団に追われている今、考えている余裕は無い。

「行け！」

勢いよく方向転換、勿論サソリ達もついてくる。茂みを飛び越えその門に向かう時、エルガーが私にはわからない言葉を小さく呟いた。

魔法だ。

門をくぐり抜けるその時、彼が右手を軽く翳した。そこから火花が散ったかと思うと次に瞬きを終えた時には門の石が火を上げて弾きとんだ。

騒音。

石の礎が崩れ落ちて、ギリギリで滑り込んだ「こちら側」の壁が一点に吸い込まれるように閉じる。最初から何も無かったように静かになった壁、サソリも飛び散った石の一片すらも入ってはこなかった。

「おわ、った……！」

その場にズルズルと座り込んでしまった私は、しばらく息を整えた。足から伝わる感触は冷えて固く滑らかだ。

周囲には何もない。明るくは無いが歩くのに支障は無い程度の青い光で充満した、硬質な壁と床。まるで整備されたビルの一角のよ

うだった。今までサソリに追われて走っていた森の中とは打って変わって静まりかえっている。

「ここ、どこ？」

「さあな」

立ちつばなしのエルガーは剣を鞘に仕舞って息をつく。冷や汗ひとつかいていない涼しげな雰囲気、冷静さを感じた。私は何が起ったのかわからなくて茫然とするしかないけど。

「おそらく魔術でどこかに繋がられていたんだろう」

「どこかって……帰りはどうするの？」

「これは入口だ。出口は外側からは見えない、別の場所にある」

立ち上がった私は軽く全身の砂を払って頭上を振り仰いだ。高い天井にはこちらを見る私自身の姿がしっかりと写っている。

全面磨き上げられたガラスのような素材、道幅は大人二人が並んで少し余裕のある程度。青い光がそこかしこで光っているし視界も良好。後ろには壁があるのみ、そして目の前には一本道。

「何かの……罠、とかは？」

「あるとしたら相当手の凝ってる人間の仕業だ。だがこれは人が造ったにしては大きすぎる。もともとあったものを誰かが何かに利用したんだろう」

「何か？」

「例えば、」

エルガーは私を一瞥した。

「預言書を守っていたり」

「あ、なるほど」

だからアルカナの私が引き寄せられたのか。なんとなく何かありそう、なんて漠然とした感覚だったけど。

「出口も無いし、さっさと行くぞ」

勝手に歩いて行ってしまうエルガーの後ろ姿に、私は一人複雑な心境で踏み出せずにいた。

ここには確かにアルカナや預言書と関係の深いものが眠っている。けど同時に、危険なものが待ち受けている気がする。

ウォーターフォードに来て冴えた私の『嫌な予感』は、日に日に的中確率を上げていた。

15 青の森（後書き）

更新遅れて申し訳ないです。

クリスマスまでにはもう一本あげたいと思います！

それから拍手小話を更新してみたので、よかったらどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8989r/>

アルカナの行方

2011年12月17日03時58分発行